高崎市文化財調査報告書第372集

連雀町遺跡

－多機能型住居整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査－

2016

高崎市教育委員会
株式会社 オアシス
有限会社毛野考古学研究所

例　言

1. 本書は、高崎市多機能型住居整備事業に伴う逼宿町遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本調査及び整理作業から本書作成に至る経費は、開発事業主である株式会社 オアシス、医療法人 山崎会、社会福祉法人 宏志会に負担して頂いた。
3. 本遺跡は、群馬県高崎市逼宿町 40 － 1 番地、田町 71 － 1・71 － 2 番地に所在している。
4. 本調査及び整理作業は、事業主・高崎市・有限会社毛野考古学研究所による三者協定を締結し、高崎市教育委員会の指導・監督のもと、委託を受けた有限会社毛野考古学研究所が実施した。
5. 発掘調査は、南田法正（有限会社毛野考古学研究所）が担当した。
6. 発掘調査・整理作業は以下の期間で実施した。
   【発掘調査】　平成 27 年　4 月 8 日　～　同年　7 月 27 日
   【整理作業】　平成 27 年　7 月 1 日　～ 平成 28 年　6 月 15 日
   本遺跡は、高崎市教育委員会の遺跡番号で 633 である。
7. 本書の執筆については、1 章を田辺芳昭（高崎市教育委員会）、それ以外の執筆と編集を南田が行った。
   遺物の写真撮影は井上　太（有限会社毛野考古学研究所）がおこなった。
   出土人骨および動物遺体の鑑定・分析は横崎修一郎氏（生物考古学研究所）に依頼し、Ⅴ章を執筆して頂いた。
8. 本書に関わる資料は、一括して高崎市教育委員会が保管している。
9. 発掘調査・整理作業に携わった方々は以下のとおりである。（順不同・敬称略）
   【発掘調査】
   高橋奈緒　岡村美也子　荒井滋道　碓井俊夫　小田満義　川口末治　金田　守　城田京子
   松本幸男　三木武夫　宮寺正明
   〔遺構測量〕小出琢磨・設楽和也（有限会社毛野考古学研究所）
   〔空　撮〕和久拓照（有限会社毛野考古学研究所）
   【整理作業】
   磯　洋子　小谷貴世美　関小百合　竹中美保子　真下弘美　亀田浩子　舎田幸子　武士久美子
   日沖美奈子　深谷道子　山口昌子　半澤利江　永井祐二　山下奈邦子
10. 発掘調査の実施から報告書の刊行に至る過程で下記の機関・諸氏のご協力を賜った。記して心より感謝申し上げます。
   （順不同・敬称略）
   株式会社オアシス　医療法人 山崎会　社会福祉法人 宏志会　株式会社 企画社
   高崎市建築住宅課　高崎市観光課　高崎市営タワーパーキング　逼宿町自治会　高崎祭実行委員会
   浄土宗 大信寺　島津製作所創業記念資料館　株式会社香蘭社　神電気工業株式会社　株式会社松風
   公益財団法人山田文庫　郷政博物館　郷政博物館資料センター　有田町歴史民俗資料館　とこなめ陶の森博物館
   山梨県立博物館　群馬県立文書館　富岡市教育委員会　生物考古学研究所　有限会社スミヤ測量
   瓦吹　肇　横崎修一郎　小梁康寛　濃塚徳司　片野雄介　水谷貴之　中島直樹　河野和也　村山　卓
   井村憲義　川勝美早子　森　知巳　能登万祐子　阿久津愛子　岩井幸三　岩井敏枝　岸　豊　高橋　充
   外山政子　三浦京子　鈴木徳雄

凡　例

1. 挿図中の北方位は座標北を、断面水準線数値は海抜標高を示す。座標は世界測地系を用いた。
2. 遺構・遺物図の縮尺は以下の通りである。挿図中にはスケールを付して表示している。
   遺構　全体図　1/100
   　土坑・溝・井戸・建物跡等個別平面図・土層断面図：1/60、1/80、1/100
   遺物　陶磁器類・土器類・瓦・金属製品・石製品等：1/1、1/2、1/3、1/4、1/6、1/10
3. 遺構覆土および土器の色調観察は
   『新版 標準土色帖』（農林水産技術会議事務局 財団法人日本色彩研究所監修 2006）に従っている。
4. 遺物番号は、遺物図版・実測図・観察表ともに共通である。
5. 遺構一覧表・遺物観察表に示した計測値・形状などの（　）は復元推定値・推定形状、〈　〉は残存値を表す。
6. 本書で使用する火山灰指標テフラの略称は以下のとおりである。
   As－A：浅間 A 軽石（1783 年）　　As－B：浅間 B 軽石（1108 年）
   As－C：浅間 C 軽石（3 世紀後葉～末葉）　　As－YP：浅間－板鼻黄色軽石（13000－14000y.B.P）
   As－BP Group：浅間－板鼻褐色軽石群（19.000－24.000y.B.P）
   Hr－FA：榛名山二ツ岳渋川テフラ　（Hr－S・6 世紀初頭）
   Hr－FP：榛名山二ツ岳伊香保テフラ（Hr－I・6 世紀中葉）
   B混土：As－B 混入土　　A混土：As－A 混入土
7. 本書掲載の第 1 図は 高崎市発行 1/2,500『高崎市都市計画基本図』、
   第 2 図は国土交通省国土地理院発行 1/25,000『前橋』『下室田』を使用した。
8. 近世・近代遺物の観察・分類・時期判定にあたっては、以下の文献を引用・参照した。
   （財）瀬戸市埋蔵文化財センター　2006『江戸時代のやきものー生産と流通ー』
   （財）瀬戸市埋蔵文化財センター　2002『江戸時代の瀬戸窯』　九州近世陶磁学会　2000『九州陶磁の編年』
   新宿区大日本印刷遺跡調査団　1998『市谷左内町遺跡 I』　豊島区遺跡調査会　2006『長崎並木 I』
   新宿区市谷本村町遺跡調査団　1995『市谷本村町遺跡』　豊島区遺跡調査会　2010『雑司が谷 II』
   （財）群馬県埋蔵文化財調査事業団　2003『上福島中町遺跡』　高萩市教育委員会　2013『松岡城跡 E 地点』

目　次

例　言
凡　例
目　次
Ⅰ　調査に至る経緯 …… 1
Ⅱ　地理的・歴史的環境 …… 1
　1．地理的環境 …… 1
　2．歴史的環境 …… 2
Ⅲ　調査の方法と経過 …… 5
　1．調査の方法 …… 5
　2．調査の経過 …… 5
Ⅳ　基本層序 …… 6
Ⅴ　遺構と遺物 …… 8
　1．遺跡の概要 …… 8
　2．1面（近現代）…… 21
　3．2面（近世・As－A以降）…… 25
　4．3面（近世・As－A降灰直前～直後）…… 26
　5．4面（近世・As－A降灰前）…… 27
　6．5面（中世）…… 29
　7．6面（As－B直下）…… 29
　8．7面（古代）・8面（古墳時代）…… 29
　9．出土遺物 …… 29
Ⅴ　自然科学分析 …… 78
　1．人骨の分析鑑定 …… 78
　2．動物遺体の分析鑑定 …… 80
Ⅵ　まとめ …… 81
遺構写真図版
抄　録
奥　付

挿　図　目　次

第1図　調査区域図 …… 1
第2図　遺跡の位置 …… 2
第3図　周辺の遺跡 …… 3
第4図　基本層序 …… 6
第5図　1面（近現代）遺構全体図 …… 7
第6図　2面（近世・As-A以降）遺構全体図 …… 9
第7図　3面（近世・As-A直前～直後）遺構全体図 …… 10
第8図　4面a（近世・As-A降灰前）遺構全体図 …… 11
第9図　4面b（近世・As-A降灰前）遺構全体図 …… 12
第10図　4面c（近世・As-A降灰前）ピット全体図 …… 13
第11図　掘立柱建物跡個別想定図（1）…… 14
第12図　掘立柱建物跡個別想定図（2）…… 15
第13図　5～8面（中世・As-B直下・古代・古墳時代）遺構全体図 …… 16
第14図　各遺構土層断面図（1）…… 17
第15図　各遺構土層断面図（2）…… 18
第16図　各遺構土層断面図（3）…… 19
第17図　各遺構土層断面図（4）…… 20
第18図　遺物実測図（1）…… 59
第19図　遺物実測図（2）…… 60
第20図　遺物実測図（3）…… 61
第21図　遺物実測図（4）…… 62
第22図　遺物実測図（5）…… 63
第23図　高崎城下町絵図（1）…… 88
第24図　高崎城下町絵図（2）…… 89
第25図　近現代郵便局周辺地図・1面遺構想定図 …… 90
第26図　高崎城下町絵図（3）・史料1 …… 91

遺　物　図　版　目　次

遺物図版（1）　電池・電気・電信・電話関連遺物①
　電1～13、電35 …… 39
遺物図版（2）　電池・電気・電信・電話関連遺物②
　電14～34 …… 40
遺物図版（3）　近代基礎　2・3・5・7/
　土坑 SK-01・02、SK-05① …… 41
遺物図版（4）　土坑 SK-05②、SK-06・11・12・15・21～
　25・27・28、SK-35① …… 42
遺物図版（5）　土坑 SK-35②、SK-38・39・44・55・56、
　SK-57① …… 43
遺物図版（6）　土坑 SK-57②、
　SK-59・60・62・65、SK-66① …… 44
遺物図版（7）　土坑 SK-66②、SK-67・68・69・79・
　81～84・86・100・101 …… 45
遺物図版（8）　土坑 SK-106・115・118・123・129/
　不明遺構 SX-01・02/ピット SP-21、
　P-22・45・92/溝 SD-03・06/SD-10① …… 46
遺物図版（9）　溝 SD-10②（上層・中層・下層）…… 47
遺物図版（10）　溝 SD-10③（下層）…… 48
遺物図版（11）　溝 SD-10④（下層）…… 49
遺物図版（12）　溝 SD-10⑤（下層・最下層）…… 50
遺物図版（13）　溝 SD-10⑥、
　SD-11・13・17・20・22/埋甕遺構 SJ-06①…… 51
遺物図版（14）　土坑 SK-115/埋甕遺構 SJ-06②、SJ-07・09
　井戸 SE-03・05/SL-02/礎石 SS-02
　高坑 ST-01/遺構外出土遺物① …… 52
遺物図版（15）　遺構外出土遺物② …… 53
遺物図版（16）　木製品① 木1～14（下駄）…… 54
遺物図版（17）　木製品② 木15～29
　（農具・曲物・杓子・食器）…… 55
遺物図版（18）　木製品③ 木30～46（柄杓・箒・
　位牌・羽子板・炭化板付着板・建築材・建具材・杭）…… 56
遺物図版（19）　木製品④ 木47～54（漆椀）…… 57
遺物図版（20）　木製品⑤ 木55～66（漆椀、櫛）…… 58

挿 表 目 次

表 1　周辺遺跡一覧 …… 4
表 2　遺構一覧表 近代基礎 …… 30
表 3　遺構一覧表 土坑 ①（SK-01 ～ 25）…… 30
表 4　遺構一覧表 土坑 ②（SK-26 ～ 60）…… 31
表 5　遺構一覧表 土坑 ③（SK-61 ～ 94）…… 32
表 6　遺構一覧表 土坑 ④（SK-95 ～ 126）…… 33
表 7　遺構一覧表 土坑 ⑤（SK-129 ～ 131）…… 34
表 8　遺構一覧表 不明遺構 …… 34
表 9　遺構一覧表 根立柱建物跡・柱穴列 …… 34
表 10　遺構一覧表 ピット ①（SP- 1 ～ 28）…… 34
表 11　遺構一覧表 ピット ②（P-01 ～ 57）…… 35
表 12　遺構一覧表 ピット ③（P-58 ～ 117）…… 36
表 13　遺構一覧表 溝 …… 37
表 14　遺構一覧表 道路状遺構 …… 38
表 15　遺構一覧表 埋桶遺構 …… 38
表 16　遺構一覧表 炭土・炉 …… 38
表 17　遺構一覧表 井戸・礫石・墓坑 …… 38
表 18　出土遺物観察表（1）
電池・電気・電灯・電話開通遺物 ① …… 64
表 19　出土遺物観察表（2）
電池・電気・電話・電話開通遺物 ② …… 65
表 20　出土遺物観察表（3）近代基礎 ① …… 65
表 21　出土遺物観察表（4）近代基礎 ② …… 66
表 22　出土遺物観察表（5）土坑 ①（SK-01 ～ 27）…… 66
表 23　出土遺物観察表（6）土坑 ②（SK-28 ～ 59）…… 67
表 24　出土遺物観察表（7）土坑 ③（SK- 60 ～ 84）…… 68
表 25　出土遺物観察表（8）土坑 ④（SK-88 ～ 129）…… 69
表 26　出土遺物観察表（9）不明遺構・ピット（柱穴）…… 69
表 27　出土遺物観察表（10）溝 ①（SD-03）…… 69
表 28　出土遺物観察表（11）溝 ②（SD-03 ～ 10 下層）…… 70
表 29　出土遺物観察表（12）溝 ③（SD-10 下層）…… 71
表 30　出土遺物観察表（13）溝 ④（SD-10 下層）…… 72
表 31　出土遺物観察表（14）溝 ⑤
（SD-10 下層・最下層、SD-11・13）…… 73
表 32　出土遺物観察表（15）流 路（SD-17・20・22）…… 74
表 33　出土遺物観察表（16）
埋桶遺構／焼土・炉／井戸／礫石／墓坑 …… 74
表 34　出土遺物観察表（17）遺構外出土遺物 …… 75
表 35　出土遺物観察表（18）木製品 ① …… 76
表 36　出土遺物観察表（19）木製品 ② …… 77

遺構写真図版目次

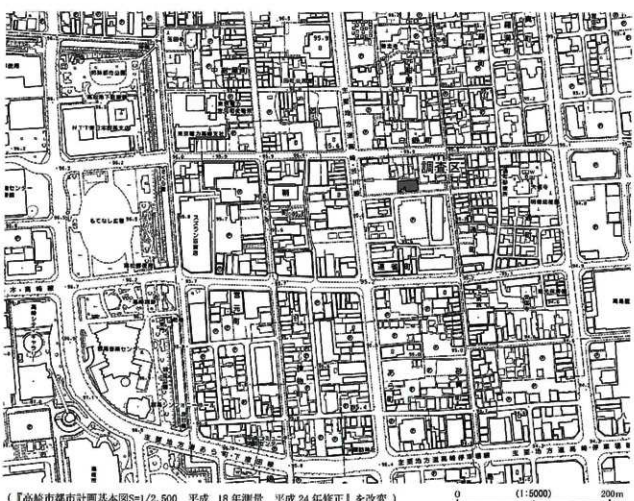
PL. 1　遺構可遺構 4 面（As-A 降沢前）全景
遺構可遺構 4 面（As-A 降沢前）中心部全景
PL. 2　近代基礎1～3/SD-03 樋管 全景（1面・東）
近代基礎5・6・7/SD-03・06 樋管 全景（1面・西）
近代基礎5 柱材断立状態（1面・南面）
近代基礎5・6・7 掘り方（SD-12・19）全景（1-2面・西）
近代基礎5 柱材 /SD-03 樋管・土管検出状況
（1面・南面）
近代基礎6・7 近景（1面・北）
SS-01（戦後局舎基礎）近景（1面・南東）
SB-01 レンガ層コンクリート基礎出土状況（1面・南東）
PL. 3　SK-04・08・12・16/ 近代基礎1～3/SD-03 遺構確認状況
（1面・東）
SK-11 土層断面 焼土廃棄状況（1面・西）
SK-12・16/SJ-02・03 全景（1面・東）
SK-15 板基礎・柱根・廃棄・供養石 全景（1面・南東）
SK-21/SS-03 遺物出土状況（2面・東）
SK-27 松丸太出土状況 / 近代基礎8（樹立柱）
全景（1面・南）
SK-27 集積鉄物骨接出状況 近景（1面・北）
SK-25/SJ-04 全景（2面）,SK-28（炭化材）-29 全景（4面・南）、
SK-06 全景（1面）
PL. 4　SK-35a 木製品検出状況・全景（2面・南東）
SK-35b 建築材・曲物・陶器類出土状況（2面・南）
SK-01 炭化材検出状況・全景（4面・東）
SK-36 ～ 38・94・95・107 全景（2面・南）
SK-56 炭化材検出状況（4面・南東）
SK-60 上層焼土層 遺物出土状況（2面・北西）
SK-62 粮・陳腐検出状況（2面・南）
SK-66 遺物出土状況近景（4面・南東）
PL. 5　SK-69a 全景（4面・南西）
SK-79 遺物出土状況（4面・南）
SK-98 土層断面（2面・西）
SK-101 動物骨・植材検出状況・全景（2面・東）
SK-115 全景（4面・南）/P-65（中央下）・P-66（左下）
SX-01（四角状）全景（4面・南）
SX-01・02 / SC-117 全景（4面・西・西）
SH-03 石列・礫敷 全景（4面・北西）
PL. 6　P-21 柱根・隠板跡 検出状況（4面・南）
SD-10 全景（4面・東）
SD-10 中央部 As-A 遺構の源岸板（2面・北東）
SD-10 全景・底面稲出土状況（西）
ベルト上面が As-A 直下 /
左上は As-A に張り込まれた近代基礎7掘り方
SD-10 As-A 降灰直前頃の護岸状態（3-4面・南西）
SD-10（SD-06・SD-19）西壁土層断面（1-4面・東）
SD-10 下層 左：曲物、右：寛永通貨銭籍
SD-10 上層 漆椀 左：笹ゑ、右：剣崎墨草
北東隅遺構群全景 SD-10 護岸縁および SB-12 礎石 /
SD-10（SD-19）護岸板塀出状況（4面・南西）
PL. 7　SD-11 全景・遺物出土状況（4面・南）
SD-13a 全景（4面・北）
SD-13a 護岸幅用板瓦 近景（4面・北西）
SD-16 全景・土層断面（8面・北東）
SD-17 全景・杭検出状況（4面・南）
SD-21 全景 /SJ-11 足場礎数・埋炭し礎 検出状況
（3-4面・南）
SD-20（SK-38 掘り方底面）遺物出土状況（4面・南西）
SD-21・25 / SJ-11 全景（4面・南）
PL. 8　SF-01 検出状況（1面・北）
SN-01 As-B 下水田 畦畔検出状況（6面・西）
埋桶群全景 SJ-01・02・05・06/SK-42・43/ SD-12
（2面・西）
SJ-05 全景（2面・南）
SJ-06 土層断面 下層は As-A（3面・南）
SJ-07 全景（2面・東）手前は SK-86
SJ-09・SK-116・SK-115 調査状況（4面・東）
SL-02 焼土・灰検出状況（1面・南）
PL. 9　SE-01 レンガ出土状況（1面・南西）
SE-03 全景（4面・西）
ST-01 全景・人骨出土状況（2面・北）
ST-01 頭蓋骨近景（2面・西）
遺構確認状況（2-4面・北西）
ST-01（白色長灰層）・SK-63（焼土廃棄）・
SK-64（As-A 廃棄土坑）・SK-66（長方形焼土多量）
基本層序トレンチ・SX-01 畦畔 土層断面（6面以下・西）
試掘2トレンチ 南壁土層断面（北）
調査区南壁 土層断面（SK-77・SE-04 周辺・北）
調査区南壁 土層断面（ST-01 周辺・北）
近代基礎・SD-03 遺構確認作業風景（東）

Ⅰ　調査に至る経緯

平成 27 年 1 月、医療法人山崎会　理事長　山崎学氏（以下事業者）より高崎市教育委員会（以下市教委）に多機能型住居建設地の埋蔵文化財の状況について照会があった。市教委は、照会地は埋蔵文化財包蔵地で、高崎市建築住宅課の依頼により平成 25 年 12 月 10 日に実施した試掘調査によって、平安時代水田跡及び高崎城の城下町に関連する遺構が確認されており、工事と埋蔵文化財保護との調整が必要な旨を回答した。

その後、埋蔵文化財保護について事業者と協議を行ったが、計画変更は不可能ということなので、平成 27 年 3 月、開発予定地について記録保存の発掘調査を行うことで合意した。

発掘調査は、市教委の作成する調査仕様書に基づく指導・監理の下、有限会社毛野考古学研究所に委託して実施することとなり、平成 27 年 3 月 31 日付けで高崎市教育長・事業者・有限会社毛野考古学研究所の三者協定を締結し、さらに協定に基づき平成 27 年 4 月 4 日付けで事業者と有限会社毛野考古学研究所の二者で発掘調査委託契約が締結された。



（『高崎市都市計画基本図S=1/2,500　平成 18 年測量　平成 24 年修正』を改変）

第 1 図　調査区域図

Ⅱ　地理的・歴史的環境

1．地理的環境

連雀町遺跡は群馬県高崎市の中心部、連雀町・田町・白銀町にまたがるように所在する。高崎市は関東平野最奥部にあたり、北西に榛名山、北東に赤城山を望む。地形的には五つ（低地帯・低台地・洪積台地・扇状地・丘陵）に大別できるようである。

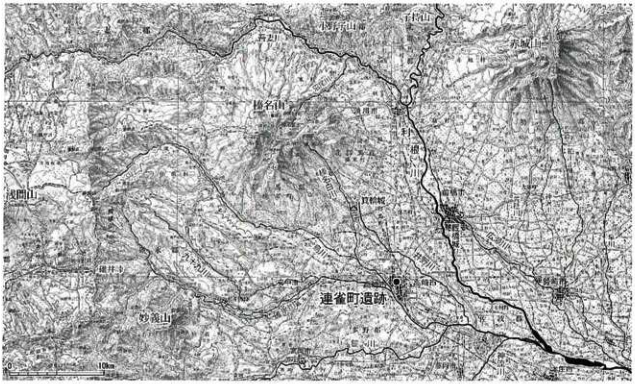
井野川と烏川に挟まれた市の中央部は「高崎台地」と呼ばれる低台地にあたり、北西－南東方向に流下する中小の河川や支谷に浸食される。井野川と広瀬川（旧利根川）に挟まれた広大な地域が「前橋台地」であり、現利根川は台地中央部を貫流する。高崎台地～前橋台地の下部には、利根川扇状地が形成した厚さ 100 mの前橋砂礫層が堆積する。浅間－板鼻褐色軽石群（As－BP Group）降下期間中の 2.1 万年前頃には、黒斑山の崩壊に伴う浅間応桑岩屑なだれに起因した前橋泥流が、15 m前後の厚さで前橋砂礫層を覆う。1.6 万年前頃、榛名山東南麓に起こった陣場岩屑なだれは最大厚 40 mを測る「相馬ヶ原扇状地」を形成する。これが原因となって、利根川が広瀬川低地へと河道変遷したといわれている。その頃の烏川は現井野川あたりを流れていたようで、一帯に井野川砂礫層を堆積させる。1.3 万年前頃には浅間－板鼻黄色軽石（As－YP）が降下し、1.1 万年前頃に井野川泥流（もしくは高崎泥流）が数mの厚さで堆積する。これ以降、烏川と井野川は現河道に固定され、高崎泥流堆積物と前橋泥流堆積物を浸食しながら、高崎台地と井野川段丘面を形成する。高崎台地南縁は井野川・烏川・鏑川の合流点となっている。台地北縁は相馬ヶ原扇状地末端に接し、井野川左岸では扇状地に特徴的な細長い舌状台地と低地が南北方向に交互に並ぶ。榛名白川右岸の扇状地では放射状に展開する浸食谷が深く、様相が異なる。

これらとは対照的に、烏川・碓井川右岸にあたる市の南西側は安中市・富岡市・榛名町等から続く第三紀系丘陵の東端部にあたり、「観音山丘陵」・秋間丘陵と呼ばれる。標高 200 ～ 300 mながら、起伏の激しい複雑な地形が発達する。秋間丘陵の東縁は学校橋谷戸を境にして三角形状の洪積台地である「八幡台地」となり、烏川と碓井川の合流点に接する。ローム層が厚く堆積し、浅間－板鼻黄色軽石（As－YP）も比較的厚い。台地南北縁は急崖状を呈し、台地内部は東西方向の谷地に開析される。

以上の高崎台地・観音山丘陵・八幡台地を浸食する井野川・烏川・碓井川は、幅の広い低地帯をそれぞれ形成しており、自然堤防状の微高地や段丘面を形成している。本遺跡は高崎台地上に立地している。

2. 歴史的環境

本遺跡一帯は前橋泥流が堆積しており、旧石器時代の遺跡は未確認である。縄文時代では、上中居町や下中居町の水成ロームが堆積した微高地上に、中期後葉～後期前葉の小規模集落が点在する。弥生時代中期後半になると烏



第２図　遺跡の位置　（国土地理院発行 40 万分の１）

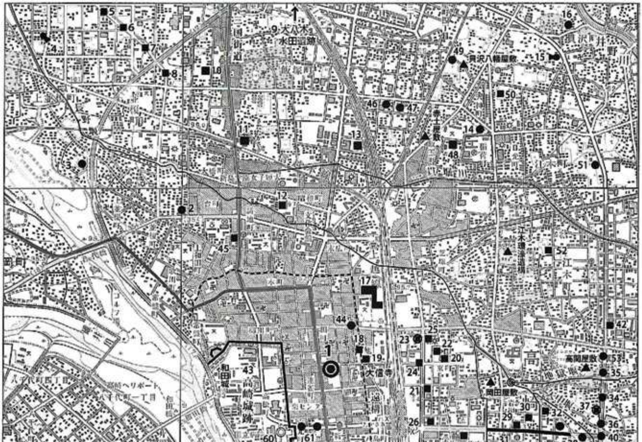
川左岸の自然堤防上や井野川沿岸での居住が活発となり、高崎城遺跡では中期後半の環濠集落や周溝墓が構築される。高崎競馬場遺跡では、最近の調査で中期末頃の土器が大量に出土している。後期以降も烏川・井野川一帯は遺跡数が多く、低地開発の拠点的様相がうかがえる。

古墳時代前期になると高崎－前橋台地の平野部で遺跡数は急増する。井野川沿いの微高地上では前期古墳や周溝墓、集落が広く展開する。上並榎町では As － C 下水田や Hr － FA 下水田がまとまって検出され、5世紀後半には上並榎稲荷山古墳が築造される。古代では As － B 下水田の調査事例が多く、真町Ⅰ遺跡・旭町Ⅰ遺跡では9世紀の洪水層直下の水田跡が検出されており、本遺跡の洪水層と同一の可能性がある。

中世には高崎城の位置に長野氏が築いた和田城があり、烏川右岸には鎌倉道が通過していた。

天正 18（1590）年、井伊直政が箕輪に入城する。慶長3（1598）年、直政は和田城の地に高崎城を築き、初代高崎藩主となる。連雀町などは箕輪城下から町ごと移転している。2代酒井家次が慶長 11（1606）年に城下整備に着手し、7代安藤重博の天和2（1682）年に職人町ができ、城下町形成がほぼ完成したとされる。遺跡地の西は中山道に、南は大信寺参道に面する。調査区の大半は大信寺門前地だったようで、寺侍や中間（ちゅうげん）の居住地とも言われる。明治 18（1886）年の迅速図では、本遺跡のある区画は四周に建物が描かれ、中央は空白となっている。

明治 24（1891）年5月、当地に高崎郵便電信局が設置される。明治5（1872）年7月、高崎新町の庄屋宅をはじめ、県内 29 ヶ所に郵便取扱所が設置された。明治 18 年、新町に高崎郵便局（1等）として新築されるが、同 22 年に類焼する。連雀町移転の契機であろう。調査区南側は群馬郡役所・高崎警察署・消防署が建ち並ぶ官公庁街であった。



第３図　周辺の遺跡（国土地理院発行 25.000 分の１図）

明治37（1904）年1月26日に鞘町より出火した火事で局舎が類焼し、翌年3月に新築される。明治39（1906）年12月に電話交換業務を開始する。大正14年には、郵便局北側の敷地を新たに購入してコンクリート造の西洋式電話局を新築する。大正期の地図では建物が数棟描かれている。昭和20年、建物疎開のために局長室や会計・庶務の建物を取り壊したようである。昭和22年の米軍航空写真には白い郵便局舎が写っている。昭和26年1月に焼失し、7月に新築される。その後昭和34年12月に新築され、昭和52年高松町に移転するまで存続した。

表1　周辺遺跡一覧

番号	遺跡名	概要	文献
1	浦東町遺跡	近代郵便局周辺遺構、近世高崎城下町、B下水田、古代供水路、古墳時代の溝	本報告
2	景優石遺跡	古墳後期住居・須恵製品工房跡	『市内遺跡等発掘調査報告書』高崎市教育委員会 1991
3	上並榎遺跡第2遺跡	古墳後期住居・須恵製品工房跡	『上並榎遺跡第2遺跡』高崎市遺跡調査会 1992
4	上並榎遺跡山古墳	墳丘測量、5世紀後半	『上並榎遺跡山古墳』高崎市文化財調査報告書46集
5－1	上並榎御所所遺跡	B下水田、FA下水田、C下水田	『上並榎御所所遺跡』高崎市教育委員会 1992
5－2	上並榎御所所II遺跡	B下水田、FP下水田、FA下水田、C下水田	『上並榎御所所II遺跡』高崎市遺跡調査会 1997
6	上並榎下松I・II遺跡	B下水田、FA下水田、C下水田	『上並榎下松I遺跡』市教委 1991、『上並榎下松II遺跡他』市教委 1993
7	並榎北遺跡	C下水田、弥生時代水田	『並榎北遺跡』高崎市教育委員会 1988
8	並榎北II～V遺跡	B下水田、FA下水田、C下水田	『並榎北II・III・IV・V遺跡』高崎市教育委員会 1996
9	大八木水田遺跡	B下水田	『大八木水田遺跡』高崎市教育委員会 1979
10	飯塚新田西II遺跡	B下水田、FA田水照下水田	『飯塚新田西II遺跡』高崎市遺跡調査会 1987
11	飯塚入道塚遺跡	B下水田	『飯塚入道塚遺跡』高崎市遺跡調査会 1996
12	昭和町I遺跡	平安時代水田、中近世土坑	『昭和町遺跡II　資料編2　遺跡古代II』2000
13	関原東金井遺跡	B下水田	『市内遺跡等発掘調査報告書』1992
14	稲荷町I遺跡	弥生中期住居・須恵窯跡、古墳後期住居	『稲荷町I遺跡』高崎市遺跡調査会 1992
15	五霊神社古墳	前方後円墳・6世紀後半	『上毛古墳綜覧』1938、『新編高崎市史　資料編1　原始古代I』1990
16	貝沢I遺跡	土師器（5世紀末～6世紀初頭）	『市内遺跡等発掘調査報告書』高崎市教育委員会 1994
17	江木遺跡西遺跡	近世溝、B下水田、古墳時代溝	『江木遺跡西遺跡』高崎市遺跡調査会 1995
18	高町I遺跡	高崎城遺構、A下水田復旧畑、B下水田、9c洪水砂下水田	『高町I遺跡』高崎市教育委員会 1995
19	新町I遺跡	B下水田、9c洪水砂下水田	『市内中世開墾史発掘調査報告』高崎市教育委員会 1996
20	新町I遺跡	近世土坑・溝、B下水田	『新町遺跡』高崎市教育委員会 1989
21	新町II遺跡	B下水田	『市内遺跡等発掘調査報告』高崎市教育委員会 1992
22	新町III遺跡	A下水田・復旧畑、B下水田、FP2次洪水砂下水田、C下水田、弥生溝	『新町III遺跡』高崎市教育委員会 1994
23	新町IV遺跡	中～近世溝、B下水田、FP2次洪水砂下水田、弥生土坑・溝	『新町IV遺跡』高崎市教育委員会 1995
24	新町V遺跡	近代工場跡、A下水田復旧畑、B下水田	『新町V遺跡』高崎市教育委員会 1996
25	新町VI遺跡	B下水田	『新町VI遺跡』高崎市遺跡調査会 2000
26	柴町I遺跡	A下水田復旧畑、B下水田	『柴町I遺跡』高崎市遺跡調査会 1996
27	柴町II遺跡	A下水田復旧畑、B下水田	『柴町II遺跡』高崎駅東口線柴町遺跡調査会 1999
28	柴町III遺跡	A下水田復旧畑、B下水田	『柴町III遺跡』高崎市教育委員会 2003
29	岩押町I遺跡	A下水田復旧畑？、B下水田	『岩押I遺跡』高崎市遺跡調査会 1994
30	岩押町II遺跡	B下水田	『岩押II遺跡』高崎市遺跡調査会 1996
31	岩押町III遺跡	平安時代水田、近世溝	『岩押III遺跡』(財)群馬埋蔵文化財調査事業団 2011
32	上中居平塚II遺跡	B下水田	『上中居平塚II遺跡』高崎市遺跡調査会 1996
33	上中居平塚I遺跡	A下水田復旧畑？、B下水田	『上中居平塚I遺跡』高崎市遺跡調査会 1996
34	高間山神・村前遺跡	中世溝掘立柱・井戸・水路、弥生水路、古墳時代住居、弥生時代中期住居	『高間東神・村前遺跡』高崎市教育委員会 1995
35	高間原村遺跡	縄文、弥生時代中期溝跡、古墳時代住居	『高間原村遺跡』高崎市教育委員会 1992
36	高間村前遺跡	中世掘立・土坑・溝、古墳中後期住居・掘立、古墳後期～鎌倉期溝、弥生後期住居	『高間村前遺跡』高崎市教育委員会 1992
37	高間村前II遺跡	中世掘立・井戸・水路、B下水田、古墳後期住居	『高間村前II遺跡・村前遺跡』高崎市教育委員会 1995
38	上中居早道端遺跡	中～近世溝・井戸	『上中居早道端遺跡』高崎市教育委員会 1992
39	上中居辻堂跡遺跡	中世掘立建物遺跡	『上中居辻堂跡遺跡』高崎市教育委員会 1980
40	上中居辻堂跡II遺跡	中世掘立建物・溝跡、古墳前期溝墓・不明住居・水路	『上中居辻堂跡II遺跡』高崎市教育委員会 1992
41	上中居西屋敷遺跡	B下水田	『上中居西屋敷遺跡』高崎市遺跡調査会 1994
42	高瀬北神遺跡	B下水田	『市内遺跡等発掘調査報告書』(財)群馬埋蔵文化財調査事業団 1992
43	高崎城遺跡 1～VII・IX・X・XV・XVI	近代郵便局跡、近世城郭遺構、中世溝・井戸・地下式坑、B下水田、古墳後期～奈良平安住居、古墳群石室跡、工房、弥生時代中期住居、弥生時代中後期溝墓	『高崎城遺跡II』『高崎城遺跡III・IV・V』『第6次郭遺跡』『三ノ丸遺跡』『高崎城遺跡XV』『高崎城遺跡XVI』(財)群馬埋蔵文化財調査事業団 1990・1993・1994・2004『高崎城遺跡XVI』(財)群馬埋蔵文化財調査事業団
44	城西町遺跡	近世城郭構造、寺院内墓地（本格墓32・土坑4）	『城西町遺跡』(財)群馬埋蔵文化財調査事業団 2011
45	住吉町遺跡（1次） （2次）	B下水田 B下水田、遺跡板状地（縄束～近代ゴム）	『市内遺跡埋蔵文化財発掘調査報告書』高崎市教育委員会 1992 『住吉町II遺跡』有限会社毛野考古学研究所編 2012
46	飯塚十二新遺跡	B下水田、奈良・平安時代溝跡	『飯塚十二新遺跡』高崎市教育委員会 1998
47	飯塚入道代遺跡	B下水田	『飯塚入道代遺跡』高崎市遺跡調査会 1997
48	新玉I遺跡	B下水田	
49	貝沢・高道跡		
50	貝沢・天神遺跡	B下水田	『貝沢・天神遺跡』高崎市教育委員会 2010
51	上大胡八反田遺跡	B下水田	
52	江木北上井遺跡	B下水田、中世溝	『江木北上井遺跡』有限会社毛野考古学研究所 2015
53	高間山神・村前遺跡	B下水田、中近世掘立、古墳後期住居、弥生中後期住居	『高間村前II遺跡　高間東神・村前遺跡』高崎市教育委員会 1995
54	上中居西屋敷遺跡	中近世溝・井戸、A下水田復旧畑	『上中居西屋敷II遺跡』高崎市教育委員会 1997
55	上中居西屋敷III遺跡	B下水田	『上中居西屋敷III遺跡』高崎市遺跡調査会 1998
56	上中居辻堂II遺跡	B下水田、中近世溝	『平成9年度高崎市小市郡埋蔵文化財発掘調査概報2』高崎市教委 1998
57	高崎城馬場遺跡	弥生時代中期溝、弥生土器	『新編高崎市史資料編1　原子古代I』高崎市 1999 など
58	柴町I遺跡	B下水田、A下水田復旧畑	『柴町I遺跡』高崎市遺跡調査会 1996
59	電見町遺跡	弥生時代中期竪穴・電見町式橋高遺跡	『群馬県遺跡台帳II（西毛編）』群馬県教育委員会 1972
60	浅間山古墳	円墳・径約50 m、一部土塁として残存	
61	高崎城下町遺跡	土坡墓跡、溝、井戸、土壙。（古墳前期～近代）	『高崎城下町遺跡』高崎市教育委員会 1993『治物町・鞘町・宮元町』

Ⅲ　調査の方法と経過

1．調査の方法

開発対象面積は2741㎡であったが、試掘調査の結果をもとにして協議をした結果、調査範囲は遺跡を破壊する範囲、すなわち建物東側半分の360㎡のみとなった。近年まで高崎市営駐車場として利用されていたため舗装の撤去から始めた。表土掘削は0.45㎥バックホーを用いて、残土は飛散や流出を防止する措置を講じることを前提に、敷地内に置くこととした。巨大で深い攪乱が多く、実質的な遺構残存範囲は約200㎡であった。

近世２面、古代水田面１面の計３面を予定していたため、第１面は試掘で検出された長大な木板構造物の設置面とした。結果的には近代の木樋であったが、ここを確認面としたことで、近代郵便局（電信局）に関わる遺構を調査することが可能となった。第１面・近代～第２面・近世（As－A以後）は遺構が密集しており、明確な地業層や旧地表面を検出することはできなかった。第３面・As－A直下の遺構や旧地表面が検出できた範囲は、ごく一部に限られる。よって、第４面（As－A降下前の近世）までは連続的に各遺構の調査を実施した。

第６面はAs－B直下の水田面とした。調査区南東側の約50㎡のみの調査ではあったが、精査によって東西畦畔を検出した。第７面の洪水砂層は試掘２トレンチ内の断面と基本層序トレンチでのみ確認・調査を実施した。第８面のSD－17は、近世大溝・SD－10の周辺撹乱を重機で除去した際に偶発的に発見した。

調査区は高崎城下町の中央部であり、遺構は廃棄土坑が主体である。大溝の遺物が特に多く、全体遺物量は125箱を数え、陶磁器や土器類を主体とする。低湿地遺跡ではないが、木製品・漆製品も多数検出された。本遺跡の土中はカビの胞子が非常に多く、木製品を取り上げ後に洗浄し、水浸けしておくと、強烈な腐敗臭と鉄バクテリアの油膜状物質が発生する。現地調査から整理期間まで、木製品の管理には非常に苦慮した。

2．調査の経過

発掘調査は平成27年４月８日から同年７月27日まで実施した。以下に概要を記す。

４月８日：現地にて打ち合わせ。　13日：器材搬入。調査区設定。　14日：プレハブ・仮設トイレ搬入。

17日：重機搬入。舗装カッター。　20日：重機によるアスファルト舗装撤去。ＧＰＳによる基準点設置。

21日：重機のよる表土掘削開始（～24日）。午後より作業員による遺構確認精査作業開始。

24日：仮設電源付設工事。

27日：遺構掘削・調査開始。近代遺構以降およびAs－A降下以降の近世遺構の調査を順次行う。

５月２～６日：大型連休。　７日：近代建物基礎の調査に集中する。

19日：第１面（近代）、ドローンによる空中写真撮影。　20日：近代遺構掘り方と近世遺構の調査を継続。

27日～６月２日：諸般の事情により現場作業一次中断。

６月４日：調査再開。近世遺構（As－A前後）の調査を進める。　12日：降雨により調査区東半分、水没。

20日：降雨により調査区東半分、水没。　24日：降雨により調査区全面、水没。

30日：重機によってＳＤ10西側覆土と、調査区南東側の約50㎡をAs－B層まで掘削（～７月１日）。

７月１日：ＳＤ10の精査作業とはじめ、As－A前後の遺構の調査を継続する。

22日：市営タワーパーキング屋上より、第３面（As－A直下）・第４面（近世下層）・第５面（As－B層直下）の全景写真撮影を実施する。

24日：重機によって、ＳＤ10東側覆土を掘削し、調査区西部・中央部を埋め戻す。ＳＤ10を含めた調査区北壁一帯の遺構群の精査作業を継続する。

25日：遺構調査終了。重機による埋戻し。機材撤収、土嚢解体。

26日：重機による埋戻し、完了。　27日：器材撤収。調査全工程終了。

Ⅳ　基本層序

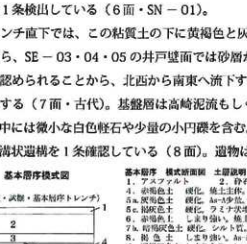
現況地表面は駐車場のアスファルト舗装で、下部にも古い舗装面がある。近代の層は厚く、焼土・漆喰片・炭化物・亜炭片・礫・煙瓦・As－Aなどを含み、全体に硬化している。南壁では明瞭な近代焼土層は2層あり、一部漆喰が含まれる。近現代の火災としては、明治13年の大火で連雀町・田町・九蔵町・檜物町一帯が全焼、明治37年に郵便局が類焼、昭和20年8月14日の空襲による火災、昭和26年1月に郵便局焼失した4回を数える。終戦前夜の空襲では解体していなかった局舎が燃えたようで、至近に位置する大信寺本堂は全焼している。

北東隅一帯には局舎解体に伴う破砕レンガが大量に含まれる層があり、この層位の下位を遺構確認面とした（1面近現代）。近代～18世紀以降の遺物を大量に含む、As－A混入暗褐灰色土が調査区全体に厚く堆積しており、この包含層の上面・中位・下面（As－B混入シルト層上面）において適宜遺構確認を実施した（1～2面）。一部の遺構には大量の焼土が堆積あるいは廃棄されており、南壁土層断面の近世焼土層2枚のうち、下位はシルト層中（A降灰前）、中位はSK－63の覆土（A以降）にある。

試掘トレンチ2の壁面では、層厚10cmを測るAs－Aの一次堆積（天明3年・1783年）が一部残存しており、調査区を東西に貫く大溝・SD－10の覆土中にもAs－A純層（一部は一次堆積）が認められる（3面）。特に北壁に位置するSK－105では30cm以上を測る。As－Aより下位、つまりAs－A降灰前の近世遺構も多数ある（4面）。これらが構築される基盤層は、褐灰～暗褐灰色の砂質シルト質土と粘質シルト質土である。城下町形成以前は水田であったと想像されるが、土層断面では畦畔などは確認できなかった。

このシルト層の下層はAs－Bが明瞭に混入するシルト質土である。試掘2トレンチ断面では、このシルト層の途中においても土坑や溝などの遺構が確認できる（5面）。SN－01畦畔の直上には、SD－18と同様に砂で埋没した溝状遺構が存在していたと考えられることから、継続的に水田耕作が行われてきたものと推測される。最上位遺構確認面から約70cm下に、As－Bが堆積しており、二次堆積範囲も存在する。As－Bの中には粒径5mm前後の不整形な軽石が含まれていた。As－B直下には暗褐灰色粘質土（B下黒色粘質土）がほぼ遺跡全面に堆積し、幅広の畦畔を1条検出している（6面・SN－01）。

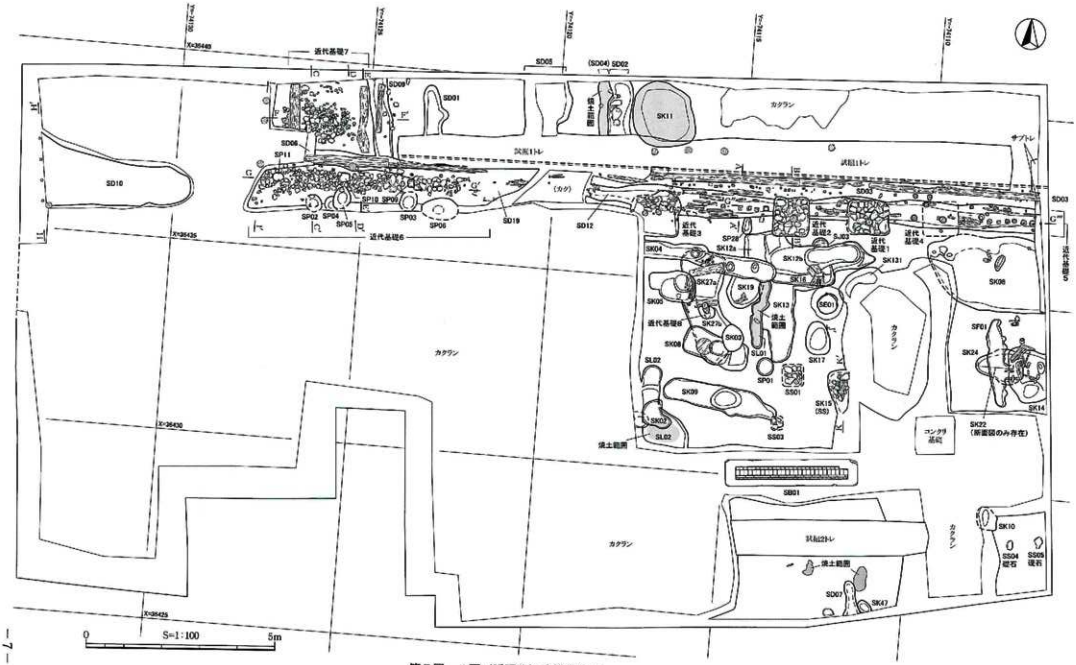
試掘2トレンチ直下では、この粘質土の下に黄褐色と灰色の砂層が局部的に存在している。面的に調査できず、詳細不明ながら、SE－03・04・05の井戸壁面では砂層が検出できないこと、基本層序トレンチ東壁では砂層の立ち上がりが認められることから、北西から南東へ流下する溝状遺構（幅4～5m、深さ約30cm）に堆積した洪水砂層と推測する（7面・古代）。基盤層は高崎泥流もしくは井野川泥流と推測される明褐灰～灰白色の洪水性シルト層で、層中には微小な白色軽石や少量の小円礫を含む。このシルト層の上面で、白色軽石を含む暗褐灰色粘質土で埋没する溝状遺構を1条確認している（8面）。遺物は出土していないが、古墳時代と推測している。



基本層序　模式断面図　土層説明

1．アスファルト　2．砂利層　3．黒褐色土　硬化、焼ガラ・砂礫・As－A・焼土粒少量。
4．赤褐色土　硬化、焼土主体、明治36年もしくは昭和20年。
5a．灰褐色土　硬化、As－A少量。
5b．灰褐色土　しまり強い、As－A微量。
5c．暗灰色土　硬化、ラミナ状堆積。
5d．暗褐灰色土　硬化。
6．赤褐色土　しまり強い。焼土混、明治13年か36年。
7a．暗褐灰色土　しまり強い、As－A少量。上層。
7b．暗褐灰色土　硬化、シルト質、下層に詰分泥岩。
7c．暗褐色土　硬化、As－A中量。
8．褐色土　しまり強い、As－A中位～多量。
9．赤褐色土　しまり強い、焼土層、1807年か1812年上推測。
10．明褐灰色土　しまりあり。As－A一次堆積。
11．赤褐色土　しまり強い。焼土層、1724～27年以上推測。
12．灰褐色土　しまり強い、非常に均質なシルト。
13a．暗褐色土　しまり強い。Aは一次堆積。
13b．明黄褐色土　しまり強い、Aは多量。
13c．黒褐色土　しまり強い、Aは多量。下部。
13d．黒色土　しまり強い。粘性あり。B下水田耕作上。
13e．暗褐色土　しまり強い、シルト質。
13f．明黄褐色土　しまり強い。粘性あり。
13g．暗褐灰色土　しまり強い。シルト質。
13h．明褐灰色土　しまり強い。粘性やや強い。均質。
13i．明褐灰色土　しまり強い。粘性ややあり。均質なシルト、下部。
13j．黄褐色土　しまりあり。細砂混層。霜状。
13k．灰色土　しまりあり。細砂～粗砂主体、シルト少量。薄紙。
13l．暗褐灰色土　しまり強い。粘性ややあり。均質シルト。
13m．褐灰～灰褐色土　しまり強い、細砂多量。シルト中量。
13n．明褐灰色土　しまり強い。細砂多量。霜状。
13o．明褐灰色土　しまり強い、粘性わずか。微細多い。シルト。
13p．明褐灰色土　しまり強い。白色粒子微量。シルト質。
13q．明褐灰色土　しまり強い。白色粒子微量。シルト質。
13r．明褐灰色土　しまり強い。白色粒子微量。シルト質。
13s．青灰～黒灰色土　しまり強い。白色粒子微量。薄紙シルト質。
13t．黒灰色土　しまり強い、シルト質。
13u．青灰色土　しまり非常に強い。白色粒子中～多量。シルト質。
13v．明青灰色土　硬化。海砂層。
13w．灰白色土　しまり非常に強い。暗褐泥ブロック中量。微微多量。小円礫微量。薄紙シルト質。

第4図　基本層序



第５図　１面（近現代）遺構全体図

Ⅴ　遺構と遺物

1．遺跡の概要

本遺跡は高崎城下町の中心部、連雀町・田町・白銀町・通町の境界にあたる。多数の遺構と125箱にのぼる大量の遺物は、近世と近現代がほぼ全てを占める。近世以降、調査区の北半分は白銀町、南半分は大僧寺の敷地であり、門前に当たる。明治24年～昭和52年までは高崎郵便局が存在した。遺構面は近代～古墳時代までの8面を数える。

古墳時代と推測される遺構はSD－16の溝1条のみである（8面）。地表下215cm、As－Bより30cm下位から灰白シルト層を掘り込んで構築される。覆土には微量の白色軽石が混入する。調査区南側の試掘2トレンチにおいてAs－Bの20cm下位より、最大厚約30cmの黄褐色～灰色細砂を検出した（7面）。2トレンチ北西の井戸・SE－05や調査区北東壁面では確認できず、基本層序トレンチ東壁では立ち上がりを確認できる。よって、東西に走向する幅広の溝に洪水層細砂が堆積したものと想定する。詳細時期不明ながら、古代と推測しておく。

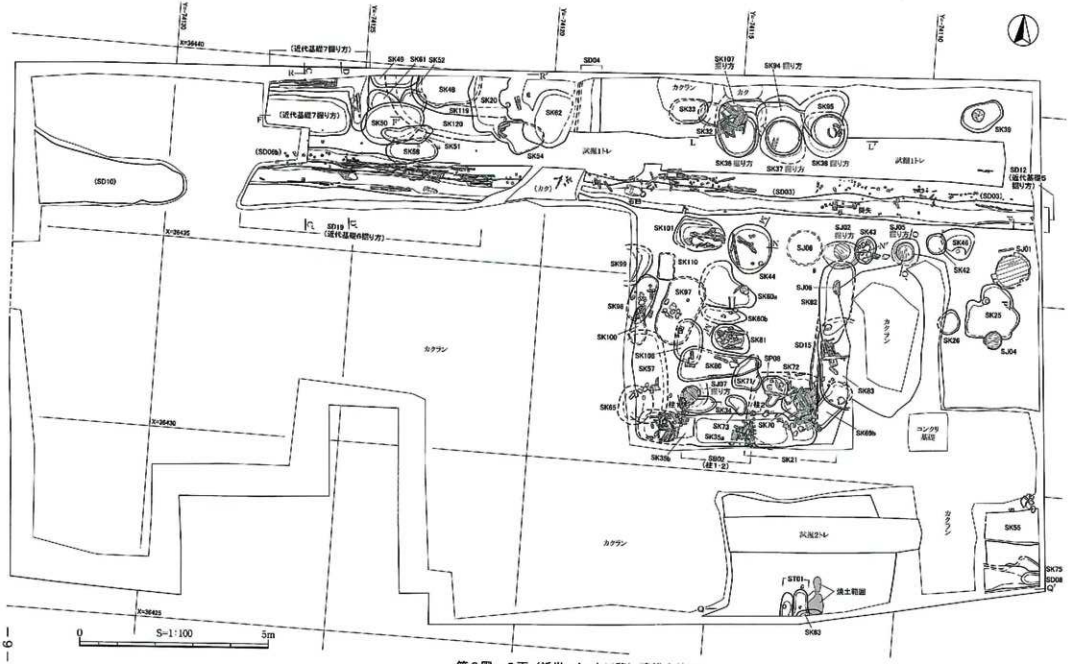
6面のAs－B下水田・SN－01は、わずか32㎡（4×8m）のみの調査であったが、東西に走行する畦畔を1条検出した。畦畔直上にはAs－B層を掘り込んだ溝状遺構（5面）が存在し、覆土は細砂と粗砂が主体で、中世の構築と推測する。平面的には確認できなかったが、この用水路が畦畔を貫流していた可能性も否定できない。南壁直下にも、As－Bを掘り込んで東西に走行するSD－18が存在する。このほか2トレンチ壁面において土坑を数基確認したが、平面的には調査ができなかった（4～5面）。古代～中世にかけては水田地帯として利用され、16世紀末以降は高崎城および城下町の建設・整備にあたって、水田地帯の改変が図られたものと推測される。

2～4面は近世遺構で、3面はAs－A直下および直後の遺構群である。当然4面から継続する遺構も同時に存在はするが、平面図は混在を避けた。『上野国群馬郡高崎御城下町絵図面』（安政3年）および『覚法寺蔵　萬延元庚申年冬十二月写』（1860）の絵図によると、調査区南側は「大信寺門前」と表記され、北側は白銀町である。「連雀町」に該当する部分は現代の撹乱で消滅していた。

4面はAs－A降下以前の遺構群で、平面図は便宜的に4a～4c面に分離した。4面で重要な点は、町境界の大溝・SD－10と、火災後の廃棄土坑6基（SK－01・28・56・66・68・77）である。SD－10最下層からは「元禄十四年」（1701年）の底裏墨書がある饗水入れが出土しており、開削時期は17世紀後葉～末葉頃と推定できる。1692年頃に高崎城（7代安藤重博）が完成したといわれており、大溝開削を城下整備事業の一環として捉えた場合、時間的に齟齬がない。「高崎町奉行日記」（『高崎資料集』）には、寛政9(1797)年、通町へ流入する堰（用水路）の上流8ヶ所に塵捨いの杭を打った記事が見え、溝への日常的な「塵芥」への不法投棄の状況が描写されている。火災廃棄土坑について、As－A降灰前に本遺跡地が被災したと推測される火事は、元和7（1621）年に城下が焼失した「道観火」、享保9（1724）年の通町出火による高崎宿大火、享保10（1725）年の通町出火による風下6ヶ町焼失、享保12（1727）年の田町出火による風下通り全焼の4回がある（『新編高崎市史通史編3　第5章第2節および巻末年表』）。火元と記録を考慮すれば、1724年の可能性が高い。掘立柱建物は数回の建て替えが認められ、柱根が残存する柱穴もある。As－A降灰前には礎石建物へ変化すると思われるが、明確に認識できなかった。建物焼失後は、井戸・埋桶遺構（便所）・溝などが設置される空間へと変化する。As－Aの一次堆積が残存するのは、SD－13bの南側、SD－10北側のSK－105、SD－10覆土中位の3地点である。

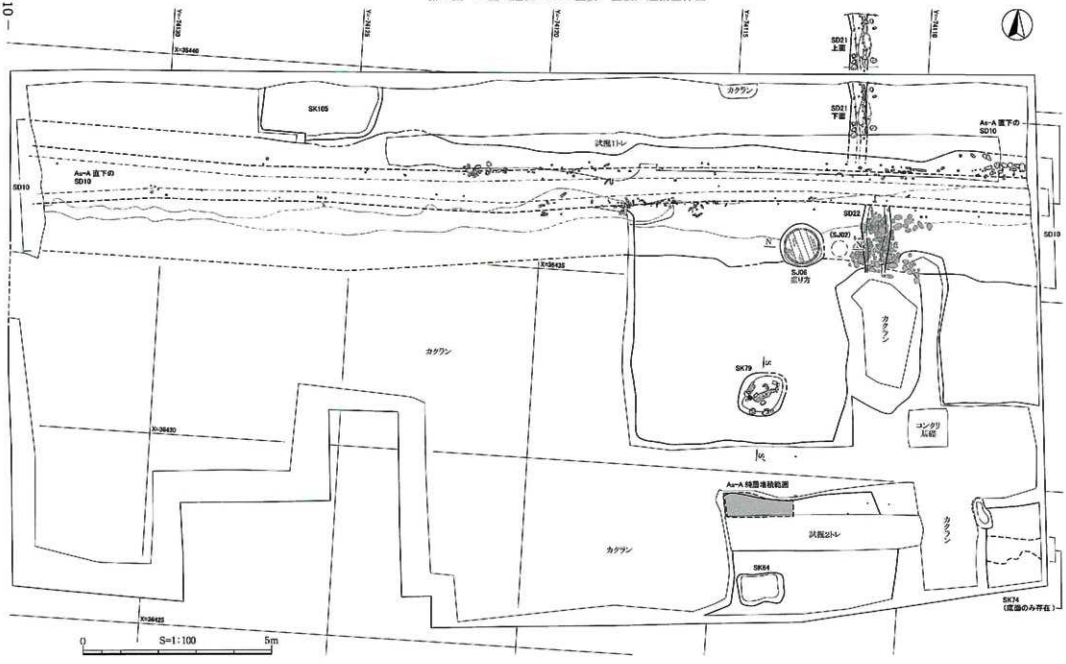
2面はAs－A降灰以降の遺構群で、廃棄土坑と埋桶群が主体となる。SD－10はほぼ埋没し、幅の狭い溝へと変化するが、護岸には多量の杭が打ち込まれる。埋桶は、新しいSD－10（SD－12・19）に沿って配置されている。大信寺敷地末端部である本調査区に、1基のみ墓坑（ST－01）が検出されている。7～9ヶ月の胎児であり、墓坑は白色灰（貝灰カ）の純層で埋め戻され、全身骨格が良好に保存されていた（Ⅴ章で鑑定・分析）。集団墓地以外での特殊な埋葬方法であり、胎児である点や被葬者の血縁・系譜なども考慮すべきであろう。

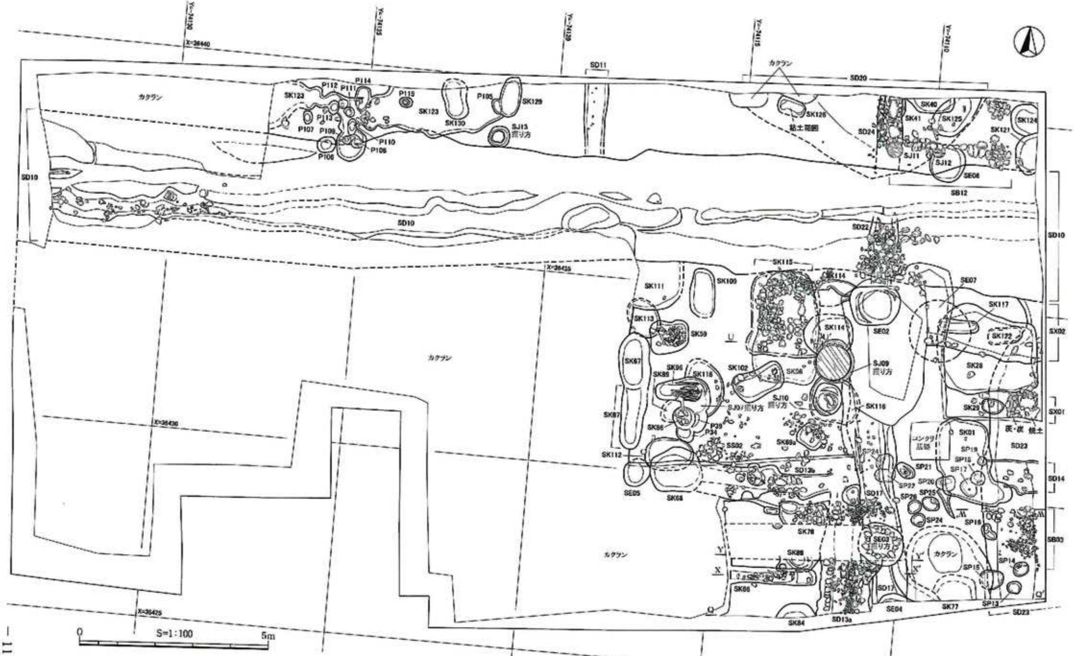
1面は近現代面で、明治～戦後、もしくは昭和30年代までの高崎郵便局に係わる遺構群である。高崎郵便局は明治24年にあら町から当地へと移転し、以降は高崎郵便局および電信局・電話局として、群馬県における近代通信事業の中核的役割を担い、生糸・製糸産業や金融業界をはじめ、市民生活にも政治にも多大なる貢献を果たした。



第６図　２面（近世・As-A 以降）遺構全体図

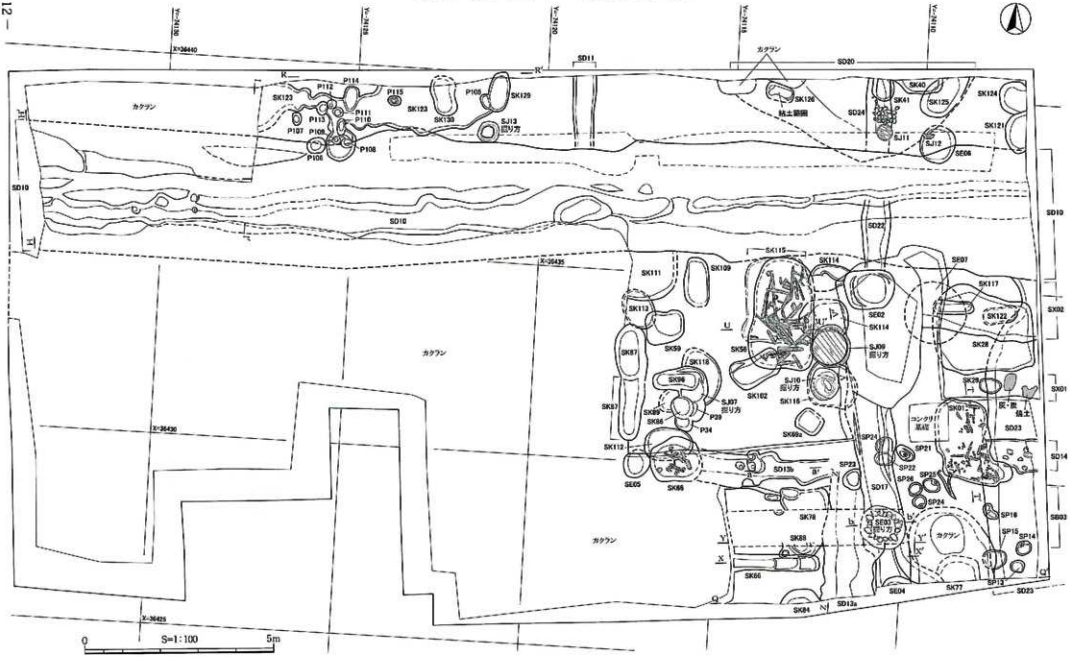
第７図　３面（近世・As-A 直前～直後）遺構全体図

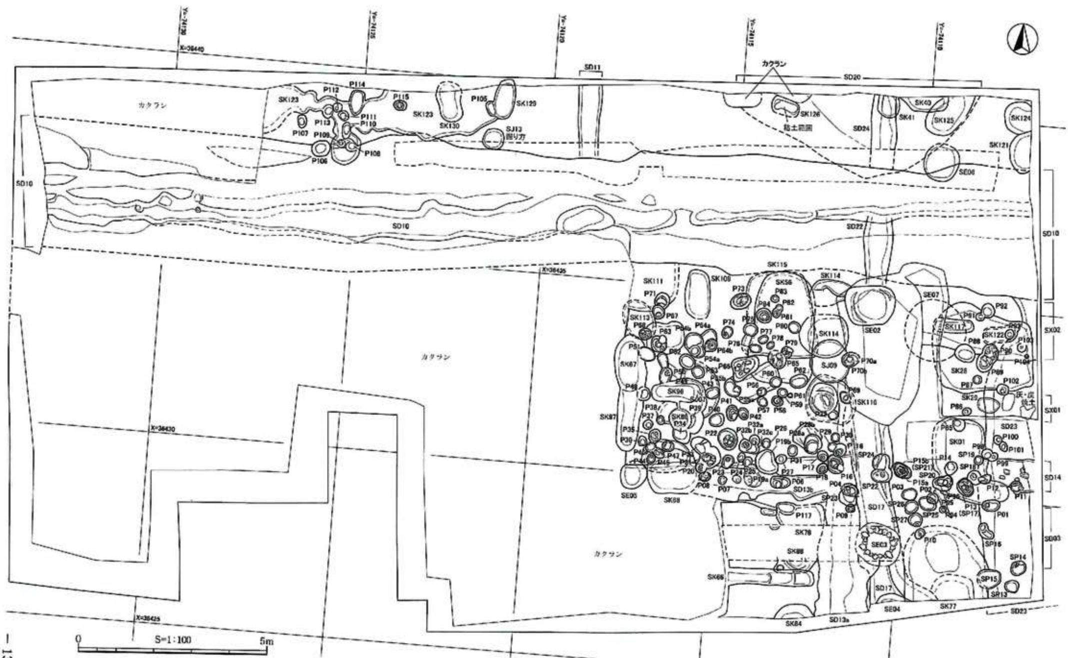




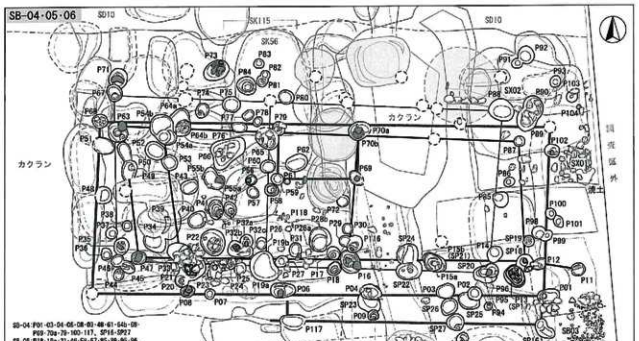
第8図　4面a（近世・As-A降灰前）遺構全体図

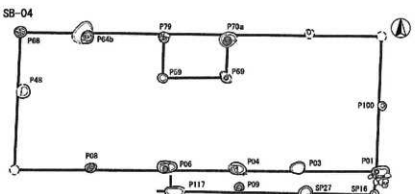
第９図　４面ｂ（近世・As－A降灰前）遺構全体図

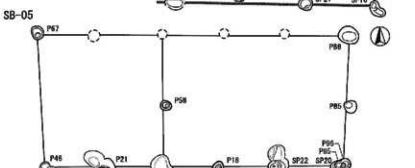


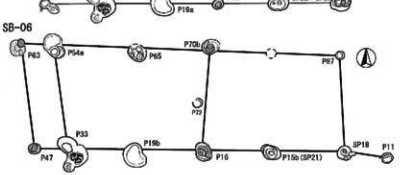


第10図　4面c（近世・As－A降灰前）ピット全体図









SB-04
東西棟、N-90°、梁間2間×桁行5間+南下屋庇。
桁行長 (9.53)m、
桁行平均柱間 1.82m≒6.02尺、
梁間幅 (3.56)m、
梁間平均柱間 1.68m≒5.53尺、
総面積 (37.2) ㎡、身舎 (33.9) ㎡

SB-05
東西棟、N-88°-W、梁間1間×桁行5間、
桁行長 7.84m、
桁行平均柱間 1.56m≒5.17尺、
梁間幅 3.42m、
面積 27.9 ㎡

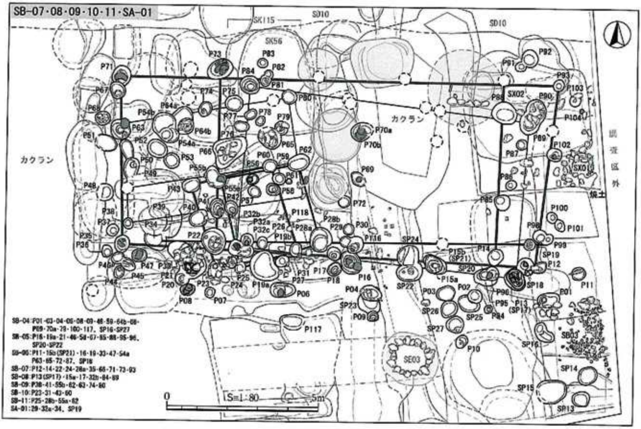
SB-06
東西棟、N-90°、梁間1間×桁行4間+西下屋庇、
総桁行長 8.39m、身舎 7.50・7.30m、
桁行平均柱間 1.90m≒6.27尺、
梁間幅 2.81・2.50m、
総面積 22.2 ㎡、身舎 19.6 ㎡

SB-07
東西棟、N-87°-W、梁間1間×桁行4間+東下屋庇、
総桁行長 8.73m、身舎 7.88m、
桁行平均柱間 1.97m≒6.50尺、
梁間幅 3.88m、
総面積 34.8 ㎡、身舎 (31.0) ㎡

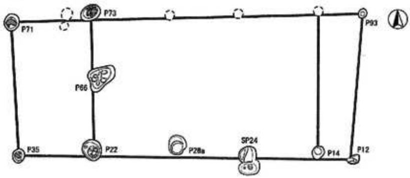
SB-08
東西棟、N-88°-W、梁間1間×桁行3間、
桁行長 5.94m、
桁行平均柱間 1.99m≒6.56尺、
梁間幅 3.42m、
面積 20.3 ㎡

0 S=1:100 5m

第11図　掘立柱建物跡個別想定図（1）4面



SB-07



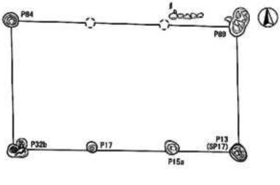
SB-09
東西棟。N-81°-E。梁間2間×桁行2間＋南下屋庇。
桁行長3.71m。
桁行平均柱間1.80m≒5.96尺。
梁間幅2.14m。庇梁間幅0.74m。
総面積(7.7)㎡、身舎(5.0)㎡

SB-10
南北棟。N-18°-W。梁間1間×桁行1間。
桁行長2.01m。梁間幅1.79m。
総面積3.5㎡

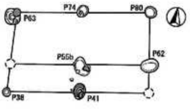
SB-11
南北棟。N-14°-W。梁間1間×桁行1間。
桁行長1.95m。梁間幅1.77m。
総面積3.3㎡

SA-01
東西方向。N-90°。(4)間以上か。
長さ7.93m以上か。
平均柱間2.13m≒7.02尺。

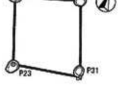
SB-08



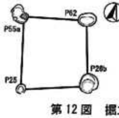
SB-09



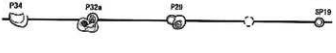
SB-10



SB-11



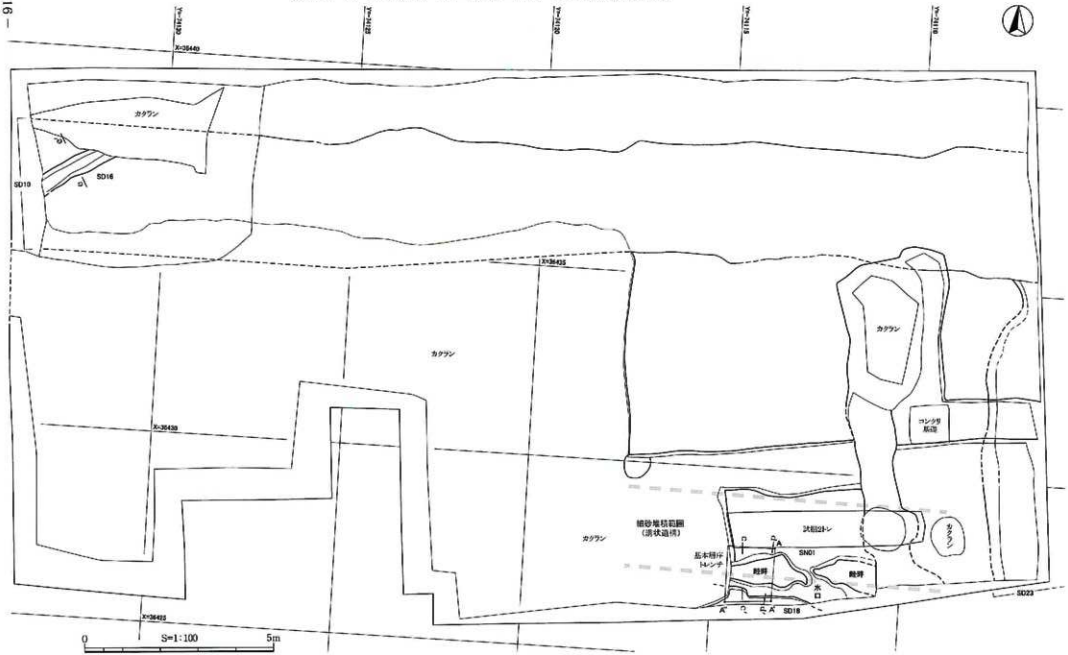
SA-01



0 S=1:100 5m

第12図　掘立柱建物跡個別想定図（2）4面

第13図　5～8面（中世・As－B直下・古代・古墳時代）遺構全体図



近代基礎5/SD-03
近代基礎2/SD-03
近代基礎6・7/ SD-06
近代基礎7
近代基礎6・7/SD06
SD10
SK50
SE-01
近代基礎6
近代基礎7上台板
(この板は暗管南側に約70cm等間隔で計18本設置)
近代基礎5 土層説明 (A-A')
1. 灰褐色土 しまり強い。細砂のみ。SD-03。
2. 茶褐色土 しまり強い。シルト。SK-03a。
3. 褐灰色土 しまり強い。シルト質土。SD-03a。
4. 褐灰色土 粘化。鉄斑シルト。SD-03a。
5. 明褐灰色土 しまりあり。粘土。SD-03a。
6. 褐灰色土 しまりあり。粘性ややあり。遺物多量。
7. 褐灰色土 しまり強い。As-B中量。
8. 暗褐色土 しまり強い。粘性ややあり。遺物多量。シルト質。
9. 明褐灰色土 しまり強い。As-A少量。
10. 褐灰色土 (硬) しまりあり。粘土少量。As-A少量。
11. 褐灰色土 しまり強い。As-A少量。
12. 暗褐黒色土 しまり強い。シルト質。As-A少量。
13. 暗褐灰色土 しまりあり。シルト質。As-B少量。
14. 褐灰色土 しまり強い。As-B少量。
15. 褐灰色土 しまり強い。粘性ややあり。
16. 褐色 土 しまり強い。As-A少量。
17. 暗褐色土 しまり強い。As-A多量。
18. 褐色土 しまり強い。As-A多量。
19. 褐 色 土 しまりあり。As-A非常に多い。

近代基礎2 土層説明 (B-B')
1. 灰白色土 しまりなし。細砂のみ。
2. 褐灰～暗褐灰色土 しまりあり。粘細砂微量。
3. 黒褐灰色土 しまりあり。粘性弱い。植物土。
4. 褐灰色土 しまりあり。As-A、細砂少量。植物土。
5. 暗褐灰色土 しまり強い。粘性ややあり。鉄分25%、円礫、上、凡類沼多量。
6. 明褐灰色土 しまりあり。炭化物少量。シルト質。
7. 褐灰色土 しまり強い。シルト質。
8. 暗褐色土 しまりあり。炭化物少量。シルト質。
9. 暗褐色土 しまりあり。炭化物微量。
10. 褐灰色土 (硬) しまりあり。細砂中量。
11. 暗褐灰色土 しまりあり～やや強い。鉄分10%
12. 褐灰色土 (粘) しまりあり～強い。遺物多い。
13. 褐灰色土 (硬) しまりあり。遺物多量。
14. 褐灰色土 しまり強い。As-B少量。

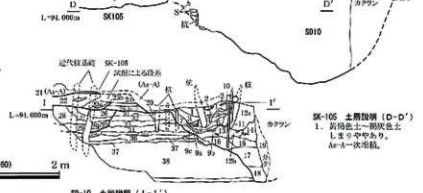
近代基礎7 土層説明 (F-F')
1. 暗 色 土 しまり強い。As-A中量～多量。円礫、鉄分礫、細砂微、炭を多量に混入。
2. 黒 褐 色 土 しまりあり。粘性ややあり。As-A少量。
3. 黒 褐 色 土 しまりあり。As-A多量。
4. 黒 褐 色 土 しまり非常に強い。固き岡のである。
5. 明褐灰色土 しまりややあり。As-A微少。
5'. 明茶褐色土 しまりあり。As-A非常に多い。シルト多量。
6. 暗褐灰色土 しまり強い。粘性わずか。均質。As-A微量。SD09。
7. 暗 褐 色 土 しまり強い。As-A多量。
8. 黒 褐 色 土 しまり強い。As-A多量。
9. 明褐灰色土 しまり強い。As-A主体。細砂多量。シルトブロック少量。
10. 黒 褐 色 土 しまりややあり。As-A中量。
11. 明褐灰色土 As-A純粋に近い。22K出現。

近代基礎6・7/SD-06 土層説明 (C-C')
1. 黒褐色土 しまり強い。鉄斑シルト。SD-06a。
鉄斑粒多量。As-A少量。
2. 暗褐灰色土 しまり強い。沼性ぼそい。SD-06a。
鉄化物少量。微細粒状土。均質。
3. 褐灰色土 しまりあり。As-A微量。シルト質。SD-06a。
4. 黒褐色土 上層：しまりあり。As-A微量。
円礫主体。遺物多量。近代基礎6。
下層：しまりあり。As-A微量。遺物多量。
近代基礎6。(SD-19)
5. 暗褐色土 しまりあり。As-A中量。鉄化物微量。
近代基礎6掘り方。(SD-19)
6. 青灰色土 しまり強い。As-A少量。細砂微量。
近代基礎6掘り方。(SD-19)
7. 青黒色土 しまり強い。細砂少量。As-A微量。
8. 暗青灰色土 しまり強い。細砂多量(As-Bに似る)。
As-A中量。
9. 青灰色土 しまり強い。粘化ややあり。As-A中量。
10a. 青灰色土 しまりあり。シルト質土化。均質。
10b. 青灰色土 しまり強い。As-A少量。細砂少量。
鉄分化著ラミナ約10cm間の途中にくる。
11. 明褐灰色土 しまりあり。As-Aの1ほぼ純粋。22K。鉄分主体。
12. 明褐灰色土 しまりやや強い。As-Aの純粋。22K。粘性主体。
13. 青灰色土 しまりやや強い。As-Aの純粋。22K。
14. 明黒褐色土 しまりやや強い。As-Aの一次堆積。
15. 暗褐色土 しまり強い。シルト質。
16. 青灰色土 しまりあり。粘性わずか。シルト質。
17. 明褐灰色土 しまりあり。シルト質。
18. 青黒色土 しまり強い。粘性わずか。シルト質。均質。
シルトブロック (明黒褐色) 少量。
19. 灰褐色土 しまり強い。シルト質。
20. 褐灰色土 しまり強い。シルト質。As-B少量。

P-2 土層説明 (C-C')
黒褐色土 しまり強い。細砂、モルタル片多量。

SK-36～38 土層説明 (L-L')
1. 黒 色 土 しまりややあり。As-A少量。
2. 黒褐色土 しまりあり。As-A少量。
3. 暗褐色土 しまりあり。As-A中量。泥炭土粒。
4. 暗褐色土 しまりややあり。As-A少量。焼土ブロック、炭化物少量。
5. 褐灰色土 しまりやや強い。As-A中量。
6. 黒 色 土 しまり強い。細砂少量。有機質。シルト質。
7. 黒褐～暗褐灰色土 しまり強い。有機質中量。焼質ブロック少量。
8a. 灰褐色土 しまりあり。As-A多量。
8b. 暗灰褐色土 しまりあり。地山シルト質土状。
9a. 褐灰色土 しまりあり。As-A微量。地山シルト質土状。
9b. 暗灰褐色土 しまり強い。地山シルト質土状。As-B少量。
10. 灰褐色土 しまりあり。As-A多量。
11a. 黒褐色土 しまりあり。粘質土主体。均質。11b. 細砂、ラミナ層。
12. 褐灰色土 (硬) しまりあり。As-A多量。炭化物少量。
13. 暗褐灰色土 しまり強い。As-A多量。
14. 暗褐灰色土 しまりあり。粘性わずか。As-A微量。細砂少量。
15. 褐灰色土 (粘) しまり強い。As-A。細砂微量。
16. 暗 色 土 しまり強い。水汁多量。As-A少量。焼土微量。
17. 褐灰色土 (硬) しまり強い。As-A中量。
18. 暗褐灰色土 しまり強い。焼土質土ブロック、水汁多量。As-A微量。
19. 黒褐色土 しまりあり。細砂多量。As-A微量。
20. 褐灰色土 (硬) しまりあり。As-A多量。
21. 褐灰色土 (粘) しまり強い。As-A中量。
22. 灰褐色土 しまりあり。As-A非常に多い。
焼色ブロック少量 (白米不明)。
掘り方。
23. 褐灰色土 (硬) しまり強い。As-A中量。
炭化物、焼土微量。掘り方。
24. 明黄褐色土 しまりやや強い。As-A純粋に近い。
25. 黒褐灰色土 しまりやや強い。As-A純粋。22C。
26. 褐灰色土 しまりあり。As-A少量。
27. 暗褐灰色土 しまり強い。やや焼種あり。SD-10
28. 暗褐灰色土 しまり強い。やや焼種あり。SD-10

第14図 各遺構土層断面図 (1)



SD-10 西壁　土層説明（H-H'）

1. 黒褐色土　現代。腐植。根多量。円礫少量。
2. 黒褐色土　現代。Au-3。炭中混。円礫少量。
3. 黒褐色土　シルト質土質。腐植中量。
4. 暗褐灰色土　腐植層。小円礫。
5. 黒褐色土　現代。腐植片少。
6. 暗褐灰色土　現代。腐植。炭中量。礫土少量。
7. 暗青灰色土　しまり非常に強い。
Au-3。腐植片。炭中量。礫土少量。
8. 黒灰色土　現代。SD-06も。
9. 暗赤褐色土　現代。炭土焼土体。SD-06も　層管を切る焼土。
10. 暗青灰色土　しまりあり。Au-3少量。SD-06も　瓦管埋土。
11. 黒灰色土（砂）　しまりあり。Au-3少量。SD-06a。
12. 暗褐灰色土　しまりあり。腐植片多量。
グニュル電池管用瓦多量。近代基礎6ヵ所。
13. 暗黒灰色土　しまりあり。腐植片少量。近代基礎6ヵ所。
14. 黒褐色土　しまり強い。Au-4。炭多量。
15. 暗黒灰色土　しまり強い。炭少量。
16. 暗黒灰色土　しまり強い。炭少量。Au-3灰層。
17. 暗黒灰色土　しまり強い。Au-3少量。（SD-19）
18. 暗青灰色土　しまり強い。Au-3少量。（SD-19）
19. 褐灰色土　しまりあり。Au-3灰色。
20. 明黄褐色土　Au-3褐炭。細粒。下面石敷粗。φ1mm以下。
21. 明黄褐色土　Au-3褐炭。細粒。下面石敷粗。φ1mm以下。
22. 暗黒灰色土　しまりあり。シルト質。Au-3少量。
23. 明褐色土　しまり強い。粘性あり。鉱物Au-3中量。板の腐。
24. 暗褐灰色土　しまりあり。粘性ややあり。
25. 暗褐灰色土　しまりあり。粘質あり。
26. 暗青灰色土　しまりあり。シルト質。
27. 褐灰色土　しまりあり。粘性あり。均質。
28. 青灰色土　しまりあり。焼塩シルト質。黒褐。
29. 褐灰色土　しまりあり。粘性あり。
30. 褐灰色土　しまりあり。粘性あり。
31. 青灰色（砂）　しまりあり。シルト質。白色粒子少量。
32. 青灰色土（砂）　しまりあり。粘性あり。シルト質。
33. 茶褐色土　しまり強い。粘性強い。
34. 青灰色土　腐植中量。シルト質。
35. 青灰色土　しまりあり。シルト質。下部に円礫多量。
36. 黒灰色土　しまり非常に強い。粘土白色粒不混入。SD-16。
37. 黒褐色土　しまり非常に強い。粘土白色粒不混入。SD-16。
38. 暗褐灰色土　しまり強い。Au-3少量。シルト質。
39. 明黄褐色～褐灰色土　Au-4中～炭層結粒。
40. 褐灰色土　しまり強い。焼塩シルト。　下木白土混かり
41. 青灰色土　白色粒子混入。シルト質。
42. 灰褐色土　白色粒子混入。シルト質。
43. 褐灰色土　白色粒子混入。シルト質。
44. 青灰～褐灰色土　粗炭シルト質。
45. 褐灰色土　しまり強い。シルト質。
46. 青灰色土　しまり強い。粘土。
47. 青灰色土　しまり強い。白色粒子多量。シルト質。
48. 青灰色土　硬化。層不明。
49. 明青灰色土（砂）　硬化。鉱物粒。　50. 灰白色土　硬化。シルト。

SK-44・60

SJ-02・06

SJ-02　土層説明（N-N'）

1. 暗褐色土　しまりややあり。水片中混。
2. 灰褐色土　しまり強い。Au-4多量。層り方。
3. 暗褐灰色土　しまり強い。Au-3微量。層り方。
4. 褐灰色土（砂）　しまりややあり。Au-3少量。層り方。
5. 暗褐灰色土　しまり強い。Au-6少量。層り方。
6. 暗褐灰色土　しまり強い。粘質シルト質。SJ-02b層り方。

SD-10　土層説明（I-I'）

1. 黒褐色土　しまりあり。粘性強い。シルト質。灰褐色シルト粘質ブロック微量。
2. 灰褐色土　しまりあり。鉱物～シルト質土質。
3. 暗灰褐色土　しまり強い。粘性わずかあり。シルト質。乳白色軽石ごく微量。
4. 暗褐灰色土　しまりあり。粘性ややあり。シルト質。乳白色軽石微少。
5. 灰褐色土　しまりあり。粘性わずかあり。シルト質。φ1～5mm黄褐色軽石少量。
6. 暗褐色土　しまりあり。粘性あり。φ2～5mm黄黒色軽石微量。
7. 暗褐灰色土　しまりあり。粘性わずかあり。微小白色軽石ごく微量。
8. 灰白～明黄褐色土　しまりややあり。φ0.5～3mm白色軽石テフラ混。Au-3層微。
9a. 青灰色土　しまりやや強い。粘性ややあり。有機辺ウミ状。
9b. 黒　色　土　しまりあり。有機物含む。
9c. 暗褐灰色土　しまりややあり。鉱物ややあり。シルト質。
10. 黒灰色土　しまり強い。粘性あり。微粒シルト質。
11. 黒灰（褐）～青灰色土　しまりあり。粘性わずかあり。シルト質。
12a. 灰褐色土　しまりあり。粘性わずかあり。水材多混。
12b. 暗褐灰色土　しまりやや強い。粘性あり。腐植分多い。
13. 灰褐色土（褐）　しまり強い。粘性あり。活性土主体。木片中混。
14. 灰褐色土（褐）　しまり強い。粘性わずかあり。鉱物微量。粘質シルト質。
15. 灰褐色土（褐）　しまり強い。粘性ややあり。木片少量。やや粘質。粘質シルト質。
16. 灰褐色土（褐）　しまり強い。粘性ややあり。木分多い。粘質土主体。
17. 灰褐色土（褐）　しまり強い。粘性わずかあり。有機物少量。鉱物微量。
18. 青灰色土（褐）　しまり強い。粘性強い。
19. 暗褐色土　しまりやや強い。性状底つて土層化した部分。カクラン。
20. 青灰色土　しまり強い。粘性あり。粘質シルト質。均質。土状を。
21. 明黄褐色土　しまりややあり。Au-3　炭層結。下部にかさ3～4mmの炭層。
22. 黒灰色土　しまり強い。Au-3微量。5 mm土質層。
23a. 褐灰色土（褐）　しまり非常に強い。Au-3少量。5 面土成層土。
23b. 明褐灰色土　しまりややあり。Au-8多量。5 面土成層土。
24. 褐　色　土　しまりややあり。Au-8多量。
25. 黄褐色土　しまりややあり。Au-8微量。2 次堆積。
26. 暗褐灰色土　しまり非常に強い。粘性あり。粘質シルト質。均質。28～29対比5 面土成。
27. 暗褐灰色土　しまり非常に強い。粘性ややあり。鉱質シルト質。均質。5 面土成層土。
28. 褐灰色土（褐）　しまりあり。粘性強い。5 面土成層土。
29. 暗褐灰色土　しまり強い。粘性あり。土層化した黒色有機物ウミ状層分量含む。5 面土成。
30. 褐灰色土（褐）　しまり非常に強い。シルト質。地山凹凸の層れ。
31. 褐灰色土（褐）　しまり強い。粘性ややあり。シルト質。青灰ブロック少量。
32. 明灰褐色土　しまり強い。粘性ややあり。シルト質。φ0.5mm白色テフラごく微量。
33. 褐灰色土（褐）　しまり強い。粘性あり。白色テフラ（φ0.3～1mm）微量。
34a. 褐灰色土　しまり非常に強い。シルト質。白色テフラ（φ0.3～1mm）微量。
34b. 黄褐灰色土　しまり非常に強い。粘土質。鉱物。白色テフラ（φ0.3～1mm）微量。
35a. 明灰褐色土　しまりあり。粘性あり。白色テフラ（φ0.3～1mm）微量。
35b. 明褐灰色土　しまりあり。粘性強い。白色テフラ（φ0.3～1mm）微量。
36. 灰褐色土（褐）　しまり非常に強い。シルト質。白色テフラ（φ0.3～2mm）中量。
池由シルト由炭のもんと。Au-2かん。
37. 暗褐灰色土　しまり非常に強い。シルト質。白色粒子（φ0.3～1mm）ごく微量。
38. 丸石～灰白色土　硬化。シルト由炭層。暗褐灰色粘土ブロック多量。

SK-44　土層説明（M-M'）

1. 黒褐色土　しまり強い。Au-4。焼土混。灰色粒少量。
2. 褐　色　土　しまりあり。植物多混。Au-3中量。木炭塊・木材多混。
3. 暗褐灰色土　しまりあり。粘性ややあり。Au-4。粘質土ブロック中量。
4. 褐灰色土　しまり弱い。鉱物。

SK-60　土層説明（M-M'）

1. 暗褐色土　しまり強い。Au-4。焼土粒。炭化物中混。
2. 黒褐～暗褐色土　しまりあり。粘土ブロック。炭化物粒状に多い。Au-4少量。
3. 明黄褐～に近い明褐色土　しまりあり。白色粒子（φ1mm）微量。
青灰に均質シルト質土。
4. 褐灰色土　しまり強い。Au-5層混。シルト質。微分少量。
5. 褐灰色土（砂）　しまり強い。Au-3少量。鉱物微量。シルト質。
6. 褐灰色土（砂）　しまり強い。粘性あり。粘質土ブロック。均質。
7a. 暗褐色土　しまり強い。Au-4中量。炭土・炭化物微量。
7b. 暗褐灰色土　しまり強い。粘性ややあり。Au-3微量。
8. 灰褐色土（砂）　しまり強い。粘性ややあり。Au-3ごく微量。均質。被覆シルト質。
9. 黒褐色土　しまりややあり。Au-3。鉱物中量。

SJ-06　土層説明（N-N'）

1. 明赤褐～黒褐色土　しまりあり。強性ねばり。層土粒多混。
2. 黒褐色土　しまりややあり。水片多混。鉱物片中混。
3. 暗褐色土　しまりややあり。水片多混。Au-3少混。
4. 褐灰色土　しまりやや弱い。鉱物と粘質土の互層。
5. 明黄褐色土　しまりやや弱い。Au-3層混。植物炭多量或混。
6. 灰白色土　しまり強い。粘性強い。白混土。層り方。
7. 明褐灰色土　しまり弱い。粘性ややあり。鉱物少量。層り方。
8. 明褐灰色土　しまりあり。粘性あり。

第 15 図　各遺構土層断面図（2）

南壁土層断面（SK-63・77・84 / ST-01 / SD-13・17・18・23 / SE-04）

北壁土層断面
（近代基礎7 / SK-20・48・49・119・120・123・129・130）

調査区南壁　土層断面（Q－Q'）

1. アスファルト舗装　2. 路石　3. 解体ガラ
4. にぶい黄橙色土層　硬化。Au-4主層形に多い。
5. 黒褐色土層　硬化。Au-4少量。
6. 褐色土層　硬化。Au-4少量。
7. 暗褐色土層　しまり強い。Au-4多量、縄土少量。
8. 黒褐色土層　硬化。Au-4少量。
9. 暗褐灰色土層　硬化。シルト質、Au-4多量、縄土少量。
10. 暗褐灰色土層　硬化。
11. 暗褐黄色土層　硬化。モルタル・瓦破片多量。
12. 褐色土層　硬化。レンガ片・瓦破片・縄土少量。
13. 暗褐灰色土層　硬化。炭含む。
14. 赤褐色土層　硬化。焼土層。明治30年小屋布26年。
15. 灰褐色土層　硬化。Au-4少量。
16. 灰褐色土層　しまり強い。Au-4微量。
17. 褐灰色土層　硬化。ラモイ状堆積。
18. 暗褐灰色土層　硬化。
19. 赤褐色土層　硬化。縄土層。明治13年から36年。
20. 黒褐色土層　しまり強い。炭と縄土の粒。
21. 黒褐色土層　しまり強い。Au-4少量。縄土少量。
22. 赤褐色土層　しまり強い。焼土ブロック多量。

調査区南壁　土層断面（R－R'）

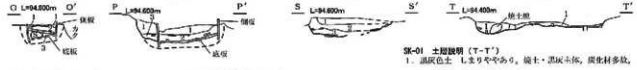
1. 暗褐色土　硬化。大小礫多量。解体ガラ多量。
2. 黄褐色土　しまり強い。縄文シルト。不明程石取り痕。
3. 黒褐色土　硬化。焼粒子・モルタル片多量。
4. 暗褐色土　硬化。Au-4少量。円礫多量。遺構底基盤ローム。
5. 黒褐色土　硬化。Au-4少量。炭化物少量。
6. 褐灰色土　硬化。Au-4少量。シルトブロック多量。排気孔少量。
7. 黒褐色土　しまり強い。Au-4少量。炭化物少量。
8. 黒褐色土　下層：しまりあり。層厚多量。下層：黒灰色土。SD-08。
9. 褐色土　しまり強い。Au-4少量。近代基礎7層目。
10. 黒褐色土　しまりあり。シルト質。近代基礎7層目。
11. 黒褐色土　しまり強い。Au-4少量。近代基礎7層目。
12. 黒褐色土　しまり強い。縄文シルト。近代基礎7層目。
13. 黒褐色土　しまりあり。Au-3少量。炭含む。
14. 暗褐灰色土　しまり強い。Au-4少量。炭化物少量。
15. 褐色土　しまり強い。Au-4少量。焼粒少量。SK-20。
16. 暗褐色土　しまり強い。Au-4少量。炭少量。
17. 暗褐色土　しまり強い。Au-4多量。SK-49。
18. 暗褐色土　しまり強い。Au-4中量。SK-49。
19. 暗褐灰色土　しまり強い。Au-4中量。SK-49。
20. 暗褐灰色土　硬化。Au-4少量。SK-48。
21. 褐灰色土　しまり強い。Au-4少量。焼粒中量。SK-48。
22. 黒褐色土　しまり強い。Au-4少量。SK-48。
23. 明褐灰色土　しまりあり。シルト質。SK-119。
24. 明黄褐色土　しまりあり。Au-3斉宗に多い。炭多量。SK-120。
25. 明褐色土　しまりあり。Au-3非常に多い。炭微量。
26. 黒色土　軟質。Au-3中量。SK-165上層。
27. 明黒褐色土　しまりあり。Au-4一次堆積。SK-165。
28. 明褐色土　しまり強い。Au-4中量。SK-129撹乱。
29. 明灰褐色土　しまり強い。非常に均質な細粒の Au-4火山灰。
30. 暗褐灰色土　しまり強い。Au-3少量。木片多量。シルト質。SK-123。撹乱
31. 黒褐色～黒灰色土　しまり強い。微密シルト。均質。粒子多量。SK-123。撹乱
32. 褐灰色土　しまり強い。シルト質。6.5mm白色礫不少量。
33. 暗褐色土　しまり強い。Au-3少量。
34. 黒灰色土　しまりややあり。泥性わずか。木片多量。SK-130。
35. 褐灰色土　しまり強い。シルト質。やや均質。Au-3微量。炭化物微量。

試掘2トレンチ南壁

試掘2トレンチ南壁　土層断面（Y－Y'）

1. 暗褐色土　しまり強い。Au-4少量。
2. 黒褐色土　しまり強い。Au-3少量。鉄斑少量。
3. 黒褐色土　しまり強い。Au-3少量。
4. 暗褐色土　しまりあり。
5. 暗褐色土　しまりやや弱い。
6. 褐色土　しまり強い。Au-4少量。炭化物少量。
7. にぶい黄褐色土　しまり強い。
8. 炭褐色土　しまり強い。シルト質。
9. にぶい黄褐色土　しまり強い。
10. 炭褐色土　しまり強い。黄褐色ブロック少量。
11. 黒褐色土　しまり強い。
12. 炭褐色土　しまり強い。シルト質。
13. 炭褐色土　しまり強い。
14. 暗褐色土　やや軟質。非常に粒子。
15. 褐灰色土　しまりあり。縄文シルト。
16. 灰褐色土　しまりあり。Au-3少量。
17. 暗褐色土　しまり強い。
18. 褐色土　しまり強い。
19. 褐色土　しまり強い。
20. 褐色土　しまり強い。
21. 褐灰色土　しまりあり。Au-3少量。鉄斑少量。
22. 褐色土　しまり強い。Au-3少量。
23. 暗褐灰色土層　しまり強い。Au-3少量。
24. 暗褐灰色土層　硬化。シルト質。下層に焼分泥石。
25. 暗褐色土層　硬化。Au-4中量。
26. 褐灰色土層　しまり強い。Au-4中量。焼土・炭化物少量。
27. 暗褐灰色土層　しまり強い。Au-4少量。焼土微量。
28. 暗褐灰色土層　しまり強い。土器溜上。
29. 暗灰褐色土層　しまり強い。土器溜上。
30. 暗褐色土層　しまり強い。Au-4中量。白色シルトブロック少量。
31. 暗褐色土層　しまりあり。シルト質。Au-4微量。ST-01。
32. 灰褐色土層　硬化。Au-4中量。ST-01の間層土。
33. 明灰白色～黒白色土層　しまり強い。貝灰主体。ST-01。
34. 褐色土層　しまりあり。Au-4中量。炭化物少量。SK-63。
35. 黒褐色土層　しまり強い。焼土ブロック・灰多量。1812年か。SK-63。
36. 褐色土層　しまり強い。Au-4多量。焼漬化した SD-13a 埋没土。
37. 暗褐色土層　しまりあり。Au-4中量。SK-84上層。4～46 砂多粒。
38. 暗褐色土層　しまり強い。均質なシルト質土。SD-13a。
39. 暗褐灰色土層　しまりあり。均質なシルト質土。SD-13a。
40. 褐灰色土層　しまり強い。焼土多量。炭化物中量。
41. 褐色土層　しまり強い。焼土・炭化物中量。Au-3少量。
42. 褐灰色土層　しまりあり。Au-3微量。
43. 灰褐色土層　しまり強い。Au-3少量。
44. 暗褐灰色土層　軟質。シルト質。SK-84。
45. 暗褐色土層　しまりあり。焼土あり。ラモイ状堆積。SK-84。
46. 褐色土層　しまり強い。焼土あり。1724年か。
47. 褐灰色土層　しまり強い。焼粒シルト質。
48. 褐灰色土層　しまり強い。ラモイ状シルト質土。瓦溜層か。
49. 明赤褐色土層　硬化。焼分泥石。地震層か。
51. 黒灰色土層　硬化。焼分泥。Au-3少量。地震層か。
52. 灰褐色土層　しまり強い。非常に均質なシルト質。
SK-77を覆い、SD-13a を切る。1742年水石立か。
53. 褐灰色土層　しまり強い。Au-3炭粒含む。H1 SD-13a。
54. 灰褐色土層　しまり強い。シルト質。焼土混入。
55. 黒色土層　しまりあり～軟質。黒灰層主体。焼土多量。SK-77。
56. 褐色土層　しまり強い。シルト質。焼土微量。Au-3入微量。SK-04。
57. 褐灰色土層　しまり強い。シルト質。SK-04。
58. 暗褐灰色土層　しまり強い。シルト質。SK-04。
59. 褐色土層　しまりあり。シルト質。
60. 暗褐色土層　しまりあり。砂質。
61. 褐灰色土層　しまりあり。Au-3少量。
62. 褐灰色土層　軟質。砂質主体。SK-04。
63. 褐灰色土層　しまりあり。シルト質。SD-17。
64. 明褐灰色土層　しまりあり。シルト。SD-17。
65. 黒灰色土層　硬化。砂質主体の粘土。SD-17。
66. 褐色土層　しまり強い。シルト質。黄褐色砂少量。土器多。
67. 灰褐色土層　しまり強い。シルト質。炭化物少量。土器多。
68. 褐灰色土層　しまりあり。砂質。土器多。
69. 褐灰色土層　しまりやや弱い。砂質。土器多。
70. 褐灰色土層　しまり強い。シルト質。Au-3少量。SD-18 堀土か。
71. 褐灰色土層　しまり強い。シルト質。Au-3少量。SD-18 堀土か。
72. 褐灰色土層　しまり強い。シルト質。Au-3少量。SD-18 堀土か。
73. 褐灰色土層　しまりあり。砂質。
74. 黒～灰褐色土層　細砂主体。SD-18。
75. 灰褐色土層　しまり強い。Au-3少量。上面円礫多数。
76. 明褐灰土層　しまりあり。SD-23 堀土か。
77. 灰褐色土層　しまり強い。Au-3少量。SD-23。
78. 灰褐色土層　しまり強い。Au-3少量。SD-23。
79. 褐灰色土層　しまりやや弱い。Au-3少量。SD-23。
80. 褐灰色土層　しまりあり。砂質分混じる。SD-23。
81. 明褐色土層　しまりあり。砂質分混じる。SD-23。
82. 明褐灰色土層　硬化。細砂少量。
83. 黒褐色土層　しまりあり。Au-3混ざる。
84. 明黒褐色～明褐灰色土層　Au-3斉宗。一次堆積。
85. 黒褐色～暗褐灰色土層　しまり強い。粘性あり。D下水田土層。

第16図　各遺構土層断面図（3）

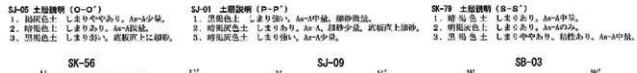


SJ-05 土層説明（O-O'）
1. 褐灰色土　しまりややあり。Au-M少量。
2. 暗黒色土　しまりあり。Au-M炭粒。
3. 黒褐色土　しまり弱い。底板床下に細砂。

SJ-01 土層説明（P-P'）
1. 黒褐色土　しまり強い。Au-M中量。細砂微量。
2. 暗褐炭色土　しまりあり。Au-A、細砂少量。武蔵穴上細砂。
3. 暗褐黒色土　しまり強い。Au-A少量。

SK-79 土層説明（S-S'）
1. 暗褐色土　しまりあり。Au-A中量。
2. 明褐炭色土　しまりあり。Au-Aのみ。
3. 黒褐色土　しまりややあり。粘性あり。Au-M中量。

SK-01 土層説明（T-T'）
1. 黒炭色土　しまりややあり。焼土・黒炭土体。炭化材多量。



SK-56 土層説明（U-U'）
1. 褐炭色土　しまりあり。焼土・炭化物微量。
2. 暗褐炭色土　しまりあり。焼土・炭化物微量。
3. 黒褐色土　しまりややあり。焼土ブロック・黒炭多量。炭化材・瓦多量。

SJ-09 土層説明（V-V'）
1. 暗褐色土　しまりややあり。水片中量。
2. 黒褐色土　しまり弱い。木片多量。底下部に薄砂。
3. 暗褐炭色土　しまり強い。Au-B少量。細り方。

SD-16 土層説明（U-U'）
1. 黒炭色土　しまり非常に強い。粘性あり。微小黄白色軽石微量。
2. 黒炭色土　しまり非常に強い。粘性あり。微小白色軽石微量。
3. 暗褐炭色土　しまり非常に強い。粘性あり。微小白色軽石微量。シルト微少量。
4. 炭褐色土　しまり強い。粘性ややあり。
5. 褐炭色土　しまり強い。粘性ややあり。白色軽石中量。
6. 褐炭色土　しまり強い。粘性あり。白色シルト微少量。

基本層序トレンチ

基本層序 土層説明（A-A''）
1. 褐炭色土　しまりあり。細砂混和。畦畔上の流埋土。
2. 黒炭色土　しまり強い。粘性あり。SN-01・D下水田耕作土。
3. 暗褐炭色土　しまり強い。粘性ややあり。微小白色軽石微量。シルト微少量。
4. 黒褐炭色土　しまり強い。粘性ややあり。均質なシルト。
5. 黄褐色土　しまりあり。細砂混和。漸状。
6. 炭色土　しまりあり。細砂～極細土粒。シルト少量。漸状。
7. 暗褐炭色土　しまり強い。粘性ややあり。粘質シルト。
8. 褐炭～灰褐色土　しまり強い。細砂多量。シルト中量。
9. 明褐炭色土　しまり強い。細砂多量。漸状。
10. 褐炭色土　しまり強い。粘性あり。粘質シルト。
11. 明褐炭色土　しまり強い。粘性あり。炭粒多い。シルト。
12. 炭白色土　しまり非常に強い。暗褐炭ブロック中位。鉄斑多位。微小白色軽石微量。粘質シルト層。

第17図　各遺構土層断面図（4）

2．1面（近現代）

明治後期～大正期頃の建物基礎と溝

近代基礎5はSD－12を埋め戻した後で、土台を受ける束柱を等間隔状に密に樹立させた布基礎と考えられる。出土遺物と覆土の漆喰片から、近代基礎6より新しい可能性がある。柱角材は一辺6～9cm前後・高さ20cm前後である。柱材直下には小ピットが認められ、礎板や礎石はない。ピットが掘り込まれたものか、沈下によるものか判断が難しい。多数の板材も出土し、薄板は壁面の矢板として貼り付けている。東端では礎板上に柱材が設置されている。掘り方（SD－12）からは大量の陶磁器（型紙染付碗・クロム青磁釉腕含む）・土器・瓦類の破片が出土し、碍子・ガラスボトル・包丁・掛矢なども含まれる。単なる廃棄というよりも、地盤安定化の目的があったものと推測する。SD－12壁面には土留め用の丸木杭（径5cm前後）が多量に打ち込まれており、壁土が軟弱であったことが判る。基礎5・6の構築に際し、その北隣にSD－03・06を掘削している。隣接するため、SD－03・06壁面には薄い矢板が杭で設置される。第24図　昭和9年周辺図での建物位置と、井戸（SE－01）や土坑群の存在を考慮すれば、現状では、基礎5は塀状の施設と推測される。近代基礎6は、大量の小円礫を敷き詰めた礫敷布基礎地業の堀の可能性がある。礫の間や掘り方からは陶磁器や瓦の破片が大量に出土した。礫の空白部分にはSP－09～11が柱間1.78m≒5.77尺で並び、柱材は抜き取られている。基礎5と同じく、SD－19（SD－12と同一溝）を埋戻して基礎とし、南壁には薄い矢板が設置されている。

SP－02～06は覆土に漆喰片を混入する柱穴群で、樋管底板直下にも同様の覆土が堆積しているため、SP－09～11よりも新しい建物と推測する。SD－03・06は同一溝で、新旧がある。旧いSD－03a・06bは細砂と緻密シルトで埋没し、その後で組合せ式の箱形樋管が埋設される（＝SD－03b・06b）。SD－06a内壁には厚さ1cmの長尺板が矢板として設置されており、68～75cm間隔で打ち込まれた杭で固定されている。調査区壁面で確認したところ、樋管内には明褐色～赤褐色の在地製粗製土管（本体外径26cm）が設置されていた。新SD－03・06は、後述の戦後局舎まで継続利用されていた可能性がある。

井戸と廃棄土坑

明治～戦中期には中庭的空間が存在していたようである。SE－01は、掘り方に粘土を充填した井筒井戸である。漆喰モルタル目地のレンガが投棄され、覆土には空洞が多い。レンガはイギリス積みで、内外壁面の漆喰モルタル塗りが残存する。SB－01のレンガはモルタル目地のため、これよりも古い構造物の壁体レンガであろう。SK－06からは、破砕した大量のダニエル電池素焼内瓶（楕円瓶）や、少量のダニエル電池長平瓶（長角瓶）、湿電池ガラス外瓶、炭素電極、銅線、碍子、石綿火鉢などが出土した。未掲載ながら、鉄製コールタール容器や8番鉄線も廃棄されている。大量廃棄の原因としては、昭和6年の西埼玉地震を想定しているが、「四四年八月二十六日」の底裏墨書をもつ長平瓶も出土しており、SK－06の時期は明治末年～昭和6年までの間と推定しておく。SK－12・13・16・19・24などは、遺物や遺構の新旧関係から同時期頃の土坑と考えられ、覆土には焼土や漆喰片が混入する。SK－12覆土中からは大量の無地の紙を検出したが、劣化が著しいため取り上げは不可能であった。SK－14は桶抜取坑と推測され、SK－24よりは新しい。

戦後局舎

近代基礎1～4は、元の町境界となるSD－03・06の南側に接して東西に直線的に並ぶ。前述した、米軍写真に収められた局舎の基礎の可能性が高い。基礎1～3は、一辺1m前後の方形の壺地業内部に拳大円礫と細砂を20cmほどの厚さで敷き詰め、中央には直径16～18cm、長さ1～1.3m程度の松丸太杭を基礎杭として打ち込んでいる（1）。直下にSD－10が存在するため、軟弱地盤に対応した「礫敷壺地業杭基礎」を施工したものと考えられる。基礎2の細砂中からは亀甲網入り板ガラスの破片が1点出土しており、少なくとも戦中以降に構築された証明となる。調査区西壁にも突き刺さった状態の杭が見え、長さが足りず、2本以上打ち込んでいる。

杭基礎5本の水平な杭頭の標高は、94.680mでほぼ揃っている。基礎1・2・4の杭間は1.975m≒6.5尺、基礎2・3の杭間は3.95mを測る。6.5尺で計算した場合、基礎3から西壁杭基礎までの間には、本来7本の杭

基礎があったと予測する。基礎2の南4.25 m（14尺≒4.242 m）には多数の礫を集積したSS－01が位置する。その南4.25 mの東西ラインは現代のカクランと試掘2トレンチよって破壊されているが、調査区南東隅にある扁平円礫2点は、礎石と推定する。米軍写真を見ると、局舎の東側は築間を半分程度に減じており、基礎4が本棟北東隅と推察する。近代基礎8も深く打ち込まれた杭基礎で、束柱の可能性がある。以上から、戦後局舎は安定地盤と軟弱地盤に個別に対応した複数種類の基礎工事によって建設された、築間8.5 m・4.25 mの長大な建物と考えられる。SD－03の北側で直線的に並ぶ4本の基礎杭は、溝を越える渡り廊下や庇などに伴う基礎であろう。建物規模から考えれば安定地盤上の基礎は非常に貧弱であり、深い杭基礎も打ち込まれず、その背景に物資不足を想定する。調査区内の近世遺構などから亜地築の礫を調達した可能性もある。ただし、複数の杭頭が水平に設定され、桁行杭間はほぼ精確に等間隔で、杭筋が直線であるところに、技術力がうかがわれる。

SK－15は丸木杭3本と、礎板上の角柱1本で構成された建物基礎である。杭は清曲材で、柱材は一辺15cm程度である。遺物は19世紀前中葉だが、他に同様の基礎はなく、近代と推定しておく。集緒器と思われる遺物も出土した。SK－27はプランを明瞭に捉えきれなかったものの、綺麗に切断された松杭2本が横たわり、鉄線（8番線）が巻き付けられていた。基礎工事に係わる廃棄土坑であろう。ここからは多種類の動物骨がまとめられた状態で出土しており（**図版**参照）、本来はごく小さな土坑が存在していたものと考えられる。可能性として、近世の動物遺体廃棄土坑（例えば近接するSK－101など）を不意に掘削してしまい、まとめて埋め戻した行為を想定する。

戦後遺構群

主軸方位がほぼ一致し、西側にまとまるSK－02～05・08・09は、昭和26年の焼失直後に掘削された廃棄土坑と推測する。SK－04の覆土には大量の炭化物が含まれる。SK－05からは数個体の乾電池（1941年制定規格丸形1号）や、ダニエル電池外瓶などが出土した。未掲載などが、飛翔する鳥の図案に「TOKAI SEITO」のロゴが入った磁器皿や、クリーム用ガラス壜、2重円の外側に「三州新川特製」・内側に「六」の刻印をもつ瓦片などが出土している。

レンガ塀コンクリート基礎

SB－01はレンガ塀のコンクリート基礎構造物である。溝状の掘り込み内に埋設されており、東西端は後世の撹乱で破壊されていたものの、ほぼ原位置を保持していたものと推測する。コンクリートには径5cm前後の円礫が多量に含まれる。コンクリート基底面には人頭大以上の多量の亜円礫が固着している。レンガ（23×11×5.5cm）は長手と小口を交互に積むイギリス積みモルタル目地である。昭和26（1951）年に焼失し、間年中に再建された建物については構造などが不明であるが、おそらくは戦後局舎を踏襲していたものと思われ、SB－01と同時存在できない。昭和34（1959）年に新築された局舎は中山道に面したコンクリート建築である。この本棟とは別に、参道に面した長大な建物屋根が1961～67年の航空写真に見え、これがSB－01の可能性がある。ただし、大正14年、郵便局本棟北隣に近代的なコンクリート造りの電話局が建設されており、このレンガ塀が大正14年以降戦中までに存在した可能性も否定できない。

電池・電気・電信・電話関連遺物

近現代遺構および表土中から、郵便局内の電信局および電話局で使用されたと考えられる電気・通信に係わる多種多様な遺物が出土している。液体型湿電池は、近代の電信・電話や時計、諸々の器械に必須の電源であった。

（電池）液体型の湿電池については、ダニエル電池・フーラー電池・ルクランシェ電池（2）が出土している。ブンゼン電池の内外槽は丸形ダニエル電池等との共用も可能ではあるが、当時の郵便局での使用実態が不明であり、含まれていない可能性が高い。重クロム酸電池（＝バイクロメート電池）と思われるガラス瓶（器厚2mm前後のフラスコ形）（3）の破片も出土したが、実物や当時の図（4）とやや異なる部分もあり、小片では確証がないため割愛した。乾電池が発明・実用化されたあとも、電力線未架設や乾電池に切り替わっていない一部の地域をはじめ、電力供給が安定していない時期には、終戦後まで壁掛け時計やデルビル式電話機などに使われていたらしい（5）。郵便局や電信局および電話局では、明治・大正期にかけて大量のダニエル電池・フーラー電池・ルクランシェ電池・

バイクロメート電池を消費していたようである(8)。高崎郵便電信局においても他の郵便・電信・電話局舎と同様、受発信と通話に必要な電力を安定維持するため、電池専用部屋の存在を推測する。

本遺跡のSK－06から出土したダニエル電池素焼き楕円瓶は、1点以外全て破砕しており、内面には融解・再結晶化した銅がびっしりと固着していた。銅の内壁面への再結晶化が進行すると、楕円瓶を圧迫し、やがては亀裂をもたらしていたようである(7)。楕円瓶の底部の全破片点数は273点であった。対して、丸形ダニエル電池・ブンゼン電池・ルクランシェ電池・フーラー電池に使用される円筒形素焼き内瓶（素焼き筒）は、わずかに4点であった。素焼き筒底裏には、「トコナメ㊥」・「㊥製 上原販賣」・「㊥製」の刻印がある。楕円瓶には「み」27点、「モ」20点、「井」9点、「刃」4点、「ト」2点、「フ」2点、「六」1点の刻印が認められる。柿田（1998）を参照して、「㊥」は水野工場の水野由吉（元弘）、「井」は井上国二郎、「モ」が水上茂八、「㊥」が榊原安太郎に該当するものと考えられる(8)。『常滑陶器志』(9)では、「明治三十年水野元弘（二代）は電氣用レクラーシー及びバイクロムメートを創製し現に盛に製出せり」とあるが、「内瓶バイクロムメート」として博覧会に出品されているものは、実際には多連装木箱入り複液型バイクロメート電池、もしくはフーラー電池の円筒形内瓶と理解できる。

「フ」は、佐賀県・肥前の深川榮左衛門（のちに香蘭社を創業）が製作した可能性が高い(10)。2点のうち1点には墨の割り印が認められるが、文字が意匠か判別できない。このほか、京都の高山耕山化学陶器株式会社が明治14年から「電池用素焼筒」を製造しており、明治3～4年頃には大阪造幣局の依頼で硫酸瓶を製作している(11)。

ダニエル電池長平瓶（長角瓶）については、生産地が不明である。肥前の香蘭社が明治初期に工部省の依頼を受けて磁器製碍子と長平瓶を製造していたことは判明しており(11)、少数ながら実物が残っている。ただ、香蘭社製にはコバルト記号の「フ」(12)が入っており、本遺跡出土資料は『㊝』、『㊝製』、および未掲載ながら「㊝」の刻印が底裏面に見える。島津製作所展示資料には『㊝』が、島根県隠岐島の御崎谷遺跡出土資料には『㊝』・『㊝製』・「㊝」が刻印され(13)、同一工場・窯であろう。ダニエル電池などの磁器製外瓶については、高い絶縁性と安定品質が求められる磁器製碍子の製造技術をもった企業や工場・窯屋において製作されていたと考えるのが自然であり、可能性が高いのは瀬戸の加藤杢左衛門である。香蘭社を創業した八代深川榮左衛門と同じく、明治6年に電信頭・石丸安世の依頼で国産碍子の製造に成功している(14)。国産の高圧耐張碍子は明治38年に京都の松風工業株式会社（松風嘉定）が製作に成功(15)し、40年には加藤杢左衛門も製作している。〔電1〕の底裏墨書を「四四年八月二六日　重ク電廿用」と判読した場合、長平瓶を重クロム酸電池外瓶として共用していたことをうかがわせる。

ガラス外瓶については、SK－06を中心に〔電9・10〕と同じ透明底部破片が16点出土しており、『電池工學』（大正5年）の図から、ルクランシェ電池の円筒形ガラス外瓶と判断できる。ただし、他の円筒形湿電池とも共用は可能と考えられる(16)。最少個体数は10点前後と推測する。器厚はまちまちながら、サイズや成形法（体部横位微隆起線）は規格化されている。ロゴマーク陽刻破片は「⊙」・「◁▷」（Tの左に1文字ありか）の2点あるが、工場・企業は特定できていない。〔電13〕のガラス外瓶はフーラー電池かルクランシェ電池のいずれかであろう(17)。未掲載資料ながら、器壁1mm未満の直方体ガラス外瓶破片が数点出土している。〔電14〕は角形ダニエル電池の銅電極板と推測する。〔電16〕は沖電機工業製の炭素板電極であり、フーラー電池の電極と推測する(18)。

（乾電池）SK－05から、高砂工業株式会社製丸形壜号と思われる乾電池が4点出土した(19)。

（碍子）二重笠碍子（茶台碍子）や耐塩ピン碍子、屋内用碍子などがSK－05・06や近代基礎などから出土した。〔電27〕は香蘭社製で、昭和に入ってから海外向け碍子に菌の花のマークと「KORAN」が用いられているが(20)、この碍子は文字のみである。ほかに、「K」・「カ」・「キ」・「テ」・「Ⓓ」などがある。企業・工場などは不明である。

（木札）SF－01掘り方中から円形有孔木札が出土した。「ダニエル三〇」・「東高二送信」と墨書されている(20)。

1面の遺構の構築時期を整理すると、近代基礎5～7およびSD－09・SE－01・SK－15は明治38年以降、SK－12・13・19・24・46およびSL－01・02は明治末以降大正期、近代基礎1～4・8およびSK－27・SS－01・SF－01などは終戦直後もしくは昭和26年、SK－02～05・08・09およびSD－07と周辺撹土は昭和26年焼失時～直後と推定する。SK－06は昭和6年の可能性を残しておく。

1面（近理代）　脚註

1）調査区の北隣接地に居住する岩井氏御夫妻に伺ったところ、戦後の建て替え基礎工事の際、大量の杭を打っていたことを記憶しておられた。昭和22年の戦後再建時か、昭和27年の焼失後再建時のいずれかということであった。

2）電池名の和音表記には複数あるが、引用文以外は統一した。なお、重クロム酸電池とバイクロメート電池は同一電池を指す。ルクランシェ電池＝レクランシー電池・レクラーシー電池・レクランチ電池など。フーラー電池＝フラー電池など。

3）吉田（2007）によると、フーラー電池は重クロム酸電池の複液型電池であり、円筒形素焼き内瓶が必要になる。
吉田和正　2007　「一次電池技術発展の系統化調査」『技術の系統化調査報告 Vol.9』 国立科学博物館

4）島津製作所創業記念資料館にて重クロム酸電池を実見した。本遺跡出土資料は薄緑色の透明ガラス容器で、フラスコ形ガラス瓶の頸部が短く、底径11.1cm。『目録』や各種書籍・論文中に見られる銅版画資料に描かれた形状ともやや異なる。明治後半期の電池メーカーは多数存在していたようであり、汎用性や共用性の低い構成部品については、その全ての規格が同一とは限らない。ただし、角形ダニエル電池の場合、10個一組で装填する木箱があり、多連装型角形蓄ウム酸電池にも、電池数や電池サイズに応じた収納木箱が存在する。メーカー単位での規格統合があれば利便性が低下するため、電池部品及び電池の各製造者に対しては工部省電信寮や逓信省によって、一定程度の規格の統一が図られていたのであろう。
島津製作所発行『理化学器械及薬品其他諸器械図録』（明治43年）、『普通教育理科学器械及薬品目録』（大正元年）
『物理学器械目録』（大正2年）、『化学器械及び薬品目録』（大正7年）

5）原田敏照ほか『御崎谷遺跡・大床遺跡　－明治の海軍望楼跡と昭和の防空監視哨跡の調査－』 2001　島根県教育委員会文末の註に、執筆者が電電公社に勤務していた方から聞き取った情報を記載している。昭和20年代では電力供給が不十分で、ダニエル電池10個を1組として複数組を通信用に使用していたという。
通信文化協会　2012　「通信総合博物館　展示品・所蔵品紹介」『通信文化』6号　通巻1216号　p 47
人面に類似した特徴的形状で有名なデルビル式電話機は明治29年に登場し、電話局に信号を送るためにルクランシェ電池2個を必要とした。電源が変化しても一部の小規模局では、昭和40年代まで公衆電話として使用されていたらしい。

6）曲淵　昭和44年『乾電池』 第532号　日本乾電池工業会
脇坂貴一・小島　潔　1916（大正5年）「乾電池に就て」『研究報告第一八號』 電気試験所第二部
とこなめ焼協同組合・常滑市民資料館編　2000　『常滑の陶業100年』『3.3.　電池用素焼瓶』
明治22年に常滑の水野由吉工場がダニエル電池用素焼槽円瓶の製造を始め、明治36年には水野工場はじめ複数の窯・工場において湿電池用素焼円筒内瓶が大量生産されていたようである。当時年間数十万個の需要をほぼ賄っていたらしい。大正4年の通信省使用電池数は、電信・電話・信号用としてダニエル電池約10万個、短距離電話加入者用としてルクランシェ電池約30万個、長距離電話加入者用としてバイクロメート電池約5.8万個のほか、各種乾電池1万5千個となっている。

7）『逓信事業史』（逓信省編　1940年）によれば、明治24年度の国内電池材料需要量は、梅円瓶が4万3千個、長平瓶が2万6千個となっており、梅円瓶の方が1.65倍も多い。実験したことがないため精確ではないが、梅円瓶の方が破損や不注意による破損の頻度が高く、連続使用による製品寿命（溶解した鋼が円瓶全面に付着、内空間の半分以上が再結晶化鋼で占められる、鋼が内壁を圧迫して亀裂が入るなど）が短いことを示している。

8）小泉康寛氏（とこなめ陶の森資料館）にご教示いただいた。
柿田富造 1998「近代博覧会に見る常滑焼小細工品の流れ」『常滑市民俗資料館研究紀要Ⅶ』
前出の御崎谷遺跡では「み」・「六」のほか、「卜」・「コ」・「㊤」・「㊥」・「B Y」の刻印がある梅円瓶が出土している。ただし、素焼き円筒瓶は出土していない。西郷南草望楼（御崎谷遺跡）は明治31（1898）年設置、同43（1910）年廃止である。

9）澤田貞一　明治45年『常滑陶器志』 常滑青年会

10）佐賀県立九州陶磁文化館　2006『近現代肥前陶磁器銘款集』　深川の「フ」で、明治初期から大正まで使用された。

11）香蘭社総務部　森　知巳氏のご教示による。逓信省や海外に、碍子・長平瓶・梅円瓶を納入・輸出していた記録が残っている。

12）『近現代肥前陶磁器銘款集』（前掲）および　一般社団法人電気学会　2015『第8回　でんきの礎』

13）原田敏照ほか（2001、前掲）の御崎谷遺跡（海軍望楼跡）の長平瓶と梅円瓶には、「卜」・「㊤」の刻印がともにあり、同一製作地であることが指摘されている。

14）岩井　理　2009「明治時代の瀬戸の窯業と陶磁器販売業「山業合名会社」」 ニュースレター 2009年7月号
日本陶磁器産業振興協会

15）藤岡幸二　1962『京焼百年の歩み』 財団法人京都陶磁器協会
島津製作所　1918『化学器械及び薬品目録』では、最初の数ページが松風工業の「SCP 化学磁器」の目録に充てられている。近代京都を代表する理化学機器メーカー2社の協力体制は、製品規格にも影響を与えていたことが予想される。

16）島津製作所 1913（大正2年）『物理学器械目録』では、丸形ダニエル電池・ブンゼン電池（小）・グローブ電池の外槽（外瓶）のサイズは同一（底径11cm、器高15cm）であり、実際の使用にあたって共用は可能であろう。
屋本鼎吉・若目田利助・高津清・村尾榮監修 1916『電池工学　全』 建築書院

17）上記目録において、フーラー電池の説明文は「Fuller's　Cell …Square…」、「外槽ノ底ノ大サ 10 糎平方　高サ 15 糎平」とあるが、神國創版画では口縁部から底部まで寸胴の円筒形に見える。前掲『電池工学』では、直方体の外槽の口縁部だけが円形を呈する口丸直方体である。ルクランシェ電池も口丸直方体のガラス外瓶だが、国内一般では円筒形ガラス外瓶を使用しているようで、体部中位の横位微隆起が特徴的な指標となる。

18）ルクランシェ電池の電極も同様の形状だが、本資料欄素板外面には緑青に似た色調の物質が塗膜状に付着する。オレンジ色の重クロム酸カリウムが、硫酸と亜鉛電極の反応によって濃緑色に変化したものであろう。なお、神電機工場の明治23年のカタログには、「ダニエル電池、レクランチ電池、バイクロメート電池」など11種類の湿電池とともに、「丸形素焼内瓶、陶製丸形外瓶、長平瓶、梅円瓶、碍子外瓶、カーボン付内瓶」などが列記されている。「フーラー電池」の記載はない。
久住清次郎 1932（昭和7年）『神呼太郎』 故神呼太郎伝記編纂係

19）『日本乾電池工業史』 昭和35年　日本乾電池工業会　および　吉田（2007、前掲）
1941（昭和16）年に制定された「臨時日本標準規格第205号」に、一般用乾電池丸形1号として、「直径75±1.5mm、高さ145±1.5mm、端子を含む高さ160mm以下」とある。

20）郵政博物館資料センターには類似資料が保管されておらず、電信局で一般的に使用されていた木札かどうか不明である。

3．２面（近世・As－A以降）

As－A降灰（天明三年・1783年）以降、明治までの近世面である。SD－10の南側は「大信寺門前」（安政３年「上野国群馬郡高崎御城下町絵図面」）と表記され、寺伝によれば、寺侍や中間（ちゅうげん）の居住区域でもあったともされている。

町境の溝（用水路）SD－10（SD－12・19）

本来は大溝であったSD－10は、おそらく上端幅50～90cm程度の溝（SD－12・19）になっていたと考えられる。北壁側には多数の護岸杭が打ち込まれている。覆土中からは杭を打ったと思われる掛矢（近代基礎５掘り方として掲載）や大型の石臼破片（水車臼か）なども出土している。『高崎町奉行日記』の中に、SD－10（SD－12・19）の覆土中遺物出土状況の実態を示すような記述が見える。城下町を流れる堰（用水路）への塵芥投棄がひどいため、寛政６（1794）年八月、城下出口に塵捨場５ヶ所を設置し、不法投棄には過料を徴収して対応したがあまり効果がない（「郡方雑記」）ので、通町から城下外の水田へと流下する用水路の上流８ヶ所に塵留杭を打って塵渡いの対策を講じた結果（寛政９年以降）、功を奏したという内容である（『新編高崎市史　通史編３近世』第５章２節）。杭を打った場所として「…　壱ヶ所　連雀町田町境　…　壱ヶ所　白銀町」とあり、上記の絵図では前者は現在の新中山道西側用水路を、後者は旧中山道西側用水路と考えられる。前者の杭地点はSD－10との交点にあたる可能性が高い。覆土に細砂は認められず、腐植物を含んだ暗褐灰～黒灰色の粘質土やシルト質土で埋没している。覆土から多量の陶磁器類や木製品が出土した状況を、当時の遺構堀の実態に照らし合わせれば、「塵芥堰中ニ夥敷有之」（遠御構通塵芥焼捨之儀ニ付御達書「郡方雑記」『高崎史料集』雑記録　大河内２　p131－p132）と表現されている通りである。

SD－08は調査区南東隅に位置する。撹乱などで詳細は不明だが、西側へは伸びない。覆土上面は焼土と灰が主体の薄層で覆われ、隣のSK－74（３面）をも被覆する。焼土層は文化４（1807）年もしくは文化９（1812）年と考えられ、SD－08の時期は19世紀初頭頃と推定する。

埋桶遺構（便所遺構）・廃棄土坑・建物跡

SD－10の南脇には、便所と推定される埋桶のSJ－1・2・5および桶抜取土坑のSK－42・43・44・46の７基が直線状に並ぶ。SJ－04・08が少し離れ、SJ－07は南西側に単独で設置される。上福島中町遺跡の事例からは２基１組での礎石建て上屋あるいは屋根を伴わない壁囲いが想定されるが、判然としなかった。

埋桶群の南側には、大小の廃棄土坑17基が掘りこまれている。２面の中では大きく重複する土坑がなく、それぞれの位置を認識していた可能性がある。SK－35・57・82・83・97・98がコの字状に展開しており、その内部にSK－60・80・81・101が配置されている。SB－02・SD－15の存在も合わせて、一定の規制が働いていた可能性が高い。SK－21・35・81・83では桶材が多数廃棄される。SK－35aでは漆椀数点のほか、下駄が16点も出土した。歯と鼻緒が残存した個体が１点ある。SK－35bでは曲物のほか、柱材４点が出土しており、SB－02の解体に伴う廃材であろう。SB－02は、面取り角柱２本が棚立状態で残存し、SK－35の北壁に接している。柱間は1.836ｍ≒６尺を測る。建物構造は不明ながら、おそらくは東西棟の建物で、SK－35は軸方向を踏襲しているものと推測する。SK－55は多数の破砕した瓦が出土しており、付近に建物があったものと推測する。

火災に伴う土坑

SK－60・63・83・98は、覆土中や覆土上面に焼土塊を多量に含み、火災後の廃棄土坑あるいは火災直後に最終埋没したと推定できる。As－A（天明３年・1783年）以降で当地の被害が想定される火災は、寛政10（1798）年に本町から出火（放火で捕縛された忠兵衛は江戸で火罪）した城下最大の大火、文化４（1807）年に羅漢町から出火した大火、文化９（1812）年に本町から出火した大火、嘉永元年（1848）に中組屋町から出火した火災、文久２年（1862）に本町から出火した大火の５回がある（『新編高崎市史　通史編３』第５章２節・同巻末年表および「高崎古代並び諸雑記」『新編高崎市史　資料編７上』）。SK－60については出土遺物の上限が18世紀末葉であることから、凝灰岩製七輪と完形の棟瓦を伴う焼土層は1798年に相当する可能性が非常に高い。SK－63も、下部のSK－84に大量のAs－Aが含まれることから推察して、1798年であろう。SK－21の桶側板は上半部が、SK－101の桶底板は全体が炭化しており、火災の可能性もある。なお、両土坑からは動物骨が出土している。

胎児の墓坑

調査区南壁にあるST－01は、胎児（妊娠後期・7～9ヶ月）の埋葬土坑である。東側の土坑から全身骨格が良好な状態で検出された。微小な骨が多く、大半は水洗選別によって回収した。30点以上の釘が出土し、本来は納棺されていた可能性が高い。土坑には微量の炭化物を含む貝灰の純層が充填され、上面を黒色土で覆う。調査時には白色の灰層が上饅頭状に盛り上がった状態で確認した。貝灰層の水洗選別によって、微小な魚貝類遺体や麦・クルミ・多数の不明炭化種子が検出された。西側の土坑も同時埋葬遺体の存在を予測するが、礫が1点出土したのみである。ST－01は大信寺敷地内とはいえ、明らかに墓域外における単独埋葬であり、貝灰の覆いは特異である。漆喰や石灰で遺体および棺・槨を覆う埋葬法は、近世大名家など、儒教思想による葬送儀礼を遵守している階層に限って認められているようである（松原典明　2012『近世大名葬制の考古学的研究』雄山閣）。大信寺ご住職に近世期の過去帳を繙いて頂いたが、該当する人物は見いだせなかった。ST－01周辺の参道に面した範囲は、As－A降灰直前から遺構希薄地帯となっており、廃棄土坑や便所遺構が集中する「裏手」との違いは明瞭である。被葬者が出生や血縁関係に特殊な事情を抱えている蓋然性は高い。

白銀町に帰属する遺構群

白銀町（SD－10の北側）では、中央付近に南北溝のSD－04があり、敷地境界と推測する。この溝の西側では遺構群の下部にAs－Aの堆積が残存するが、東側には見いだせず、基盤の土質も異なる。東側では、SD－10（SD－12）に沿ったSK－36～38・94・95・107が逃続的に更新された埋桶遺構で、SK－36が最も新しい。桶材は全て抜き取られ、SK－36～37ではタガおよびタガの痕跡が壁面に残されていた。SK－38からは羽口と鋼製の柱金具と思われる遺物が出土しており、冶金や鍛冶など金属加工業者の存在をうかがわせる。SK－39は穀物土臼が倒置して出土した土坑である。SD－04の西側には、大小の土坑が著しく重複する。SK－119・120が最も古い。SK－62からは鍬が出土している。元禄16（1703）年に描かれた『高崎宿倉賀野宿往還通絵図面』では、赤坂町・本町・田町・新町（もち）・新田町・南町6ヶ町に「作人」が83軒存在しており、農商混在型の町民構成であったと推測されている（『新編高崎市史　通史編3　第3章1節』）。白銀町においても18世紀第4四半期以降に農業に従事する世帯が存在していたことになろう。

4．3面（近世・As－A降灰直前～直後）

As－A降灰直前に機能していた遺構と、降灰による直接埋没ならびに降灰直後に埋没した遺構を3面とした。

SD－10は上端幅90～150cm程度、深さ23～37cmの溝として機能している。As－Aが5～10cmほど堆積しており、一部では一次堆積ユニットが確認できた。護岸杭が多数打ち込まれ、特に白銀町側の北岸に多い。これは、SD－10の南側よりも北側の方が、最大で20cmほど標高が高いことに起因しているのであろう。最も多いのは丸木杭で、建築材や農具柄、桶側板の再利用も多く、釘が打ち込まれた状態のままの建材も含まれる。SD－21はSD－10へと流れ込む白銀町の南北溝で、覆土下層はAs－Aと細砂で、上～中層は均質な褐灰色シルトで埋没する。左岸（東壁）には杭と横木による護岸が設置され、その上部には大型礫が敷設される。この礫は礎石の可能性もある。SD－22は大量の礫が投棄された南北溝で、本来は護岸礫として敷設されていたものだろう。SD－10の埋没速度が速いため、As－A降灰前から既に存在していたものと推測する。SD－13の下部の旧い溝と接続して、南側の道路からSD－10へと排水していたと推測する。

SK－105はAs－Aが一次堆積した土坑で、ほとんど遺物を含まない。SK－64・74はAs－A廃棄土坑、SK－79はAs－A降灰直後に瓦や板材を廃棄した土坑である。SK－64・79から出土した瓦当などが、SD－13に護岸として転用・埋設された板瓦と接合している。おそらく、SD－13の埋没完了直後にAs－Aが降灰したものと推察する。SK－79からは炉壁が出土した。遺跡内からは羽口も出土するが、工房跡や炉自体は未検出である。SJ－06は、埋桶の下半分に抜き取られた桶板とともにAs－A純層が廃棄され、上層は細砂と粘質土の互層となっている。降灰によってSD－10からA軽石と砂を含んだ水が溢れて流れ込んだものと推測する。

5．4面（近世・As－A降灰前）

4面は、As－A降灰前の近世面である。出土遺物には中世期と考えられる遺物はSD－10下層の内耳土器1点のみであり、17世紀代の遺物もごく少量である。井伊直政の高崎転封に伴った連雀町の町割りと大信寺の高崎移転は1598年頃、通町の形成は慶長頃と言われ、当初の中山道は調査区の東側、大信寺山門前を南北に通過していた（関戸明子・奥土居満　1996『高崎城下町の形成過程と地域構成』『歴史地理学』180）。『大信寺文書』のうち、12世喚誉が延宝7年にしたためた「記録」にはすでに「門前3軒」と書かれている（群馬県立文書館所蔵）。開都詮房が9代藩主の期間（宝永7・1710年～享保2・1717年）に描かれた「開都氏当代高崎絵図」では門前でなく町屋として表現されているが、安政期の絵図ではSD－10の南側全てが「大信寺門前」となっている。「開都氏当代絵図」では向雲寺や大雲寺の門前は朱描きされていることから見て、18世紀のどこかの時点で、例えば1724（享保9）年の大火や1742（寛保2）年の洪水などを契機にして、通町の一部が寺領へ編入された可能性がある。

町境の大溝SD－10、敷地境界溝SD－13・14・17・22

調査区を横断するSD－10は、連雀町と田町、大信寺門前（通町）と白銀町の元々の境界となっている。掘削時の上端幅3m強、深さ1m強の薬研堀状～箱堀状の底面には大小の円礫が多数散在する。基盤シルト層には大量の円礫などは含まれていないため、本来は溝の護岸などに用いられていたものが転落したものと推測する。覆土最下層からは、底裏に「元禄十四年　巳七月廿日かへ申候　清吉」と墨書された饅水入れが出土しており、溝の開削は1701年より前であることが判明した。高崎城の完成は1692（元禄5）年頃とされているから、本溝の開削も城下町整備の一環であることを考慮すれば、17世紀後葉～末葉の間に開削されたものと考えられる。As－Aより下位の覆土下層からは大量の陶磁器類・土器類・木製品が出土し、溝への投廃棄行為は著しい。As－A降灰までの100年間で、浚渫をしても年平均1cmの堆積速度が維持され、およそ1m埋没したことになる。SD－10は東側の旧中山道まで直進し、そこで南北方向の溝に合流していたものと想像される。西側は中山道を横断して鞘町で折れていたか、あるいは中山道沿いの南北溝と合流していたものと想定される。

SD－22はSD－10に食い込むようにして存在しており、埋没したSD－10に掘り込まれて、As－A降灰直前まで機能していた分岐溝であろう。SD－13aとは同一溝の可能性がある。SD－13aは当初は素掘り溝であったが、壁際を埋戻して両側に護岸礫が整然と敷設された溝へ変化する。埋没が進行すると、溝中央に板瓦を埋設（再利用）した護岸を設け、細い溝となってゆく。SD－13bとSD－14は、敷地を南北に2分する東西溝である。接続していた場合は、西から東へ流下する。SD－13bの溝内には護岸の石列が一部残っており、うち北列については礎石の可能性がある。北北西－南南東に走行するSD－17は、重複するすべての遺構より古く、町割り初期に近い溝と考えられる。他の遺構の主軸が概ねSD－10に平行・直交するのに対し、SD－17は中山道および旧中山道を意識しており、SD－10開削以前と想定する。

調査区東壁に位置する南北溝・SD－23も古い溝で、遺物が皆無なため詳細時期不明であるが、16世紀末～17世紀初頭、町割り最初期の可能性を考えておく。

掘立柱建物群SB－04～11、柱穴列SA－01、礎石建物跡SB－03・SX－01

4面遺構群の最下層において約130基の柱穴を確認し、8棟の掘立柱建物と1条の柱穴列を想定した。ピットの切り合いと各遺構配置状況から、新旧関係は、SB－09・10・11→SB－04→SB－07→SB－06→SB－05→SB－08と推測する。SB－09～11は、主軸がSD－17と平行または直交する小建物群である。SB－04～06は縮小傾向にあり、SB－08は主軸が振れる。SB－08については北側のSX－02の縁石が伴う可能性もある。SB－03は東西方向の石列と、小礫の散布する遺構である。おそらく礎石建物の一部と考えられるが、構造は不明である。SX－01は礫が方形状に集中した周囲に焼土・灰が堆積する遺構で、礎石建物に伴う囲炉裏と想定する。建物構造は不明だが、SX－02の東西石列（SB－08に伴う可能性もあり）が礎石あるいは縁石になるかもしれない。調査区中央部には、SK－78上面・SK－69a上面・SS－02をはじめ、多数の礫が散布している。礎石建物の存在をうかがわせるが、明確に捉えることはできなかった。次項で述べる火災後廃棄土坑には、これら礎石建物の炭化材が含まれているものと推測する

火災後廃棄土坑

SK－28・56・68・77は、多数の炭化材と大量の焼土・灰が検出された。火災後の廃棄土坑と考えられる。1724(享保9）年に通町から出火した大火、1725（享保10）年に通町出火で風下6ヶ町が焼失した火災、享保12（1727）年に田町から出火して風下通りが全焼した火災のうち、おそらく1724年の大火が原因であろう（『新編高崎市史通史編3』第5章2節・同巻末年表）。1621（元和7）年にも「道観火」と呼ばれる大火はあるが、出土遺物からみて該当しない。SK－66はトレンチ状の形状を呈し、底面が階段状をなす特異な土坑である。下層が細砂やシルト、上層が焼土を多量に含む層で、未使用完形の羽口が出土した。最終埋没時期は1724年の可能性が高い。

埋桶遺構（便所遺構）・井戸・土坑群

SJ－09・10と、桶抜取土坑のSK－114・116は便所遺構であろう。SD－13aおよびSD－22の脇に直線的に並列する。SK－114は2基1組の桶抜取坑であろう。SJ－09・10も2基1組の可能性が高い。建物群よりも新しいため、火災後の構築と推定する。

井戸は5基ある。石組み井戸のSE－03からは、大量の木材と被熱した徳利などが出土し、1724年の火災に伴って廃棄された井戸であろう。SE－04はSD－13aよりも古く、SE－03とは近い時期であろう。SE－02は上半部を撹乱で破壊され、覆土の状況が不明である。下層出土遺物は比較的古く、初期の掘立柱建物に伴う可能性がある。SE05は小さな素掘り井戸で、遺物はない。SE－07は大半を撹乱で消失しており、時間の制約からほぼプラン確認のみにとどまった。均質な褐灰色シルト質覆土で埋没しており、最も古い井戸の可能性が高い。一部掘削したが遺物は皆無である。

SK－59・69a・96・112は、陶磁器や瓦、桶板材や礫などが廃棄される土坑である。SK－69aの鬼瓦はSD－10下層出土のものと接合している。SK－59出土の堺明石系擂鉢が3面のSK－79と接合しており、本土坑はAs－A降灰直前に埋設したものと考えられる。SK－112からは腐植した板材とともに下駄2点が出土した。

白銀町に帰属する遺構群

中央のSD－11と、東側のSD－24が敷地境界の排水溝で、東部・中央部・西部に分かれる。

SD－24は、当初素掘り溝であったものを、新しい段階では東半分を礫で埋戻して上面に礎石を載せて、西側に細く残った溝の底面には破砕した瓦を敷設して洗掘と浸食を防止している。この礎石2点と東側へ延びる石列および小礫集中の礎石を合わせて、SB－12とした。南北棟建物の下屋部分しか確認できていないものと考えられる。SD24は最終的には廃棄され、溝内には埋桶遺構のSJ－11が埋設される。SJ－11の北側には、拳大円礫を60×40cm四方の範囲に丁寧に敷設した足場が設けられている。SJ－11の東側には組をなすSJ－12が、井戸・SE－06の覆土中に構築されている。SK－40・41・121・124・125は砂質～シルト質覆土の性格不明土坑である。SD24の西側には、桶抜取土坑のSK－126が1基のみある。底面には厚さ1cm程度の白色粘土が貼付されており、SK－94（2面）の桶抜取坑に破壊されている。上記遺構群の直下には、SD－20が存在する。時間の制約のため完掘できなかったが、覆土下層は腐植物多く、17世紀末葉～18世紀前葉を示す陶磁器類も多数出土する。SD－10とは一部重複し、同時期頃に掘り込まれた遺構であろう。SD（溝）としたが、実際には溜池状の施設であった可能性がある。

中央のSD－11の底面からは陶磁器類がまとまって出土した。覆土下層には腐植物が多く、上～中層は均質なシルト質覆土である。直上にSD04（2面）が存在し、As－A降灰後も踏襲されていることが解る。西部にも、SD－10の壁際に埋桶遺構SJ－13が1基ある。SK－123は溝状の遺構だが、非常に不整形な掘り込みとして、土坑扱いにした。中央には小ピットが集中し、東端はSK－129・130が重複する。SK123は暗褐灰～暗褐色覆土で埋没した後に灰白色～明浅黄橙の均質なAs－A火山灰層がやや厚く覆い、その上にはAs－A軽石が堆積する。As－A降灰時にはすでに埋没しているが、徳利などは一部露出している状態である。本土坑からは取脚と考えられるかわらけが2点出土している。分析を行っていないので、銀の溶融に使用したかどうかは不明ながら、鋳造に関わる資料が白銀町から出土したことは特記しておきたい。

6．５面（中世）

調査区南壁と並走するように、SD－18を確認した。記録として残していないが、SN－01畦畔の直上においても、粗砂と細砂で埋没した東西方向の溝を、調査時に確認している。ともにAs－Bを切り込んでいることから、中世水田用水路と推測する。２条は並走するが、覆土が異なるため、同時存在ではないだろう。東壁には細砂が認められないため、SD－23によって破壊されている。SD－23については、中世の可能性を完全には排除できない。

7．６面（As－B直下）

調査区南端の32㎡分のみ、As－B下水田の調査を実施し、東西畦畔１条を3.4ｍの長さで検出した。畦畔の幅は一定ではないが、下端幅49～100cm、上端幅33～86cm、高さ５～８cmを測り、水口を１ヶ所伴う。西端部が細いため、大畦畔となるのかどうか、不明である。１条のみでは条理地割に合致するかどうか分からないが、東西を指向（N－90°）していることは間違いない。As－Bは最大で厚さ６cmほど堆積しており、不整形で粒径の大きい軽石が含まれていた。

8．７面（古代）・８面（古墳時代）

試掘２トレンチ内および基本層序トレンチにおいて、As－B下水田の黒灰色粘質土のさらに下位において、黄褐色細砂（上層）と灰色細砂（下層）の堆積を確認した。層厚は最大で30cmを測る。面的に調査を実施しておらず、具体的なことは不明である。ただし、SD－10・SE－05の壁面ではいずれも見えていないこと、SE－04には切られていることに加え、基本層序トレンチ東壁で立ち上がることから、SN－01の畦畔とほぼ同じ走行方向であると推測され、洪水層で埋没した水田用水路の可能性がある。上端幅は２ｍ前後であろうか。時期不明ながら、古代の範疇で捉えておく。この溝状遺構の直下にもほぼ水平に砂層が堆積し、より古い洪水層であろう。

調査区北西隅、SD－10の調査時に、SD－16を検出した。溝は攪乱を除去した直下に残存しており、本来の深さは不明である。主軸方位は等高線と平行するような北東－南西を指向している。覆土中には微小な白色軽石を微量含み、As－Cの可能性がある。黒灰色粘質シルト覆土で、遺物は皆無である。時期不明ながら、層位や覆土の状況を考慮して、古墳時代と推定する。

9．出土遺物

木製品も含めた遺物総量は、収納箱にして約125箱である。掲載遺物は遺物観察表（表18～36）を参照いただきたい。遺構一覧表（表２～17）の遺物の項目には、一部の未掲載資料についても記載をしている。

近現代遺物のうち、電池・電気・電信・電話に関する資料と、近世を主体とする木製品や漆器については、遺構ごとではなく、それぞれにまとめて掲載した。よって、電１、電２‥および木１、木２‥という略記号で表記した。

（近現代）液体型の湿電池について、いくつか概要を記しておく。角形ダニエル電池については、外槽である磁器製長平瓶（長角瓶）の内部に、素焼き内瓶の楕円瓶を挿入し、楕円瓶には希硫酸銅水溶液を、長平瓶には希硫酸亜鉛水溶液を注ぎ入れる。前者には銅電極板と銅結晶を入れ、後者には亜鉛電極板を垂下させて、電極間を銅線などで繋げて電力を取り出す。起電力および電圧は1.07ボルトで、主に電信用に利用された。イオン化傾向の差によって、亜鉛が溶け易く、銅が溶けにくいから電流が発生するわけだが、実際の楕円瓶内壁には再結晶化した銅がびっしりと固着している。素焼き楕円瓶は、銅溶液と亜鉛溶液を分離しつつ、硫酸イオンだけが交換できるためのフィルター（セパレーター）の役目を果たす。セパレーターのない状態（≒ボルタ電池）では、発生した水素が銅電極にまとわりつき、急激に電圧が落ちる（＝分極）。他方、丸形ダニエル電池では、外瓶内に硫酸銅溶液と銅電極、素焼き内瓶内には硫酸亜鉛溶液を溜めて亜鉛電極が挿入されるため、一見すると角形と構造が逆であるが、電池としての化学反応には相違がない。ダニエル電池の一般的説明は丸形の方でなされるから、注意が必要である。

フーラー電池はバイクロメート電池の複液型である。円筒形もしくは口丸直方体のガラス外瓶に（→63頁）

表2　遺構一覧表　近代基礎　単位：cm（瀬：瀬戸・美濃、肥：肥前、波：波佐見、京：京焼系、桧：桧焼、伊：伊賀、陶：陶器）

遺構名	面	主軸方位	長軸×短軸	深さ	平面形	断面形	特徴的な遺物	概要・備土・所見	時期
近代基礎1	1面	N－90°	113 × 92	16	方形	逆台形	瀬磁端反碗	細砂と円礫を充填した亀地楽中央に長さ約1～1.3 mの松杭を打ち込む。杭頭標高は揃えず。建物盗地築祇基礎。調査区西壁の松杭、SS 01・03・04などで構成された長大な鳥巻の基礎の一部。SD 10 並上の敢例地盤に延工されている。近代基礎3を破壊する。	建物破損していた一部鳥巻再築（鉄筋前夜の空間で流失か）の昭和22年、もしくは火災後の26年。
近代基礎2	1面	N－4°－W	105 × 96	21	方形	逆台形	肥前型打輪花小皿		
近代基礎3	1面	N－90°	(130) × 120	32	方形	逆台形	危中鋼入り板硝子片 鉄製ボルト		
近代基礎4	1面	N－89°－E	(128) × (87)	55	方形	逆台形		近易1～3と一連の杭基礎。円礫・砂なし。	
近代基礎5	1面	N－88°－E	118 × 71	55	楕状	逆台形	瀬磁クロム鋼・銅版 鉛巻、方古茶急頭、鉄包丁、猟銃ピン、智立ち	SD 12 を破砕した多量の陶磁器類・瓦や板材を含む土で埋め戻した後、床束状の角柱を密に耐	明治38年以降か
近代基礎6	1面	N－85°－E	669 × 104	17	楕状	逆台形	瀬磁型紙陶付碗 伊陶焼土瓶蓋、益子コバルト土瓶蓋	SD 19 を多量の陶磁器類・瓦で埋戻し、円礫・漆喰モルタル片を敷設した布基礎。SP 09 ～ 11は柱穴の一部。	明治38年以降か
近代基礎7	1面	N－87°－E	<255> × <201>	32	方形		鉄製ボルト、碍子、瀬磁型紙碗、炭粕土瓶、瀬磁陶花鉢、弾甚石、寛永通貨（足半銭）	方形の掘り方を石白・木材等で埋戻し、中央には魚撒円礎を敷設。東・南は長さ174.5cm、厚さ5.5～7.5cmの枕状状の板材を転用して上台にする。北辺は敷板の板材を優に埋設して基礎とする。	明治38年以降か
近代基礎8	1面	N－80°－E	側り方 40 × 30	同左 40	楕円形		肥前磁器小坪	長さが1.4 mの松杭を打ち込んだ基礎。掘方あり。SK 27を切る。	昭和22年、もしくは火災後の26年。

表3　遺構一覧表　土坑①　単位：cm（瀬：瀬戸・美濃、肥：肥前、波：波佐見、唐：唐津、京：京焼系、桧：桧焼、伊：伊賀、丹：丹波）

遺構名	面	主軸方位	長軸×短軸	深さ	平面形	断面形	特徴的な遺物	概要・備土・所見	時期
SK-01	4面	N－7°－W	235 × 147	14	不整隅丸長方形	逆台形	瀬陶磁漆井摺絵鉢 唐津灯明皿	備土に焼土塊多単。炭化材多数。火災後の廃棄土坑。1724年通町出火の大火、1725年通町出火で風下を町焼失、1727年田町出火の火災あり（『新編高座市史通史編3』）。SD14を切る。	18世紀前葉（1724年か）
SK-02	1面	N－62°－W	81 × 70	4	不整形	浅皿状	肥磁型型紙捺コ	流土敷盛。SL 02を破り。	鉄砲疏後か
SK-03	1面	N－4°－W	70 × 55	12	不整楕円形	浅皿状	肥磁蓋瓶蓋口	暗褐色腐土、漆喰片少量。猪口に底裏墨書。	鉄砲疏後か
SK-04a	1面	N－90°	<168> × 38	49	長楕円形	桶状	角釘	西側。炭化物中量。深さ33cmのピット付き。	昭和26年か
SK-04b	1面	N－84°－E	<232> × 51	32	長楕円形	桶状		東側。炭化物非常に多い。深さ28cmのピット付き。	昭和26年か
SK-05	1面	N－86°－W	123 × 80	40	不整形	桶状	乾電池、ダニエル電池長平板、灰皿、湯呑、七輪	遺物・木材多数出土。廃棄土坑。深さ61cmのピット状の側り込あり。	昭和26年か
SK-06	1面	N－88°－W	<293> × 193	25	不整楕円形	桶状	ダニエル電池楕円形・長平板、湿電池ガラス外板、石鹸火鉢、抬円盤（1kg）	廃棄土坑。複数土坑重複の可能性あり。19世紀陶磁器類多数。備土地内鳥外巣多数。「宮」朱書のある漆器椀、皮靴底、鉄製コールタール容器、（亜鉛鍍）8番鉄線、電電線など出土。	明治末年以降明和初期頃（昭和6年西均平地調査後か）
SK-07	欠番・模索								
SK-08	1面	N－72°－W	177 × 75	46	隅丸長方形	桶状	京小彩陶、插瓶底	備土に焼土中量。廃材状瓦片、炭化材、炭化植物多数出土。火災後廃棄土坑。	昭和26年か
SK-09	1面	N－81°－W	304 × 72	15	不整楕円形	浅皿状	湯呑上絵海手酒杯 鳥形鳴子土鈴蓋	湯屋上絵海手酒杯、鳥形鳴子土鈴蓋。木材・植物などを含む暗褐色土。文久永宝1点出土。	昭和26年か
SK-10	1面	N－41°－W	70 × 52	40	不整円	逆台形		焼土・漆喰片・小円礫含む粘色腐土。	昭和26年か
SK-11	1面	N－15°－W	178 × 161	65	不整隅丸方形	側面逆台形	瀬陶半胴張紙用軟木林・木奥、肥磁赤市位文鍋水鉢、肥磁上色絵鳥蓋、丸瓦刻印「宮」、平瓦刻印「宮」、模丸瓦印「天」	備土上焼土ブロック主体、中位に焼土・炭塵、炭化植物。火災後の廃棄土坑。SD 04と同時存在か。明治13（1880）年迄使用・田町、九蔵町・檜物町全体（『新編高座市史通史編4』）	明治13（1880）年か（瀬陶水漬は11小期）
SK-12a	1面	N－77°－E	116 × (87)	13	長楕円形	桶状	行平肥平陶蓋（『鳥舟』、京丸陶「也用庵」、クロム青磁碗	西側。黒褐色腐土、炭化物殆多量、一括埋戻し。	明治37年か
SK-12b	1面	N－79°－E	(264) × (72)	35	長楕円形	逆凸形		東側。漆喰・焼土中量。植材多数出土。紙張痕出、一括埋戻し。明治37（1904）年鳥巻開墾。	
SK-13	1面	N－0°	<208> × (105)	22	不整長楕円形	箱形	ミ・盃、入形、瀬陶面台蓋杯、ビンセット	漆喰片・焼土・炭化物少量。SL 01に切られる。熱地・イッテンの杵平鋤蓋（無塗装か）	明治37年頃か
SK-14	1面	N－2°－E	140 × <96>	37	不整形	逆台形	京焼陶灰碗、猪口	門形落込みは植物取抜と推測。ガラス板出土。	近現代
SK-15	1面	N－8°－W	(124) × (70)	22	不整楕円形	桶状	猪口、土製油壺蓋	打込み杭3本、礎板上角柱1本と根張石の基礎。	近代、戦後か
SK-16	1面	N－89°－E	(168) × (66)	18	隅丸長方形		瀬磁型紙碗、瑚子	底面に灰層。植材多数出土。	明治37年か
SK-17	1面	N－8°－E	56 × 54	26	楕円形	桶状	コバルト陶灰碗、伊青土瓶、松岡土瓶	灰陶色腐土。幼児頭大の瓶円礎数点出土。根固不を伸う基礎か。	明治～戦後期
SK-18	欠番								
SK-19	1面	N－20°－E	107 × 88	8	不整円形	浅皿状	瀬磁陶銀湯呑茶碗、器台、猪口	褐灰色腐土、焼土・炭多量。器台（縁付鉢）はSK 12と同一か。	明治37年か
SK-20	2面	N－8°－W	(147) × <95>	30	不整長方形	桶状	伊青土瓶、肥磁放座華、瀬陶小碗	焼土・炭化物中量。SK 34・62を切る。	19世紀中期
SK-21	2面	N－88°－E	(244) × (212)	19	隅丸方形	浅皿状	瀬陶紙捺形火鉢、松岡土瓶、益子急須付土瓶、京鍋徳利	SS 02より若く、SK 35より新しい。植材2～3個体程度出土。瀬戸火鉢同一個体はSK 09・12・SJ 02・近代基礎5間方から出土。	19世紀前～中葉
SK-22	1面	—	残存径 203	16		浅皿状	瀬クロム有磁碗、電水通管3、鉄箱鋲3	断面図のみ。SJ 04と一連の遺構。SK 24・25に切られる。	明治24年以降
SK-23	欠番								
SK-24	1面	N－88°－E	124 × 92	44	楕円形	逆台形	銅ピン掛鍋、片手鍋	漆喰・焼土・炭化物中量。SJ 04を切る。	明治24年以降
SK-25	2面	N－2°－W	142 × 140	31	不整形	逆台形	肥磁産業文様尻鉢 京土瓶、耳掻き容	漆喰・焼土・炭化物中量。SJ 04を切る。	19世紀前～中葉

表4　遺構一覧表　土坑 ②　単位：cm（頭：頭戸・美濃、肥：肥前、波：波佐見、唐：唐津、京：京焼系、絵：絵岡焼、伊：伊賀、丹：丹波）

遺構名	面	主軸方位	長軸×短軸	深さ	平面形	所面形	特徴的な遺物	概要・覆土・所見	時期
SK-26	2面	N－10°－E	66 × 57	16	楕円形	逆台形	瀬戸・コバルト釉小碗	SK22に切られる。検見断面「今」。	明治期
SK-27a	1面	N－15°－W	134 × 117	42	不整方形	逆台形	粘板岩木、亜不香炉 瀬戸・清予碗	放本束ねた八香線を地中に50cm ほど突き刺している。横側に粘板は斉藤が巻き付けられている。	昭和22年ヵ
SK-27b	1面	N－25°－W	(174) × 100	50	長楕円形	逆台形	瀬戸・絵入り鳥巻茶碗 ガラス小壺、近世陶器 磁器、銅巻電線	SK60・97・110 などを破壊。SK04・05・08 より古い。	昭和22年ヵ
SK-27c	1面	N－70°－E	45 × 31	16	台形ヵ	箱形ヵ	瀬物ヵ多数	多種雑瀬物骨集積廃棄土坑。形状不明。	昭和22年ヵ
SK-28	4面	N－82°－E	(246) × 230	12	不整長方形	浅皿状	瀬陶器、鉄石 瀬陶器（ひょうご）明皿ヵ	流土・炭化物多巻含ヵ黒褐色覆土。炭化材多数。火災後の廃棄土坑。寛永通貨1点出土。	18世紀前葉 (1724年ヵ)
SK-29	4面	N－90°	56 × 39	34	略円形状	逆台形	土鈴片	覆土に流土・炭化物中盛。SK28・SX01 を切る。	(1724) ～ As-A
SK-30		欠番							
SK-31		欠番							
SK-32	2面	N－84°－E	(102) × (62)	19	楕円形	浅皿状	京黄釉丸碗 堺明石系擂鉢	SK33・36 を切る。白銀町。 寛永通貨四文銭1点出土。	As-A 以降（19世紀初期以降ヵ）
SK-33	2面	N－83°－E	(101) × (65)	16	楕円形	浅皿状		SK11・32 に切られる。白銀町。	As-A 以降
SK-34	2面	N－83°－E	98 × 44	11	楕円形		瀬陶妖柿小碗、角釘	SJ07 を切る。	As-A 以降
SK-35	2面	N－87°－E	(471) × 86	28	長楕円形（溝状）	逆台形	瀬陶、下駄、雲丹、肥前磁反碗、瀬陶 都城瓶・陶茶碗、 伝岡士家、煙草	西側と東側に分かれるが、一体的な状況と判断する。鐘の多数の板材や下駄・徒鉢材・漆塗・曲物とともに陶磁器類が廃棄される。肥陶側も目折鉢持は SK21・70・69・SJ02 と接合。	19世紀前葉～中期
SK-36	2面	N－20°－W	113 × 99	47	楕円形	逆台形	肥磁厚手碗・筒形碗、京せんじ鍋	植抜取坑。粘質土で埋戻し後、植材を抜葉した。A混土で閉塞。底面掘跡。SK107を切る。白銀町。	As-A 以降～19世紀初頭
掘ヵ	2面	N－13°－W	115 × 115		円形	逆台形		SK36・37・38、SK94・95・107 は並列・重複。	
SK-37	2面	N－40°－W	97 × 93	55	円形	逆台形	鉄土口土瓶蓋 肥磁翁文半球碗	植抜取坑。A混土（As－A 多量）で埋め戻す。タガ状ヶ。SK94 を切る。白銀町。	19世紀初頭～中葉
掘ヵ方	2面	N－37°－W	129 × 112		楕円形	逆台形			
SK-38	2面	N－45°－W	90 × 87	55	円形	逆台形	肥磁矢羽文半筒碗 肥磁梅形平筒碗 瀬陶柳茶碗、羽口	植抜取坑。SK95 を切る。補修混土、木材を多数含むシルト質土で埋戻し。貴銀製柱金具出土。白銀町。	As-A 以降～19世紀前葉
掘ヵ方	2面	N－43°－W	127 × 114	8	楕円形	逆台形			
SK-39	2面	N－62°－E	116 × 76	8	楕円形	逆台形	鉄物上白、軒丸瓦	白は土坑確認面上。礎石への転用ヵ。白銀町。	As-A 以降
SK-40	4面	N－83°－E	121 × (36)	38	不整楕円形	逆台形	肥青磁蛇の目凹高台碗	As-A を含まない粘質覆土。白銀町。	1740 年代～As-A 降灰前
SK-41	4面	N－2°－E	(57) × 57	14	楕円形	浅皿状		As-A を含まない粘質覆土。SD24 を切る。白銀町。	As-A 降灰前
SK-42	2面	N－17°－W	54 × 50	20	隅丸方形	逆台形	肥磁灰重碗	暗褐灰色覆土。礎抜取坑。木材少量。	19世紀前～中葉
SK-43	2面	N－6°－E	73 × 54	8	楕円形	箱形	瀬陶木瓜壁押重	植抜取ちしくは柱穴。底面に押圧ヵ。	19世紀前～中葉
SK-44	2面	N－3°－W	130 × 114	18	楕円形	逆台形	肥磁竹笹文端反碗・広東碗、瀬戸	植抜取坑。肥磁蓋先形状 SD10 下層と接合し完形。下駄・建具材（桝穴あり）、貴具柄ヵ出土。	19世紀前半
SK-45		欠番							
SK-46	2面	N－15°－E	(80) × (66)	27	不整楕円形	逆台形	瀬陶ベニかん徳利	植抜取坑と推測。SK06 に切られる。	19世紀中葉
SK-47	1面	N－41°－W	(34) × 29	6	楕円形	逆台形		雨壁。流土中量。	近代
SK-48	2面	N－84°－E	(163) × (77)	10	楕円形	浅皿状	肥磁胡蝶草瓶	暗灰褐色覆土。SK119 を切る。白銀町。	As-A 以降
SK-49	2面	N－84°－E	(126) × (32)	14	楕円形	浅皿状		暗灰褐色覆土。SK105 を切る。白銀町。	As-A 以降
SK-50	2面	N－75°－E	168 × (110)	20	楕円形	浅皿状	肥磁笹文草手小碗	暗灰褐色覆土。SK105 を切る。肥磁人物蓋松文碗（17世紀後半頃）は SK51 と接合。	19世紀前～中葉
SK-51	2面	N－84°－E	136 × 46	37	不整楕円形	逆台形	肥磁雨降文仏飯器 京灯明皿（見込次郎）、ミニバ角形壺	暗褐色覆土。SK50・58・105・120 を切る。白銀町。SK21 の瓶掛火鉢同一個体片出土。	As-A 以降
SK-52	2面	N－25°－E	(41) × 68	11	不整長方形	浅皿状	堺明石系擂鉢	SK 50 に切られる。	As-A 以降
SK-53	—	欠番							
SK-54	2面	N－26°－W	86 × (70)	14	不整隅丸長方形	逆台形	瀬陶焙子碗、肥磁梅鶯蒲原平文碗	覆土の一部に多量の腐植物含ヵ。SK62 を切る。白銀町。	As-A 以降～19世紀前半
SK-55	2面	N－80°－E	(143) × (120)	28	方形ヵ		波佐唐草文小碗、羽口、瓦多数	北東底面に平板瓦片・検瓦片集中。SK74・SD03 縁整を切る。	As－A 以降
SK-56	4面	N－6°－W	294 × 170	18	不整隅丸長方形	箱形	瀬陶片口碗、瀬陶三巴鉄絵皿、鉄絵土瓶、肥磁瑞蓋、検瓦片多数、鎮魂1	火災後の廃棄土坑。覆土は焼土を多量に含み、炭化建築材・建具材多数検出。陶器類は少量ながら、煤付着多い。検瓦ルに刻印「八」。底下に SK115 あり。SK114・SJ09 を切る。	18世紀前葉 1724年ヵ
SK-57	2面	N－8°－W	(246) × (89)	27	長楕円形	浅皿状	肥磁陽炎扇、波佐花瓶、伊賀土鈴、検瓦、植瓦、下駄、漆器、煙管吸口	褐灰色～黒褐色覆土。里炭ブロック含む。SK35 南端を切る。瀬陶鉄釉壺付は SK 27・99 と接合。肥磁蛇の目高台鉄英炎に焼師記号「主」。鉄鐘片1、車漆梅黒書「金」、漆碗「三つ巴本瓜紋」	19世紀前葉～中葉
SK-58	2面	N－80°－E	(134) × (64)	17	長楕円形	浅皿状		暗褐色覆土。SK51 に切られる。白銀町。	As-A 以降
SK-59	4面	N－81°－E	99 × 87	29	不整方形	掘状	瀬陶ベニかん徳利、堺明石系擂鉢、智	底面に円礎・亜円礎多数。4面の柱穴・礎石を破壊ヵ。SK97・106 に切られる。堺明石擂鉢は SK79 と接合。	As-A 降灰前（欠損明ヵ）
SK-60a	2面	N－73°－W	(155) × (123)	27	不整楕円形	逆台形	棟瓦、石製七輪、炉壁、肥磁半筒碗、京小形碗、鉢鉢、蓋り鍋碗、銅製五間瓦飾り金具	北側 上層は焼土・炭多量。中層は細粒シルト、下層は粘質シルト。底面に細粒シルト。	19世紀末頃
SK-60b	2面	N－88°－W	(120) × (43)	6	長楕円形	U字状		南側 瓦土と輪土上面出土。小形碗は SK81 と接合し完形。徒土は 1798（寛政10）年の函館城下最大の火災と推測。	

表5　遺構一覧表　土坑（3）　単位：cm（瀬：瀬戸・美濃、肥：肥前、波：波佐見、唐：唐津、京：京焼系、他：松潤焼、伊：伊賀、丹：丹波）

遺構名	面	主軸方位	長軸×短軸	深さ	平面形	断面形	特徴的な遺物	概要・覆土・所見	時期
SK-61	2面	N－70°－W	‹65› × 57	12	楕円形	浅皿状	瀬陶相列皿	暗灰黒色覆土。SK50に切られる。	19 世紀前～中葉
SK-62	2面	N－3°－E	‹188› × (132)	22	不整（隅丸長方）形	逆台形	碗、徳利、石製品、緑軟、瀬陶中水注	覆土の一部に細砂・シルト・炭混植物・Aa-A 多量。SK20・51 に切られる。長文瀬焼。白磁碗。	Aa-A 以降～19 世紀前半
SK-63	2面	N－80°－E	65 × ‹15›	14	楕円形	浅皿状		覆土下層は Aa-A 多量のシルト質、上層は多量の炭土と黒色土・灰で埋め戻され、周辺にも広がる。1798（寛政 10）年の大火と推測。	18 世紀末頃
SK-64	3面	N－82°－E	120 × 84	26	隅丸長方形	箱形	板瓦	Aa-A 純粘の廃棄土坑。SK66 をわずかに切る。板瓦は SD13・SK79 と接合。	1783 年 Aa-A 降灰直後
SK-65	2面	N－16°－E	‹94› × ‹70›	(33)	不整長方形	浅皿状	肥磁焙烙香炉鍋、青土瓶、煙管吸口、かわらけ、ミニ土鍋	暗褐灰色覆土。SK57・SK87 に切られる。軒桟丸瓦に刻印「一」。	19 世紀前葉～中葉
SK-66	4面	N－85°－E	227 × 33	53	溝状長方形	箱形	肥磁紅漆口・二重銅目文鍋、家紋瓦当、軒桟瓦、羽口、硯（湖苔み）	下層は砂質砂覆土。上層は焼土・漆喰片・灰・黒色土ブロックを含む覆土で一括埋戻し。底面一下層に円礫 13 点。底面は階段状。軒桟瓦に刻印「八」（SK56 と同一）。SK88 より古い。	18 世紀前半（1724 年か）
SK-67	4面	N－4°－W	149 × 84	50	楕円形	逆台形	肥磁梅印鍋蓋・雪輪傳鍋文鍋、焼塩壺、瓦板用ミニ瓶	シルト質暗褐灰色覆土。SK87 と重複。堺明石浜揚砂（見込み摺り目 ※）が SK81 と接合。	18 世紀前半 Aa-A 降灰前
SK-68	4面	N－83°－E	129 × 118	20	不整隅丸方形	逆台形	京セルビ鍋、瀬陶沓形水注、茶具土瓶	火災後の廃棄土坑。覆土は焼土多量。炭化した建築材・板材・植材多数。	18 世紀前～中葉（1724 年か）
SK-69a	4面	N－35°－E	70 × (60)	21	隅丸長方形	擂状	肥磁鍋毛目鉢、瓦、川釣蛇目錘、鬼瓦、人頭大円礫2、蔵石	暗褐灰色覆土。SK70 に切られ、SK116 を切る。鬼瓦は SD 10 下層出土破片と接合（SD 10 に掲載）。肥磁毛目鉢は SK21・35・SJ02 と接合。	18 世紀前半（Aa-A 降灰前）
SK-69b	2面	N－35°－E	(140) × 60	21	長楕円形	逆台形	肥磁錆薬草小瓶	暗褐灰色覆土。SK69a を切る。	Aa-A 以降
SK-70	2面	N－49°－E	81 × 73	16	楕円形	U字状	瀬陶鉄釉土瓶、丹波中甕、永興陶彩	暗褐灰色覆土。SK69 を切る。	19 世紀前半
SK-71	2面	N－14°－E	(94) × 76	15	不整形	浅皿状		黒褐色覆土。SK56・79・80 を切る。	Aa-A 以降
SK-72	2面	N－83°－W	70 × 54	16	不整楕円形	浅皿状		暗褐色覆土。SK79 を切る。	Aa-A 以降
SK-73	2面	N－45°－W	60 × 38	10	不整楕円形	浅皿状	肥磁三角高台碗	黒褐色覆土。SK79 を切る。	Aa-A 以降
SK-74	3面	N－83°－W	‹84› × ‹30›	20	不明	不明	肥磁見込五弁花紋 伐瓦	SK55・SD 08・柱乱に切られ、底面のみ残存。Aa-A の法江純粘で確認。後瓦に刻印「八」あ。	Aa-A 降灰直後か
SK-75	2面	N－90°	‹141› × ‹64›	12	不整形	浅皿状		SD08 に切られる。	Aa-A 以降
SK-76	欠番								
SK-77	4面	N－8°－W	‹126› × 221	51	不整形	浅皿状	盃不陶盃	火災後の廃棄土坑。復礼で大半消滅。覆土は黒色炭主体、焼土多量。盃は被熱で融解傷。	Aa-A 以前（1724 年か）
SK-78	4面	N－72°－E	‹123› × ‹56›	29	隅丸長方形	U字状	肥陶動染付	上面に SD13 撹乱から広がる円礫群。	Aa-A 以前
SK-79	3面	N－8°－E	116 × 116	25	隅丸正方形	擂状	波磁蛇の目鉢瀬陶 肥磁広鉢瓦、瀬陶水瓜皿、唐津箱庭道具、瓦当、伊賀	遺物を伴う Aa-A 廃棄土坑。覆土はほぼ Aa-A の。板瓦の瓶状瓦当は、SD13 撹乱・SK64（A 廃棄土坑）と接合。箱庭道具は SK69・83・SE01・SJ02 に同一個体。明石揚砂 SK59 と接合。	Aa-A 降灰直後（1783 年か）
SK-80	2面	N－88°－E	214 × (91)	11	不整隅丸長方形	逆台形	波磁見込五弁花紋 京石門受皿、板瓦、下駄、建築材	暗褐灰色覆土。建築材（柱）には炭化材も含まれる。下駄は泥撹いも。SK50・80・81 に並列。SK71 に切られる。	Aa-A 以降～19 世紀初頭
SK-81	2面	N－81°－W	103 × 72	17	楕円形	逆台形	波磁雪輪鍋・半球鍋・青磁広花瓶、瀬陶茶筒、京焼吹、焼塩壺鉢、曲物	黒褐色覆土。底面に円礫敷点。建物柱穴を破壊か。小杉陶は SK80 と接合。焼鍋版多数。SK60・80 とは同軸で並列。曲物内に瀬陶用 口 詳。	Aa-A 以降～19 世紀前葉
SK-82	2面	N－4°－E	(222) × (85)	26	長楕円形	U字状	京焼反鍋、松潤土瓶、肥磁鍋蓋前・小広瓶鍋、ミニ人形	暗～黒褐灰色シルト質覆土。SK83 を切る。SE02 に切られる。動物骨出土。	Aa-A 以降 19 世紀初頭中
SK-83	2面	N－5°－W	‹192› × ‹85›	34	長楕円形	U字状	瀬陶鉄釉・擂鉢（9-10 小隅）・灯明皿・中水注除とし壺、瓶不中筒、鳴笛	覆土下層に流土塊多量、炭化物中量。火災後の廃棄土坑。焼材約1個体分（SJ10 ※）が廃棄される。SK15（杭基礎）・82 に切られ、SJ09・SJ10・SK116 を破壊する。1807（文化 4）年もしくは 1812（文化 9）年の大火と推測。	19 世紀初頭中
SK-84	4面	N－82°－E	‹102› × ‹36›	33	（略円形）	擂状	瀬陶片口鉢・二合半徳利、角瓶	覆土上面に Aa-A 純層二次堆積。SK63・ST01 に切られる。廃棄。	18 世紀後葉～Aa-A 降灰前
SK-85	欠番								
SK-86	4面	N－49°－W	62 × 57	63	略円形	袋状	肥磁広東鍋・菊文半筒鍋、瀬陶揚鉢、片手鍋	やや袋状の土坑。ピットの可能性あり。底面に円礫敷点。覆土中植材多数。SJ07 に切られ、SK89 を切る。SJ07 の遺物誤入。	Aa-A 降灰前 1780 年頃か
SK-87	4面	N－3°－W	‹157› × 58	31	不整形	U字状	焙烙	暗褐灰色シルト質覆土。SK87 と重複。	Aa-A 降灰前
SK-88	4面	N－60°－W	‹81› × ‹64›	22	（隅丸方形）	浅皿状	瀬陶灯明受皿（7 小隅）	試掘2トレ。灰黒色・暗褐灰色シルト質覆土。SK66 を切る。	18 世紀中葉 Aa-A 降灰前
SK-89	4面	N－45°－E	‹66› × ‹39›	23	（略円形）	浅皿状		暗褐色覆土。SK86・96 に切られる。	Aa-A 降灰前
SK-90	4面	—	検存径 97	20		浅皿状		試掘2トレ断面図のみ。暗黒灰シルト質 B 混覆土。Aa-B・B下粘質土を切る。	中世か
SK-91	4面	—	検存径 41	27		U字状		試掘2トレ断面図のみ。黒灰シルト質 B 混覆土。覆土上面に小礫多量。	中世～17 世紀か
SK-92	4面	—	検存径 53	34		逆台形		試掘2トレ断面図のみ。黒灰シルト質 B 混覆土。	中世～17 世紀か
SK-93	欠番								
SK-94	2面	N－88°－E	‹127› × (88)	45	不整楕円形	逆台形	肥磁厚手丸鍋、瀬陶片口鉢（※小隅）	抜取坑。SK37 に切られる。SK95・107 と重複。Aa-A 以降～下部に SD20。褐灰方に Aa-A ブロック。白御町。	Aa-A 以降～19 世紀前葉
照明方	2面	N－31°－W	(113) × ‹110›	30	円形	浅皿状	煙管吸口	舗理設坑。	

表6　遺構一覧表　土坑 ④　単位：cm（瀬：瀬戸・美濃、肥：肥前、波：波佐見、唐：唐津、京：京焼系、砂：砂岡焼、伊：伊賀、丹：丹波）

遺構名	面	主軸方位	長軸×短軸	深さ	平面形	断面形	特徴的な遺物	概要・覆土・所見	時期
SK-95	2面	N－48°－E	141 × (80)	41	不整楕円形	逆台形	瀬戸焼手鉢、唐津碗、肥前京焼鳥瓶	徳抜取坑。SK38 に切られる。SK94 と重複。下部に SD20 あり。白銀町。	As-A 以降～19 世紀前葉
SK-96	4面	N－85°－E	140 × (63)	23	長楕円形	U字状	瀬戸焼鉢（6 小期）在地土師、瓦瓦	暗褐灰色覆土。多量の植根材を混入。在地土師質土器は SJ07 端方と接続。貿易通貨1。	18 世紀前葉（As-A 降灰前）
SK-97	2面	N－16°－E	(187) × (100)	15	長楕円形	浅皿状	肥前二重唐草面碗・笹文仏飯具、波然発電瓦片、瀬戸小瓶	褐灰色覆土。拳大円礫多数。SK27 に切られ、SK59・106 を切る。	As-A 以降 19 世紀中葉
SK-98	2面	N－20°－E	127 × (65)	11	長楕円形	浅皿状	波佐見花文碗、瀬戸陶質香炉、京セルロイド製、瓦	覆土は焼土類・炭化物多量。火災後廃棄土坑と推測。柱材（SK100 の隅と合わせて礎石と柱か）。SK67 より新しい。SK100 を切る。	As-A 以降 19 世紀前葉か
SK-99a	2面	N－24°－E	(60) × (30)	5	（楕円形）	浅皿状	瀬戸陶器鉢（10 小期）	暗褐色覆土。SK99b より新しい 明土坑。	19 世紀前葉
SK-99b	2面	N－0°	(60) × (20)	32	（楕円形）	逆台形		明褐色覆土、As-A 多量。	As-A 以降
SK-100	2面	N－11°－E	(103) × (45)	5	不整楕円形	浅皿状	銅製鏡、平瓦	暗褐灰色覆土。円～楕円礫散在集中。礎石か。SK96 に切られる。	As-A 以降 19 世紀前葉
SK-101	2面	N－90°	(135) × 85	30	楕円形	逆台形	肥前京窯鉢、肥前磯毛目碗、瀬戸太白手筒形鉢、巴文瓦当、瓦鍋土器	暗褐色覆土。植材・炭化板材・腐植物のほか複数種の動物骨多数検出。SD10 中層 As-A を切る。広重碗は SK44 と接合。刷毛目皿は SK66・105 と接合。	19 世紀前葉
SK-102	4面	N－57°－E	135 × 81	17	不整隅丸長方形	浅皿状	唐三高台碗、瀬戸片口鉢・燈籠（5 小期）、丹波鉢、瑞龍鉢	黒褐色LB混覆土。ピット群より新しい。東端上面の礎は遺存か。片口鉢（7 小期）は SK118 に同一個体。三島手鉢は 17 世紀後半～18 世紀中葉。	18 世紀中葉頃。（As-A 降灰前）
SK-103	欠番								
SK-104	欠番								
SK-105	3面	N－82°－E	〈311〉× 〈154〉	22	隅丸長方形	逆台形	肥前陽刻文碗	As-A 一次堆積。底面に淡黄色火山灰、白銀町。	1783 年
SK-106	2面	N－15°－E	〈76〉× 〈45〉	32	（楕円形）	U字状	肥前水製文半球碗、波辛花文碗、瀬戸擂鉢（6 小期）・型鉢	灰褐色覆土。SK89 を切るため、古い遺物が混入する。仏師分状木製品・蔵川土。漆塗底裏朱書「佗」（托か）、体部「三つ柏家紋」	19 世紀前～中葉 As-A 以降
SK-107	2面	N－85°－E	(134) × (85)	37	楕円形	逆台形		徳抜取坑。SK36 に切られ、SK94 を切る。白銀町。	As-A 降灰前
廃り方	2面	N－85°－E	(125) × (75)		楕円形	浅皿状		暗褐灰色結質覆土。	As-A 降灰前
SK-108	欠番								
SK-109	4面	N－7°－W	(129) × 66	28	隅丸長方形	U字状		暗褐灰色粘質シルト質土。混入物は土器のみ。	As-A 以前
SK-110	2面	N－2°－W	(72) × (33)	8	隅丸長方形	浅皿状	肥前雲輪文碗（被熱変）、瀬戸灯明皿	灰褐色粘質シルト質土。厨芥物少量。SK111 を破壊する。漆椀底 木米家紋。	As-A 以降 19 世紀前中葉か
SK-111	4面	N－3°－W	〈126〉× 〈123〉	16	楕円形	浅皿状	波佐見輪文碗、肥前二重唐草半球碗・鉄壺、内耳土器	灰褐色粘質覆土。木片・厨類物多量。河川状シミナ堆積。足虫の羽1枚。SD10 徳水時に形成か（1742 年鳥川・鮎川流水「新編高崎市史通史編3 巻末年表」。土坑底部は As-B。SK113 を切る。	18 世紀前半。（As-A 降灰前）
SK-112	4面	N－2°－E	127 × (88)	30	楕円形	箱形	下駄2、丹插鉢	上層褐灰色 A 混覆土は SK35 の一部。下層は暗褐灰色結質覆土。板材・柿材等多数出土。ピット群より新しく、SK68 に切られる。	1724 年以前か（As-A 降灰前）
SK-113	4面	N－35°－W	(82) × (78)	15	楕円形	浅皿状	肥前平坦碗	灰褐色粘質覆土。厨類物少量。SK111 と重複。	18 世紀前半
SK114a	4面	N－81°－E	130 × 107	11	楕円形	逆台形	瀬戸小皿	暗褐色砂質D混土。植根取坑。	As-A 降灰前
SK114b	4面	N－85°－W	(93) × (72)	17	不整形	逆台形	波佐見鉢台付碗	植根取坑。暗褐色砂質D混土。SK115・SJ09・SE01 に切られる。	18 世紀中葉～As-A 降灰前
SK-115	4面	N－7°－W	(227) × (195)	16	隅丸長方形	浅皿状	波佐見花文碗、肥前陶器碗、かわらけ、口縁部横耳焙烙	踏板遺構。拳大～人頭大の円礫・亜角礫を不規則に多数敷設。瓦石・柱穴跡板踏が含まれていり可能性あり。柱穴群よりさい。SK56 の直下。	SD10 開削後～1724 年以前か
SK-116	4面	N－63°－W	(139) × (124)	30	不整楕円形	逆台形		SJ10 の植り方の可能性あり。SJ09 よりさい。	1724 年以前か
SK-117	4面	N－90°	(107) × 36	(15)	長楕円形	U字状		暗灰褐色シルト質覆土。小円礫多量。SK122 と類似。柱穴類り方か。SX02 よりさい。	As-A 降灰前
SK-118	4面	N－9°－W	〈138〉× (100)	12	楕円形	浅皿状	瀬戸灯鉢（7 小期）、摂津石系鉢鉢	暗褐灰色シルト質覆土。明石鉢鉢足込「＊」。SJ07 に切られる。遺物は SK96 よりも新しい。	18 世紀中葉（As-A 降灰前）
SK-119	2面	N－90°	〈154〉× 〈119〉	28	楕円形	浅皿状	肥前砂糖壺砂竹筒文小瓶、瀬戸磁器灰吹（瀬戸灯明受皿（9 小期）京焼鉢焙煎鉢	As-A を多量に含む明褐灰シルト質覆土。SK20・48・49 より古く、SK120 を切る。白銀町。	As-A 以降～19 世紀中葉
SK-120	2面	N－88°－W	〈220〉× 〈173〉	24	楕円形	浅皿状	京せんじ鍋、弾蕃石状土製品	As-A の2次堆積しくは廃棄土坑。SK105 を切る。白銀町。	As-A 以降～18 世紀末か
SK-121	4面	N－73°－E	(54) × 103	42	楕円形	U字状	波佐見磁弘花瓶	黒褐色粘質シルト質覆土。下部に大きな別遺構が存在する可能性あり。白銀町。	As-A 降灰前
SK-122	4面	N－79°－E	(92) × (44)	13	長楕円形	U字状		暗灰褐色シルト質覆土。小円礫多量。SK117 と類似。柱穴類り方か。SX02 よりさい。	As-A 降灰前
SK-123	4面	N－83°－E	660 × 130	17	不整形	浅皿状	肥前筒形碗、波佐見の目抽碗蓋、瀬戸天合尾瓶細利・1 号灰釉徳利、片手鉢	流状。暗褐灰～黒灰色シルト質覆土。最上層に鉄水性明褐灰シルト堆積。1742（寛保2）年鳥川・鮎川流水の可能性あり（「新編高崎市史通史編3巻末年表」）。取鍋転用かわらけ2点出土。片手鉢定値は不明遺構による混入か。白銀町。	18 世紀前期～1742 年か（As-A 降灰前）
SK-124	4面	N－81°－W	〈74〉× 86	18	楕円形	椀状	瀬戸中水注、丹插鉢	暗褐灰色シルト質覆土。白銀町。	18 世紀前半頃か（As-A 降灰前）
SK-125	4面	N－32°－E	〈125〉× 84	53	楕円形	U字状	波佐見磁筒形香炉、肥前陽刻皿	黒褐灰色粘質シルト質覆土。SD20 を切る。白銀町。	18 世紀前半か（As-A 降灰前）
SK-126	4面	N－70°－W	75 × 〈43〉	13	（略円形）	U字状		徳抜取坑。底面に白色粘土検出。SD20 の直上。SK94 に切られる。白銀町。	As-A 降灰前

表7　遺構一覧表　土坑 ⑤　単位：cm（瀬：瀬戸・美濃、肥：肥前、波：波佐見、唐：唐津、京：京焼系、信：信楽焼、伊：伊賀、丹：丹波）

遺構名	面	主軸方位	長軸×短軸	深さ	平面形	断面形	遺物	概要・覆土・所見	時期
SK-127	欠番								
SK-128	欠番（SK94 組り方）								
SK-129	4面	N－5°－E	106 × 54	13	長楕円形	逆台形	肥陶磁染付碗、下駄	褐灰色シルト質覆土。SK123 を切る。白銀町。	As-A 降灰前
SK-130	4面	N－12°－W	⟨81⟩ × 65	18	不整楕円形	逆台形		黒灰色シルト質覆土。木片多数。SK123 より古い。白銀町。	18 世紀前葉以前
SK-131	1面	N－60°－E	⟨120⟩ × ⟨31⟩	44	楕円形	不明		漆喰片・木片・小丹画多量。	近現代

表8　遺構一覧表　不明遺構　単位：cm（瀬：瀬戸・美濃、肥：肥前、波：波佐見、唐：唐津、京：京焼系、信：信楽焼、伊：伊賀、丹：丹波）

遺構名	面	主軸方位	長軸×短軸	深さ	平面形	断面形	遺物	概要・覆土・所見	時期
SX-01	4面	N－4°－W	106 × 103	12	方形状		肥磁器文小碗・梅樹文坪、瀬陶灰釉鉄絵流し小水注	径および長さ 20 ～ 30cm 前後の円礫・亜角礫による方形状焼土。南側に灰・焼土集中。開炉裏の可能性が高い。寛永通貨3点出土。	18 世紀前半
SX-02	4面	N－87°－W	⟨308⟩ × ⟨165⟩	20	方形状	1.5段状	肥陶典器碗、瀬陶ミニ盃、波磁器器台、石製毒抑、寛永通貨1	SX01 から SD10 へ向かって段切り状に削平された面。両位の南縁には、5.5点の扁平円礫で石列を敷設。石列は SX01 と合わせて礎石建物になるか、もしくは SR05・08 の縁石と推測。	18 世紀前半

表9　遺構一覧表　掘立柱建物跡・柱穴列　単位：cm

遺構名	面	主軸方位	梁間×桁行	概要・覆土・所見	時期
SB-01	1面	N－85°－E	70 × ⟨350⟩	レンガ造地軸もしくは塀のコンクリート基礎。	戦後
SB-02	1面	N－86°－E	桁間 180cm。	桁間 180cm。直交する2本の角材で補成	明治・大正期
SB-03	4面	N－4°－W	⟨260⟩ × ⟨220⟩	SD14 の南縁に沿って、東西に右列、一部は礎石と推測。石列南側には多量の小礫が集中した隠蔽遺構。周辺に礎石が残存せず、建物構造は不明。開窟裏か。	As-A 降灰前
SB-04	4面	N－90°	(353) × (953)	東西棟。梁間2間×桁行5間＋南下屋庇。(34.7) ㎡。SD17 より新しく、SD13 より古い。	As-A 降灰前
SB-05	4面	N－88°－W	784 × 342	東西棟。梁間1間×桁行5間。27.9 ㎡。	As-A 降灰前
SB-06	4面	N－90°	281 × 839	東西棟。梁間1間×桁行4間＋西下屋庇。23.2 ㎡、身舎 20.5 ㎡。SP21 から骨蔵像。	As-A 降灰前
SB-07	4面	N－87°－W	388 × 873	東西棟。梁間1間×桁行4間＋東下屋庇。34.8 ㎡、身舎 (31.0) ㎡。	As-A 降灰前
SB-08	4面	N－88°－W	342 × 594	東西棟。梁間1間×桁行3間。20.3 ㎡。	As-A 降灰前
SB-09	4面	N－81°－E	214 × 371	東西棟。梁間2間×桁行2間＋南下屋庇。7.7 ㎡、身舎 (5.0) ㎡。	As-A 降灰前
SB-10	4面	N－18°－W	179 × 201	南北棟。梁間1間×桁行1間。3.5 ㎡。	As-A 降灰前
SB-11	4面	N－14°－W	177 × 195	南北棟。梁間1間×桁行1間。3.5 ㎡。	As-A 降灰前
SB-12	4面	N－88°－E	70 × 270	南北棟か。梁間1間×桁行下屋庇＋身舎。礎石建物。白銀町。	As-A 降灰前
SA-01	4面	N－90°	⟨7.95⟩	東西方向。4間以上か。柱穴列もしくは建物の一部。	As-A 降灰前

表10　遺構一覧表　ピット ①　単位：cm

遺構名	面	主軸方位	長軸×短軸	深さ	平面形	断面形	概要・覆土・遺物・所見	時期
SP-01	1面	—	47 × 44	5	円形		覆土中央に灰・炭化物中量。SL01 と関係する遺構か。	近現代
SP-02	1面	N－40°－W	(47) × (40)	62	楕円形		覆土に礫塊片多量。近代基礎6と重複。瀬磁器典器碗多数。瀬陶碗多数。	明治 38 年以降か
SP-03	1面	N－10°－E	(52) × (43)	37	楕円形		覆土に礫塊片多量。近代基礎6と重複。瀬磁器鉄釉碗、土製土管、火消壺蓋。	明治 38 年以降か
SP-04	1面	—	(28) × (24)	27	円形		覆土に礫塊片多量。近代基礎6と重複。ダニエル缶造長平原・御現棟板。	明治 38 年以降か
SP-05	1面	N－2°－E	(57) × (44)	19	楕円形		覆土に礫塊片多量。近代基礎6と重複。ベニカル徳利。	明治 38 年以降か
SP-06	1面	N－87°－E	(97) × (57)	30	長楕円形		覆土に礫塊片多量。近代基礎6と重複。	明治 38 年以降か
SP-07	欠番							
SP-08	2面	—	⟨25⟩ × 22	10	楕円形			As-A 以降
SP-09	1面	N－90°－	20 × 18	18	隅丸正方形		やや軟弱な暗褐色土。近代基礎6に伴う柱穴。	明治一大正期
SP-10	1面	N－80°－E	31 × 26	23	楕円形		やや軟弱な暗褐色土。近代基礎6に伴う柱穴。	明治一大正期
SP-11	1面	N－80°－E	⟨30⟩ × ⟨19⟩	－	（楕円形）		やや軟弱な暗褐色土。近代基礎6に伴う柱穴。	明治一大正期
SP-12	欠番							
SP-13	4面	—	37 × 32	⟨12⟩	不整円形		褐色シルト質覆土。SD08 に切られる。	As-A 降灰前
SP-14	4面	—	41 × 39	21	不整円形		褐色シルト質覆土。	As-A 降灰前
SP-15	4面	N－90°－	(63) × 50	7	楕円形		褐色シルト質覆土。	As-A 降灰前
SP-16	4面	N－40°－W	48 × 27	⟨13⟩	不整楕円形		褐色シルト質覆土。	As-A 降灰前
SP-17	4面	N－34°－W	49 × 30	37	楕円形		P13 と同一。柱根残存、その脇の底部に礎板陽と根固石。	1724 年以前か
SP-18	4面	—	38 × 38	⟨16⟩	円形		褐灰色粘質土混覆土。底部に礎板陽。根固石多。	1724 年以前か
SP-19	4面	—	23 × 23	⟨19⟩	円形		径 10cm・厚さ8cm の外皮が付いた形丸太を輪切りにした礎板残存。SP17 ～ 19 は SK01 より古い。	1724 年以前か
SP-20	4面	N－80°－E	51 × 39	41	不整楕円形		P95・P96 の上部にあたる。	As-A 降灰前
SP-21	4面	N－83°－W	54 × 35	33	楕円形		P16 と同一。柱穴芯端に柱根残存。蕃薯小像、肥磁温押し紅皿	As-A 降灰前
SP-22	4面	N－82°－E	55 × ⟨34⟩	29	楕円形		褐色シルト質覆土。柱根（φ 9cm）と抜（φ 5cm）残存。SD17 より新しい。	As-A 降灰前
SP-23	4面	N－20°－W	54 × 50	32	不整楕円形		褐灰シルト質覆土。P04 上層を切る。P09 と重複。	As-A 降灰前
SP-24	4面	N－3°－E	45 × ⟨41⟩	29	不整円形		褐灰シルト質覆土。SD17 より新しい。	As-A 降灰前
SP-25	4面	N－65°－W	48 × 37	⟨17⟩	楕円形		P02 と重複	As-A 降灰前
SP-26	4面	N－42°－E	40 × 35	⟨14⟩	楕円形		褐灰シルト質覆土。	As-A 降灰前
SP-27	4面		37 × 35	20	不整円形		褐灰シルト質覆土。	As-A 降灰前
SP-28	1面	N－0°	48 × 25	9	楕円形			近代

表 11　遺構一覧表　ピット ②　単位：cm（瀬：瀬戸・美濃、肥：肥前、波：波佐見、唐：唐津、京：京焼系、松：松岡焼、伊：伊賀、丹：丹波）

遺構名	面	主軸方位	長軸×短軸	深さ	平面形	断面形	概要・覆土・遺物・所見	時期
P-01	4面	N－85°－E	47 × 30	〈20〉	楕円形		褐灰色シルト質覆土。SI03 北接石列の直下。	As-A 降灰前
P-02	4面	—	30 × 27	〈15〉	不整円形		褐灰色シルト質覆土。SP25と重複。無型土製品、須恵カンテラ。	As-A 降灰前
P-03	4面	—	39 × 33	〈11〉	不整楕円形		褐灰色シルト質覆土。	As-A 降灰前
P-04	4面	N－80°－W	45 × 32	〈41〉	楕円形		褐灰色シルト質覆土。SP23と重複	As-A 降灰前
P-05		欠番						
P-06	4面	N－87°－E	53 × 32	〈30〉	楕円形		褐灰色シルト質覆土。底面に扁平円礫の礎板。SD13b 溝護岸礎の直下に位置する。	As-A 降灰前
P-07	4面	—	22 × 20	〈13〉	略円形		褐灰色シルト質覆土。SD13b 溝護岸礎の直下に位置する。	As-A 降灰前
P-08	4面	—	31 × 25	〈18〉	不整楕円形		扁平円礫2枚を重ねて礎板とする。	As-A 降灰前
P-09	4面	—	24 × 22	〈18〉	不整円形		褐灰色シルト質覆土。	As-A 降灰前
P-10	4面	—	30 × 22	〈38〉	楕円形		褐灰色シルト質覆土。	As-A 降灰前
P-11	4面	—	27 × 28	〈22〉	不整円形		褐灰色シルト質覆土。径6cm の柱根残存。	As-A 降灰前
P-12	4面	—	34 × 25	〈40〉	不整楕円形		SP18と重複。覆土上面に扁円礫の礎板。新但2時期あり。	As-A 降灰前
P-13	4面	N－40°－W	43 × 33	〈24〉	楕円形		SP17と同一。底面礎板礫と根固石、その脇に径 13cm の柱根残立。礎板上の柱は抜取。	As-A 降灰前
P-14		欠番						
P-15a	4面	N－56°－W	〈31〉× 28	〈38〉	楕円形		南東側、柱穴部の脇に径7cm の柱根残立して残存。15b を切る。	As-A 降灰前
P-15b	4面	N－25°－W	39 × 34	〈38〉	楕円形		SP21と同一。15a に切られる。褐灰色B混覆土。	As-A 降灰前
P-16	4面	N－36°－W	53 × 42	〈25〉	不整楕円形		底面に礎板角礫、南東側の高い位置に礎板扁平円礫。新但2時期。	As-A 降灰前
P-17	4面	—	28 × 27	46	不整円形		褐灰色シルト質覆土。	As-A 降灰前
P-18	4面	—	29 × 28	〈25〉	不整楕円形		覆土上面で、径 12cm の黒褐色後取痕検出。	As-A 降灰前
P-19a	4面	N－82°－W	82 × 〈36〉	42	楕円形		南側、暗灰褐色粘質覆土。底面～覆土下層に礎板円礫と根固石。	As-A 降灰前
P-19b	4面	N－12°－E	〈61〉× 〈50〉	42	楕円形		北側、19a より古いと推測。	As-A 降灰前
P-20	4面	—	30 × 〈27〉	〈19〉	不整楕円形		褐灰色シルト質覆土。SD13b より古い。	As-A 降灰前
P-21	4面	—	〈46〉× 〈53〉	50	不整円形		P33 を切る。新但2基より、但ピットは紫灰B混覆土で底面に礎板礫3、礎板上に径9cm の柱根残立。新ピットは灰褐色粘質シルト覆土。覆土上面にSS 02 の礎塊中があるため、柱の切断を推測。	As-A 降灰前
P-22	4面	N－39°－W	56 × 50	55	楕円形		柱穴中央の覆土上層～上面に円礫6点集中。意図した礎石か。SK118を切る。	As-A 降灰前
P-23	4面	N－20°－E	36 × 30	14	不整楕円形		褐灰色シルト質覆土。SD13b より古い。	As-A 降灰前
P-24	4面	—	25 × 18	11	楕円形		暗褐灰色覆土。	As-A 降灰前
P-25	4面	—	〈25〉× 23	21	不整円形		暗褐灰色覆土。覆土中位に根固石1。	As-A 降灰前
P-26	4面	—	25 × 20	19	楕円形			As-A 降灰前
P-27	4面	—	29 × 24	84	楕円形			As-A 降灰前
P-28a	4面	N－55°－E	36 × 37	37	円形		南側。	As-A 降灰前
P-28b	4面	N－0°	49 × 46	25	略円形		北側。	As-A 降灰前
P-29	4面	—	〈20〉× 25	10	不整円形		P116 と重複。	As-A 降灰前
P-30	4面	—	23 × 22	12	略円形			As-A 降灰前
P-31	4面	—	30 × 25	25	楕円形			As-A 降灰前
P-32a	4面	—	42 × 40	48	不整形		覆土上面で、径7cm の明瞭な腐植質柱痕を検出。P32b・P32c を切る。	As-A 降灰前
P-32b	4面	—	52 × 43	21	不整形		暗褐灰色覆土。上面に礎石状の角礫。底面に礎板状自然礫2。	As-A 降灰前
P-32c	4面	—	〈46〉× 40	26	不整形		暗褐灰色覆土。上面に礎石状の角礫。	As-A 降灰前
P-33	4面	N－48°－W	〈48〉× 42	28	不整楕円形			As-A 降灰前
P-34	4面	—	51 × 〈35〉	14	不整形		SK86 に切られる。	As-A 降灰前
P-35	4面	—	35 × 31	39	楕円形		底部に亜角礫の礎板。	As-A 降灰前
P-36	4面	—	25 × 21	24	不整楕円形			As-A 降灰前
P-37	4面	—	26 × 24	24	略円形			As-A 降灰前
P-38	4面	—	23 × 19	33	楕円形		SK89 と重複。	As-A 降灰前
P-39	4面	—	〈53〉× 〈31〉	36	不整形		SK86・118・SJ07 に切られる。瀬戸片口鉢。	As-A 降灰前
P-40	4面	N－52°－E	40 × 33	36	不整楕円形			As-A 降灰前
P-41	4面	N－1°－W	41 × 30	35	楕円形		覆土上層に礎板状の扁平円礫。	As-A 降灰前
P-42	4面	N－30°－W	32 × 26	20	楕円形		瀬戸灰釉鉢破片。	As-A 降灰前
P-43	4面	N－65°－E	38 × 27	36	楕円形		覆土上面で、直径 15cm の明瞭な腐植質柱痕を検出。	As-A 降灰前
P-44	4面	N－18°－E	26 × 20	〈7〉	楕円形		径6cm の柱根残立。SK102 に切られる。	1724 年以前か
P-45	4面	N－61°－W	〈30〉× 23	〈19〉	楕円形		SK102 に切られる。搬雪吸口1。	1724 年以前か
P-46	4面	—	28 × 25	〈35〉	不整円形		SK102 に切られる。筒水酒資3点。地鎮行為か。	1724 年以前か
P-47	4面	—	31 × 28	〈32〉	不整長方形		底面に亜円礫の礎板。SK102 に切られる。	1724 年以前か
P-48	4面	—	〈19〉× 〈18〉	21	楕円形			1724 年以前か
P-49	4面	N－15°－E	〈29〉× 31	27	楕円形		SK67・87 より古い。	As-A 降灰前
P-50	4面	N－20°－W	〈41〉× 26	7	楕円形			As-A 降灰前
P-51	4面	N－73°－W	〈28〉× 34	3	楕円形		SK67 より古い。	As-A 降灰前
P-52	4面	N－60°－W	45 × 35	9	楕円形			As-A 降灰前
P-53	4面	—	33 × 31	24	不整隅丸方形			As-A 降灰前
P-54a	4面	N－82°－W	45 × 41	42	楕円形		南側。SK106 より古い。P64 と重複。	As-A 降灰前
P-54b	4面		52 × 〈47〉	9	略円形		北側。SK106 より古い。P64 と重複。	As-A 降灰前
P-55a	4面	N－45°－E	〈35〉× 30	26	楕円形		東側。覆土上面に扁平礫の礎板あるいは環石。SK102 と重複。	As-A 降灰前
P-55b	4面	N－7°－W	〈47〉× 30	26	楕円形		西側。SK102 と重複。	As-A 降灰前
P-56	4面	—	24 × 22	15	楕円形		新但2時期あり。覆土上面に扁平円礫の礎板。SK102 より古い。	As-A 降灰前
P-57	4面	—	28 × 23	11	楕円形		暗灰褐色シルト質覆土。	As-A 降灰前

表 12　遺構一覧表　ピット③　単位：cm（瀬：瀬戸・美濃，肥：肥前，波：波佐見，唐：唐津，京：京焼系，松：松岡焼，伊：伊賀，丹：丹波）

遺構名	面	主軸方位	長軸×短軸	深さ	平面形	断面形	概要・覆土・遺物・所見	時期
P-58	4面	—	30 × 25	56	楕円形		暗褐灰色シルト質覆土。	Aa-A 降灰前
P-59	4面	—	28 × 23	23	楕円形		覆土上面で径 10cm の割竹状黒色柱痕を検出。	Aa-A 降灰前
P-60	4面	—	30 × 27	23	不整隅丸方形		SK58 より古い。SK102 と重複。	Aa-A 降灰前
P-61	4面	—	13 × 12	15	不整円形		覆土上面で径 6cm の磨滅柱痕を検出。	Aa-A 降灰前
P-62	4面	N－70°－E	47 × 34	21	楕円形		SK58 より古い。	Aa-A 降灰前
P-63	4面	N－39°－W	44 × 32	<23>	楕円形		SK59 に破壊される。柱芯部に礎板と思われる扁平円礫。	Aa-A 降灰前
P-64a	4面	—	33 × 33	16	円形		中心に径4cm の杭（柱か）、周囲に根固石4。P54 に切られる。	Aa-A 降灰前
P-64b	4面	N－59°－E	<38> × 58	13	楕円形		P54 に切られる。	Aa-A 降灰前
P-65	4面	—	<47> × <38>	36	楕円形		円礫・亜円礫の根固石、大小8。SK115 と重複。	Aa-A 降灰前
P-66	4面	N－20°－W	72 × 69	31	不整長方形		覆土上面に亜円礫・亜角礫点在、礎石か。SK102 と重複。埋管補修 1。	Aa-A 降灰前
P-67	4面	—	35 × 30	27	楕円形		底面付近に扁平円礫の礎根。SK111 より古い。P71 と重複。	Aa-A 降灰前
P-68	4面	—	33 × 30	27	不整円形		根固石4。SK59 に切られる。	Aa-A 降灰前
P-69	4面	N－38°－W	(37) × (25)	(50)	楕円形		底面中央に礎板根。	Aa-A 降灰前
P-70a	4面	N－76°－W	(32) × 26	(48)	楕円形		P70b より古い。SJ09 より古い。	Aa-A 降灰前
P-70b	4面	—	(37) × 37	(36)	円形		底面に扁平円礫点在を置いた礎板。P70a より新しい。SJ09 より古い。	Aa-A 降灰前
P-71	4面	—	<37> × 38	32	楕円形		底面に扁平亜円礫の礎板、礎板の断北端に、径6cm の柱痕各1本根立。板基礎の可能性もある。SK111 より古い。	Aa-A 降灰前
P-72	4面	—	27 × 25	23	不整円形		SJ10・SK116 より古い。	Aa-A 降灰前
P-73	4面	N－66°－E	55 × 40	(26)	楕円形		底面に礎板残と根固石4。SK60 に切られる。	Aa-A 降灰前
P-74	4面	N－25°－E	33 × 26	(46)	楕円形		径6cm の柱痕樹立して残存。SK60 に切られる。	Aa-A 降灰前
P-75	4面	—	38 × 33	25	不整方形		SK56・115 より古い。	Aa-A 降灰前
P-76	4面	N－81°－W	33 × 21	(22)	楕円形		SK56・115 より古い。	Aa-A 降灰前
P-77	4面	N－55°－E	27 × 20	(23)	楕円形		SK56・115 より古い。	Aa-A 降灰前
P-78	4面	—	22 × 17	(21)	楕円形		SK56・115 より古い。	Aa-A 降灰前
P-79	4面	—	29 × (23)	21	不整円形		中央に径5cm の柱根樹立して残存。周囲に円礫・亜円礫の根固石3。SK115 に切られる。P65 と重複。	Aa-A 降灰前
P-80	4面	—	33 × 29	<11>	楕円形		SK56・115 より古い。	Aa-A 降灰前
P-81	4面	—	23 × <22>	<11>	不整円形		SK56・115 より古い。	Aa-A 降灰前
P-82	4面	—	19 × <14>	<11>	不整楕円形		SK56・115 より古い。	Aa-A 降灰前
P-83	4面	—	21 × 20	<8>	楕円形		SK56・115 より古い。	Aa-A 降灰前
P-84	4面	—	42 × 38	22	不整楕円形		SK56・115 より古い。	Aa-A 降灰前
P-85	4面	—	32 × 32	25	不整円形		SK01 より古い。	Aa-A 降灰前
P-86	4面	—	23 × 18	8	楕円形			Aa-A 降灰前
P-87	4面	—	23 × 21	8	不整円形		SK28 より古い。	Aa-A 降灰前
P-88	4面	N－82°－W	54 × 46	24	不整楕円形		SX02 より古い。	Aa-A 降灰前
P-89	4面	—	<46> × 43	18	不整楕円形		ピット上へ覆土上層にかかって根固石2、礎板亜円礫1。P90 より新しいと推測。SK28・SX02 より古い。根固石は SX02 完掘時に注来検出。	Aa-A 降灰前
P-90	4面	N－20°－W	50 × <30>	18	不整楕円形		ピット上に根固石の亜円礫4。P89 より古いと推測。SK28・SX02 より古い。	Aa-A 降灰前
P-91	4面	—	22 × <20>	27	不整円形		SK28 より古い。SX02 と重複。	Aa-A 降灰前
P-92	4面	—	35 × 33	13	不整円形		SK28 より古い。SX02 と重複。不明銅製品1。	Aa-A 降灰前
P-93	4面	—	24 × 23	14	不整円形		SK122 の底面で検出。	Aa-A 降灰前
P-94	4面	—	18 × 16	<29>	楕円形			Aa-A 降灰前
P-95	4面	—	<16> × 23	7	楕円形		SP20 と同一。P 96 より古いと推測。SK01 に切られる。	Aa-A 降灰前
P-96	4面	—	29 × <23>	22	不整円形		SP20 と同一。根固石1。覆土上層に階板状扁平礫。新旧2時期。	Aa-A 降灰前
P-97	4面	—	36 × 30	33	不整楕円形		SK01 に切られる。	Aa-A 降灰前
P-98	4面	—	28 × <24>	20	不整円形		SD23 より新しい。SK01 に切られる。P 99 と重複。	Aa-A 降灰前
P-99	4面	N－34°－E	25 × <13>	<6>	楕円形		SD23 より新しい。	Aa-A 降灰前
P-100	4面	—	23 × 22	<8>	不整円形		SD23 より新しい。	Aa-A 降灰前
P-101	4面	N－25°－W	24 × 19	<9>	楕円形		SD23 より新しい。	Aa-A 降灰前
P-102	4面	N－79°－W	31 × 27	<16>	不整楕円形		底面に礎板状亜角礫。SD23 を切る。SK28 より新しい。	Aa-A 降灰前
P-103	4面	—	24 × 23	<20>	円形		SD23 より新しい。SK28 より古い。SX02 と重複。	Aa-A 降灰前
P-104	4面	—	10 × 10	<6>	円形		SD23 より新しい。	Aa-A 降灰前
P-105	4面	N－22°－W	40 × 24	10	楕円形		SK129 に切られる。白銀町。	Aa-A 降灰前
P-106	4面	N－50°－E	50 × 41	29	円形		白銀町。	Aa-A 降灰前
P-107	4面	N－10°－W	35 × 23	21	楕円形		白銀町。	Aa-A 降灰前
P-108	4面	N－77°－E	30 × 27	36	円形		SK123と重複。白銀町。	Aa-A 降灰前
P-109	4面	N－0°	20 × 20	28	円形		SK123と重複。白銀町。	Aa-A 降灰前
P-110	4面	N－0°	44 × 21	25	長楕円形		SK123と重複。白銀町。	Aa-A 降灰前
P-111	4面	N－9°－E	29 × 25	27	不整楕円形		SK123と重複。白銀町。	Aa-A 降灰前
P-112	4面	N－30°－E	25 × 24	29	円形		SK123と重複。白銀町。	Aa-A 降灰前
P-113	4面	N－27°－E	37 × 30	22	不整楕円形		SK123と重複。白銀町。	Aa-A 降灰前
P-114	4面	N－4°－E	66 × 42	16	不整楕円形		SK123と重複。白銀町。	Aa-A 降灰前
P-115	4面	N－84°－E	35 × 26	18	不整楕円形		SK123と重複。白銀町。	Aa-A 降灰前
P-116	4面	—	39 × <29>	29	楕円形		底面に小円礫の礎板。礎板脇に立石状の根固石。P29・SD17と重複。	Aa-A 降灰前
P-117	4面	N－90°	80 × 50	18	楕円形		SK78と重複。	Aa-A 降灰前

表 13　遺構一覧表　溝　単位：cm（頭：瀬戸・美濃、肥：肥前、波：波佐見、産：産地、唐：唐津、京：京焼系、陸：松浦焼、伊：伊賀、丹：丹波）

遺構名	面	走向方向	上端幅×下端幅×深さ	所面形	遺物	概要・覆土・所見	時期
SD-01	1面	N－10°－W 南北方向	49 × 32 × 23	U字状	溝縁型押縁制豆・コバルト顔、薄手、在地粗製土管（径 12cm）、三孔耳付鍋、ガラス瓶	上層礫土・雑砂多量、下層雑砂少量。衛試、明治13（1880）年の火災跡〜蔵後に埋没。	明治期前半 （明治 13 年か）
SD-02	2面	N－10°－W 南北方向	62 × 46 × 30	逆凸形	瀬戸コバルト染付鍋	SD04の焼土層を切る。覆土中に人頭大円礫6点。西壁に護岸用の礫。排水の痕跡か。溝状窪の東端非沿。	明治期（明治 13 年以降か）
SD-03a	1面	N－87°－E 東西方向	57 × 40 〜 50 × 20 以上	U字状	瀬縁型紙湯巻・型紙碗、肥磁型押紙銘ロ、京陸陶器彩絵（底裏型巻型巻「浄水井」）、瀬戸・美濃、土製人形、羽口、二孔耳付鍋（遺構外 21 参照）	SD00 上層〜。現段階程にある SD10 の最終状態に近い。近代基礎5本情築に壊し。SD12・19 を埋没し、北隣に SD03 を掘削したものと推定。覆土は砂礫と微粘シルトの互層。護岸用の細い丸太杭多数。	明治 24 年（郵便局落成）以降と推測
SD-03b	1面	N－87°－E 東西方向	—	箱形	瀬縁型骨董、土製人形、羽口、二孔耳付鍋（遺構外 21 参照）	組合せ式箱形木樋管。底板と側板の一部が残存。長さ 3.5 〜 4 m・厚さ 1cm の板を側ぎ推ぎ。底板直上に細砂埋積。樋管内には細砂・粗礫。底板直下に鉄製鉄鍋仕様 33、管外径 27・内径 24、内面付ナデ調整）設置。	明治 36 年以降か
SD-04	2面	N－8°－W 南北方向	<35> × <19> × (4)	逆台形	瀬縁コバルト印、ダニエル電池長平瓶	覆土下層は細砂含む暗褐色土、上層は礫土多量。廃棄埋没は SK11 と同時。瀬縁坪底面「与平造」	幕末頃〜明治 13 年か
SD-05	1面	N－6°－W	<96> × <77> × 68	逆台形	コンクリート片		現代
SD-06a	1面	N－88°－W 東西方向	39 × 25 × 9	浅皿状	瀬縁コバルト印・竹文瀬縁印、十字文形大孔耳付鍋、鉄製小鍋、鉄製鉄赤元片、ワインボトル、青色ガラス瓶	SD03 と同一。しまり強い黒褐色層土。近代基礎6と同一時期に埋没か。	明治 24 年（郵便局落成）以降と推測
SD-06b	1面	N－88°－W 東西方向	—	浅皿状		組合せ式箱形木樋管を埋設した溝。西壁では、樋管側板が薄い焼土層に切られる。その上部に、決水層（明治 43 年・昭和 10 年・昭和 22 年のいずれか）で埋没した溝。	明治 37 年以降と推測。
SD-07	1面	N－13°－W 南北方向	43 × － × －		炭不揃鉢、銭瓦、肥磁笹文小碗	南壁、焼灰色粘化層土。調辺に細土細砂あり。溝は基本層序の焼土切と切り合い。検瓦刻印「八」。	近代
SD-08	2面	N－87°－E 東西方向	71 × 37 × 33	U字状	瀬陶太白小丸碗・片口鉢（9小鉢）	調査区南東隅。SK74・75 を切る。覆土上面に焼土含む黒灰色土層（1807 年か 1812 年の大火と推測）。	19 世紀初頭頃
SD-09	1面	N－10°－W 南北方向	46 × 33 × 9	浅皿状	万古系ミニ土瓶蓋、瀬縁コバルト染付鍋	暗褐色層土。上面に礫雑砂板が残存。調査区北壁に侵色粗製土管破片。近代基礎7の東に接して南端、SD06 と接続。岸家・岩井家境界の排水溝。	明治・大正期
SD-10	4面	N－2°－E 南北方向	<330> × 50 〜 100 × 114	逆台形 薬研状	陶磁器・土器類多量、絵付鉢資料（瀬陶製水入れ）、鬼瓦、鬼瓦、瓦軸端、寛永通寶（足字銭）銘銭、場所銘赤津、瀬・木製品・建築材多数、杭多数	近世町2目町、近家町2目町および大信寺門前と台町町を区画する大溝および用水路。東南、及下層から近寛帯芯（元禄！国甲）銘寛永入出し。宮政9年（1797）、「田町近世町覚」の覚（水出用水路）として『高崎町事行日記』に記載あり。As-A 陪灰時には大半が破に埋没、杭多数。As-A 以後は溝周囲が高上げされることで幅狭の SD10 を継持。	17 世紀後葉〜 本業関開、幕末頃は SD12・19 へと移り。
SD-11	4面	N－4°－W 南北方向	(64) × 46 × 30	U字状	肥磁二重網目平底鉢・筒状丸碗、肥陶刺皮屑毛筋刷、唐三島手鉢、瀬陶鉄絵鉢	暗褐灰色シルト質覆土、底面付近は腐植質土。底面の一部に遺物集中。SD04・05 に切られる。SD10 と接続していた可能性高い。衛試。白銀町。	18 世紀前半頃 （As-A 陪灰衛）
SD-12	1-2面	N－86°－E 東西方向		U字〜V字状	陶磁器・土器・瓦・板材・板材多数	近代基礎5の直下。多数の陶磁器類などが廃棄され。埋め戻される。暗灰〜黒褐色シルト質覆土、鉄分沈着。	19 世紀後葉 幕末〜明治
SD-13a	4面	N－8°－W 南北方向	132 × 60 × 30 60 × (50) × (20)	箱形〜 逆台形	(SD13a) 板瓦、肥磁鉢蓋、有孔玉	SD10 と接続の可能性あり。崇敬町調査、鍛冶屋町の溝〜蛇橋。ピット群とも新しい。SD03 より新しい可能性が高い。板瓦は SK64・79（3面・As-A 直後）と接合。	As-A 陪灰前に埋設
SD-13b	4面	N－86°－E 東西方向	70 〜 48 × 54 〜 36 × 11	箱形〜 逆台形	(SD13a・b) 京せんじ鍋、丹波鉢、磁笹持ち人形、土製人形	SD13a と重復。暗灰色シルト質覆土。薄溝扁が残存し、陸を境物に伴う溝の可能性あり。もしくは SK05・06 に伴う溝か。	As-A 陪灰前に埋設
SD-14	4面	N－86°－E	87 × 77 × 23	箱形	縁取点	暗褐灰色シルト質覆土。SD13b と接続か。	As-A 陪灰前
SD-15	2面	N－2°－E	21 × 13 × 10	U字状	瀬焼色電子。SK21・35・83 より古い。	暗褐色層土。SK21・35・83 より古い。	As-A 以降〜 19 世紀初頭
SD-16	8面	N－55°－E 北東－南西	<54> × 24 × <15> 西壁断面で深さ 46	逆台形	暗褐灰色砧質覆土。鉄小白色砥石（As-C か）鉄鉱。	明褐灰色シルトに刻り込む。水田に伴う用水路の可能性。	古墳時代 （前期か）
SD-17	4面	N－12°－W 南南東	94 × 70 × 54	逆台形	暗褐灰色B混覆土。	北端は撹乱で消滅。SD10 と接続か。走行方向は中山道およびSB9 〜 11 の隅櫓と平行。SD03 に破壊される。	As-A 陪灰前
SD-18	5面	N－86°－E 東西方向	<50> × <32> × 25	逆台形	SN01 の東面唯呼の溝側で並走する。	SN01 より新しい。衛壁。細砂混シルト質覆土。一部白色粘土含む。SN01 畦呼を精測した水田用水路。	As-B 以降 12 世紀代か
SD-19	—	N－90° 東西方向	57 × 23 × 40 〜 50	箱形〜 逆台形	陶磁器・土器類・瓦等多数	近代基礎5の直下。多数の陶磁器類などが廃棄され、埋め戻される。暗灰〜黒褐色シルト質覆土、鉄分沈着。	19 世紀中後葉 （幕末〜明治）
SD-20	4面	N－83°－E 東西方向	長軸 614 × 短軸 224 × 92 以上	不明	肥磁系、瀬陶系風呂（底裏銘）、現用刷毛痕、京焼沢、火箸	SD24 直下の不明遺構。覆土下層に芯状原植物や微細質を多量含む。流土したが不詳。京風風呂底銘は「木下陶」。接痕「丸に二つ引家紋」。	18 世紀初頭 頃か
SD-21	3面	N－5°－W 南北方向	42 × 26 × 22（北壁での最大値 50）	逆台形	肥磁広底鉢・半球鉢	SD24 を埋め戻した頃（1 点は礎石か）を家蔵岸とする。段切り溝で、西の方が低い。覆土下部は As-A のほぼ両端2次埋積、上部は陪灰シルト層。As-A 陪灰直後に埋設と推測。SD10 へ流下。白銀町。	1783 年以降〜 18 世紀末葉頃
SD-22	4面	N－2°－E 南北方向	73 × 48 × 41	逆台形	肥陶鳥器鉢、瀬陶唯呼鉢、五輪塔火輪石 5	As-A 陪灰直前に埋設し、大量の礎を投棄薬。SD10 と接続。SD13a と同一溝の可能性あり。火災後廃棄土坑より新しい溝と推測。	
SD-23	5面	N－10°－W	<162> × 96 × 30 〜 50	逆台形	調査区東隅に位置。	B混砂質土・シルト質覆土。水田用水路の可能性。	中世と推測
SD-24a SD-24b	4面	N－5°－W	(67) × 32 × 13	逆台形	肥前京焼銘鉢	SJ11 に切られる。22a は蔵掘り溝。西壁に護岸板多数。22b は東半分を幕末〜人頭大礎を充填して埋め戻し、西側断面は被砂五を整数。大型礎は礎石の可能性。	As-A 陪灰前 白銀町

表 14　遺構一覧表　道路状遺構　単位：cm

遺構名	面	走向方位	上端幅×下端幅×深さ	断面形	遺物	概要・覆土・所見	時期
SF-01	1面	N－8°－W	44 × 37 × 8	浅凹状	円形有孔ネル（墨汁）、マンガン釉土管	丁字状。掘りは確化した明褐灰色シルト質覆土、路面に推定。道地ガラス外瓶出土。瓶中～戦後。	近現代

表 15　遺構一覧表　埋桶遺構　単位：cm（瀬：瀬戸・美濃、肥：肥前、波：波佐見、唐：唐津、京：京焼系、絵：絵岡焼、伊：伊賀、丹：丹波）

遺構名	面	主軸方位	上端径／底径	深さ	平面形	断面形	遺物	概要・覆土・所見	時期
SJ-01	2面	—	上 107 × <89>　底径 86 × 80	27	楕円形	逆台形	瀬陶丸口鉢・灰釉植木鉢、京小杉鉢、漆椀「羽状家紋」	埋設桶残存。植底板上に細砂堆積。覆土中に抜き取った板材。SK06に切られる。SK25と重複。便所遺構と推測。漆椀「丸に隅立て四ツ目家紋」黒褐色覆土。	As-A 以降～19 世紀初頭
SJ-02	2面	—	73 × 70	13	円形	箱形	肥磁草花文仏飯具、	植底板上に細砂堆積。SK12に切られる。SK43・82を切る。	19 世紀前～中葉
掘り方	2面	N－85°－E	(95) × 72	28	楕円形	逆台形	瀬陶刺底灯明皿		
SJ-03	1面	—	上端 42/ 底 37	9	円形	箱形		SJ06 上の漆喰片・瓦片を青石状近代期を切る。便所遺構と推測。	明治 36 年以降か
掘り方	1面	—	底径 40 × <25>	18	略円形	逆台形			
SJ-04	2面	—	上端 50/ 底 41	26	楕円形	箱形	京灰釉湯反椀	掘り方深さ 38、SK22・24・25 に切られる。便所遺構と推測。	19 世紀前～中葉（As-A 以降）
SJ-05	2面	—	上端 48/ 底 37	23	円形	箱形	瀬陶輪花瑞花皿	下部は軟弱粘土層。	19 世紀前～中葉（As-A 以降）
掘り方	2面	N－7°－W	73 × (70)	30	略円形		京民釉湯反皿	便所遺構と推測。	
SJ-06	3面	—	上端 95/ 底 86	49	円形	箱形	肥磁草花文仏飯具、京梅樹文本膳椀、絵土瓶蓋	覆土下層は As-A 2次純層、上層は細砂・粘土のラミナ状堆積。As-A 流雑後、SD10 から溢れた水と土砂が堆積か。便所遺構と推測。	埋設は As-A 降灰前。
掘り方	3面	N－18°－W	底 114 × 116	59	不整円形	箱形			
SJ-07	2面	—	上端 50/ 底 40	15	円形	箱形	灰釉土瓶、旋盤畫蓋、神泡東女人形、漆椀（虫割状家紋）	上端径 50。底板上に細砂堆積。円礫・植材多数腐蝕。開側板を抜取って破壊。SK86・96・118 を切る。掘り跡埋出し。底板の下部に古い桶のタガのみ残存。便所遺構と推測。	As-A 以降
掘り方	2面	N－28°－W	上端 78 × (66)	20	円形	逆台形			
SJ-08	2面	—	上端 40/ 底 35	31	楕円形	箱形		SK82 層十中に廃棄。東平分は現丸で消滅。	19 世紀前葉以降
SJ-09	4面	—	上端 98/ 底 89	33	円形	箱形	肥磁半球鉢、京せんじ鉢、瀬陶中水注（底裏墨書「ろ井ょ」）	底板上に細砂堆積。覆土から抜取り後腐蝕された側板材多数出土。SK56・114 ～ 118 を切る。曲物・瀬陶植木鉢等出土。	（1724 年）～ As-A 降灰前
掘り方	4面	N－21°－W	底 115 × 105	36	楕円形	逆皿状			
SJ-10	4面	N－20°－E	55 × 75	62	楕円形	逆台形	瀬陶鉢、暗褐灰色粘質覆土。SJ09 より古い。		As-A 降灰前
SJ-11	4面	—	底径 43	44	円形	筒状	瀬北側には巾人用井戸を数設した 50cm 四方の足場、瀬内は褐灰色シルト質土と入須大円礫などで埋戻して廃棄。その後、SD10 護岸端で閉塞。SD24 を破壊する。白銀町。	瀬北側には巾人用井戸を数設した 50cm 四方の足場、瀬内は褐灰色シルト質土と入須大円礫などで埋戻して廃棄。その後、SD10 護岸端で閉塞。SD24 を破壊する。白銀町。	As-A 降灰前
SJ-12	4面	—	底径 <31>	34	円形		SE06 の覆土中に廃棄。瀬板の一部が残存。巾人用穴穴を覆土中に投棄・埋戻し後、上面に SD10 護岸端を破壊して閉塞。白銀町。		As-A 降灰前
SJ-13	4面	—	上端 33/ 底 28	—	円形	円形		底板とタガのみ残存。明褐灰色B混覆土。白銀町。	As-A 降灰前
掘り方	4面	N－9°－E	底 34 × 54	3	円形	略円形			

表 16　遺構一覧表　焼土・炉　単位：cm（瀬：瀬戸・美濃、肥：肥前、波：波佐見、唐：唐津、京：京焼系、絵：絵岡焼、伊：伊賀、丹：丹波）

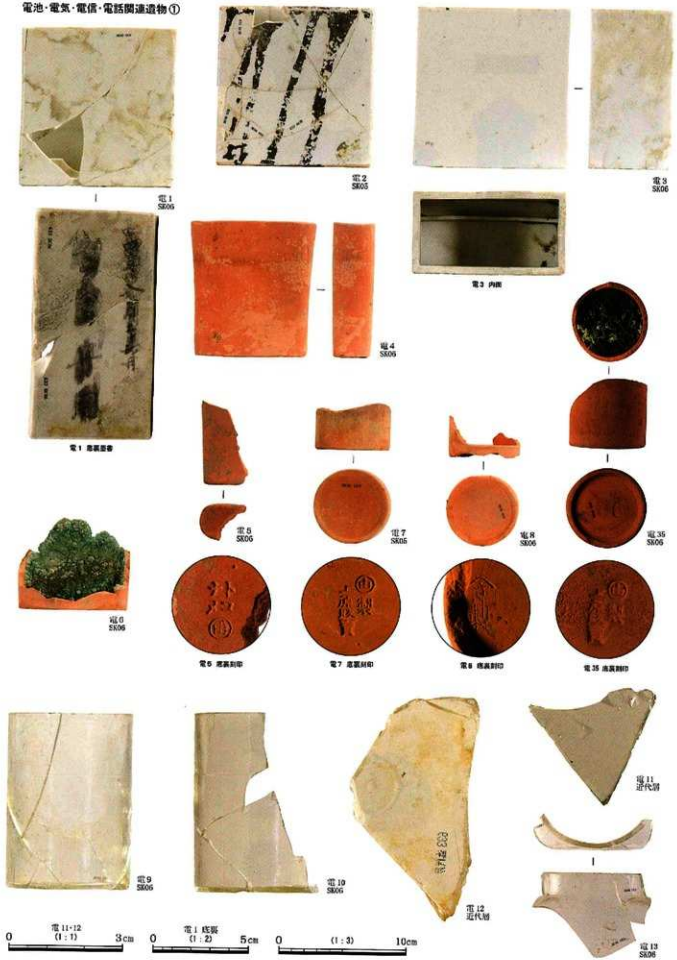
遺構名	面	主軸方位	長軸×短軸	深さ	平面形	断面形	遺物	概要・覆土・所見	時期
SL-01	1面	N－3°－E	188 × 33	8	溝状	浅凹状	二重鳳凰炉、瓦	焼土が堆積する溝状の遺構。炉の可能性あり。SK04（東側）に切られ、SK13 を切る。	明治 37 年以降か
SL-02	1面	N－5°－W	207 × 120	32	不整L字状	逆台形	肥磁磁反小鍋、産不行平鍋蓋	焼土・灰・炭化物は南側に集中し、全体に波上散布。	近代以降

表 17　遺構一覧表　井戸（SE）・礎石（SS）・蓋坑（ST）　単位：cm

（瀬：瀬戸・美濃、肥：肥前、波：波佐見、唐：唐津、京：京焼系、絵：絵岡焼、伊：伊賀、丹：丹波）

遺構名	面	主軸方位	長軸×短軸	深さ	平面形	断面形	遺物	概要・覆土・所見	時期
SE-01	1面	—	上端 58 × 55　掘り方 88 × 84	111 以上	円形	円筒形	レンガ、陶磁器	覆土上層は漆喰片多量。掘り方に白色粘土を充填し、桶井筒を埋設。井戸内は空隙多く、漆喰やセルタル目地のシンガブロックが投棄されていた。	明治 37 年以降
SE-02	4面	N－82°－E	130 × 101	84	不整隅丸長方形	円筒形	肥陶見込蛇の目釉刺身皿、旋盤畫蓋、蛇の目釉刺身皿	下部遺物は 17 世紀後半～ 18 世紀前葉。SD10（最初期）よりも新しい上限遺構。SD22 と重複。	18 世紀前葉以前
SE-03	4面	N－83°－W　掘り方 N－75°－W	00 × 50　掘り方 121 × 109	115 以上	隅丸方形状	円筒形	瀬陶尾呂徳利・二合半徳利、旋盤畫蓋、丸瓦、漆椀底裏「本手」、漆椀「稲穂水文様」	沃土上トレンチで上部消滅。軟弱粘質覆土。掘り方に粘土を充填し、壁面に目隠塀付。下部は瀬陶製。覆土下層から建築材・曲物・植材・炭化材等多数。徳利2点は全面釉付着。火災後に廃棄。SD13 よりさらか、もしくは同時。	18 世紀前葉（1724 年頃の火災後に廃棄・As-A 降灰前）
SE-04	4面	—	<84> × <20>	117 以上	不明	円筒形		軟弱な黒褐色粘質覆土。SD17 を破壊する。	As-A 降灰前
SE-05	4面	—	(70) × 70	112 以上	円形	円筒形		暗褐灰色粘質覆土。	As-A 降灰前
SE-06	4面	N－3°－E	(99) × 94	85 以上	隅丸方形	円筒形	井筒のタガ	軟弱な黒灰色粘質覆土。SJ12 に切られる。SD10（最初期）・SD20 より新しい。	As-A 降灰前
SE-07	4面	N－86°－W	径 (163)	100 以上	不整円形		未掘調。SK117・SX02 より古い。	未掘調。SK117・SX02 より古い。	As-A 降灰前
遺構名	面	主軸方位	長軸×短軸	深さ	平面形	断面形	遺物	概要・覆土・遺物・所見	時期
SS-01	1面	N－10°－W	50 × 45	34	方形		巾大～人間大円礫 10 点ほどを掘り方に充填した礎石。	礎石は巾人間大円礫 10 点ほどを掘り方に充填した礎石。	戦後か
SS-02	4面				方形状		礎石か。礎石の可能性あり。	礎石か。礎石の可能性あり。埋明石系粘砂、瀬陶陶半茶碗。	As-A 降灰前
SS-03	1面	N－20°－W	30 × 27	(20)	方形		円礎5点の礎石。SK21 を切る。	円礎5点の礎石。SK21 を切る。	戦後か
遺構名	面	主軸方位	長軸×短軸	深さ	平面形	断面形	遺物	概要・覆土・所見	時期
ST-01	2面	N－6°－W	東側：<71> × 43　西側：<62> × 31	17	楕円形	U字状	東側から船型（7～8月）の全身骨格出土。遺存状態良好。覆土は灰民純層。樹不明分から別多数。墨書は確認。西側は人骨未検出なから、同時期の墓坑の可能性高い。	東側から船型（7～8月）の全身骨格出土。遺存状態良好。覆土は灰民純層。樹不明分から別多数。墨書は確認。西側は人骨未検出なから、同時期の墓坑の可能性高い。	19 世紀前～中葉（As-A 以降）
	2面			11	楕円形	U字状			

電池・電気・電信・電話関連遺物①



遺物図版（1）電池・電気・電信・電話関連遺物 ①

遺物図版（2）電池・電気・電信・電話関連遺物 ②

遺物図版（3）近代基礎２・３・５・７／土坑　SK-01・02、SK-05①

遺物図版（4）土坑　SK-05②、SK-06・11・12・15・21～25・27・28、SK-35①

遺物図版（5）土坑　SK-35②、SK-38・39・44・55・56、SK-57①

遺物図版（6）土坑　SK-57②、SK-59・60・62・65、SK-66①

遺物図版（７）土坑　SK-66②、SK-67・68・69・79・81～84・86・100・101

遺物図版（8）土坑　SK-106・115・118・123・129 / 不明遺構　SX-01・02 / ピット　SP-21、P-22・45・92 / 溝　SD-03・06/ SD-10 ①

遺物図版（9）溝　SD-10②（上層：2～13、中層：14～23、下層：24～36・39・41）

遺物図版（10）溝　SD-10③（下層：37・39・40・42～61）

遺物図版（11）溝 SD-10④（下層：62～88・91・92）

遺物図版（12）溝　SD-10⑤（下層：89・90・93～95、最下層：96～111）

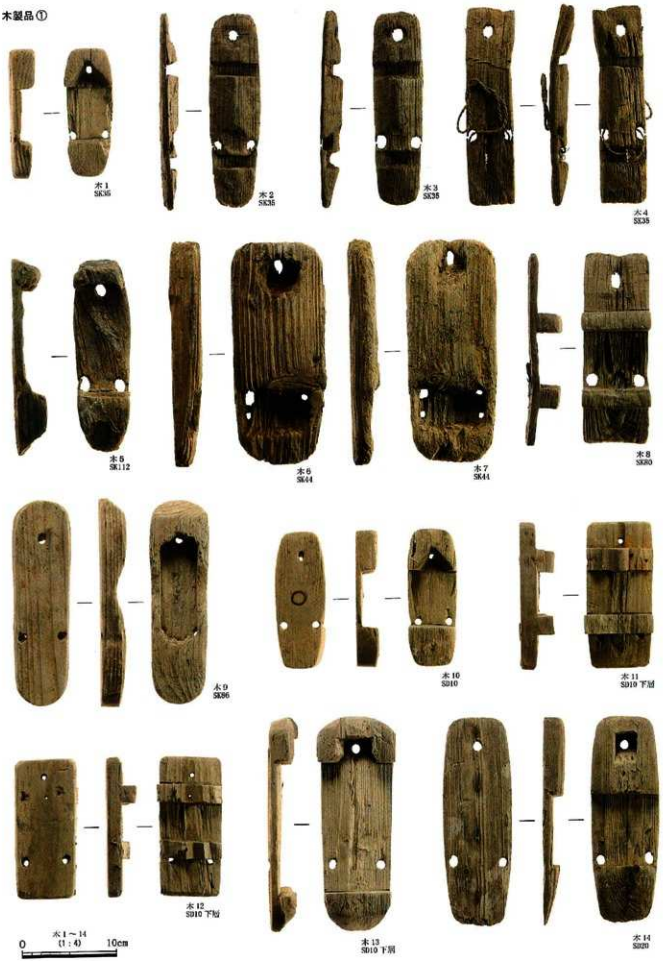
遺物図版（13）溝 SD-10⑥、SD-11・13・17・20・22／埋桶遺構 SJ-06①

遺物図版（14）土坑　SK-115／埋桶遺構　SJ-06②、SJ-07・09／井戸　SE-03・05/SL-02／礎石　SS-02／墓坑　ST-01／遺構外出土遺物①

遺構外出土遺物 ②

遺物図版（15）遺構外出土遺物 ②

木製品①



遺物図版（16）木製品① 木1～14（下駄）

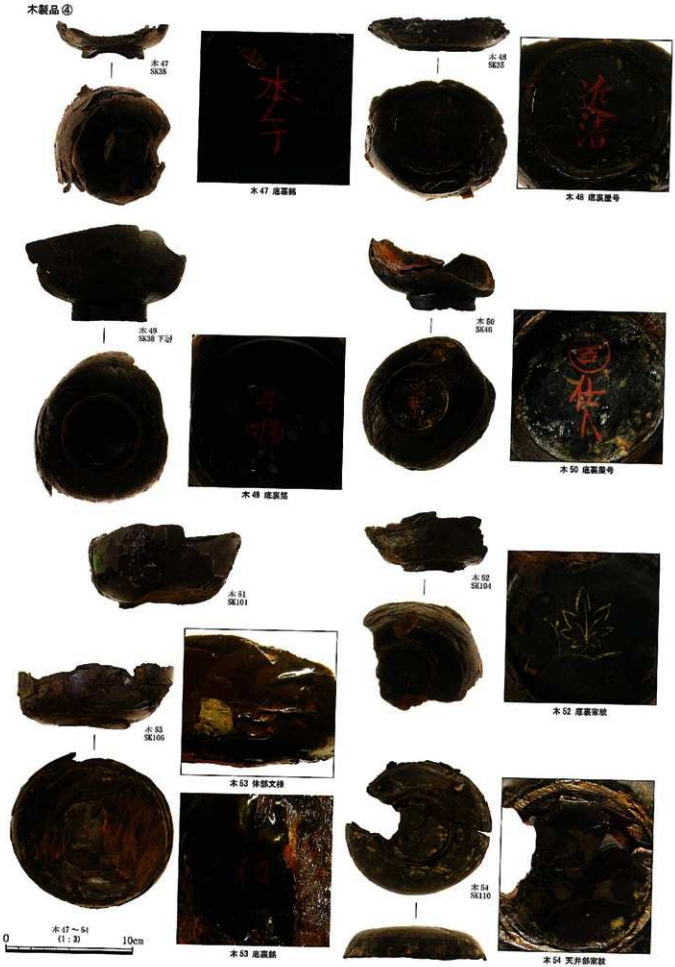
木製品②

遺物図版（17）木製品② 木15～29（農具・曲物・杓子・食器）

木製品③

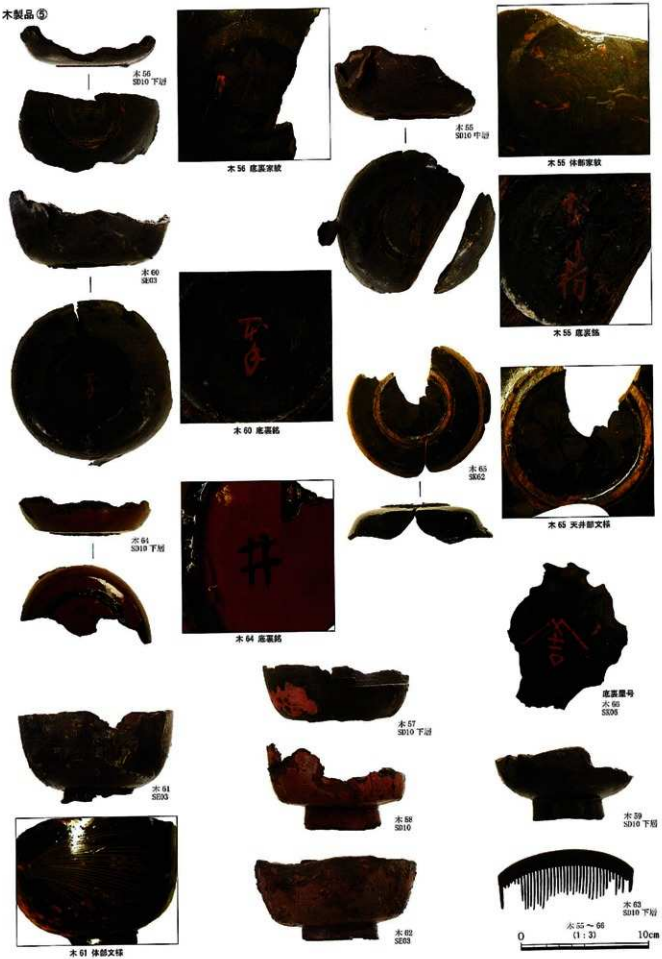
遺物図版（18）木製品③ 木30～46（柄杓・箒・膳・位牌・羽子板・炭化籾付着板・建築材・建具材・杭）

木製品④

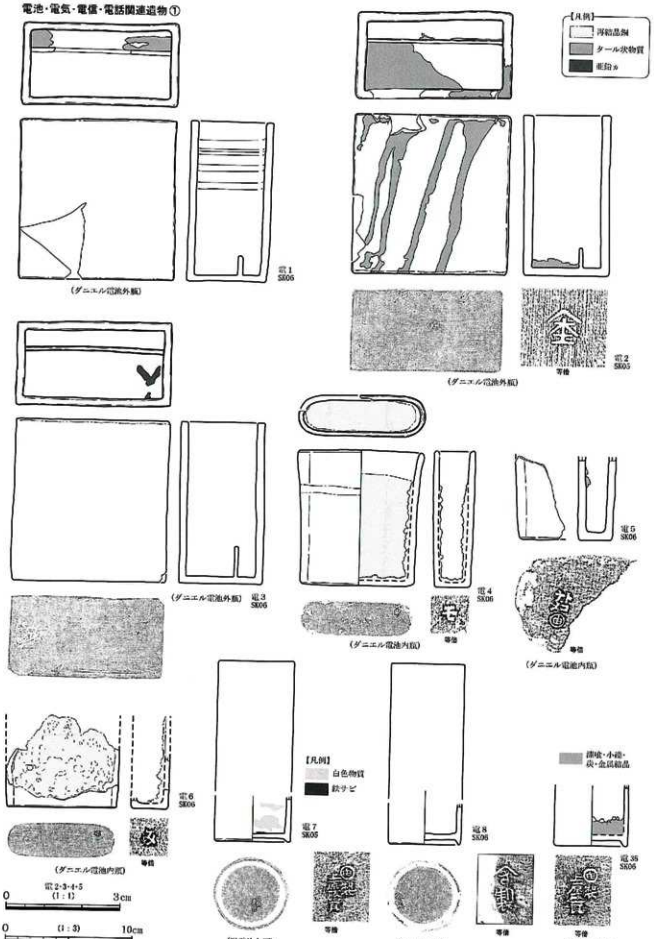


遺物図版（19）木製品④ 木 47 ～ 54（漆椀）

木製品⑤



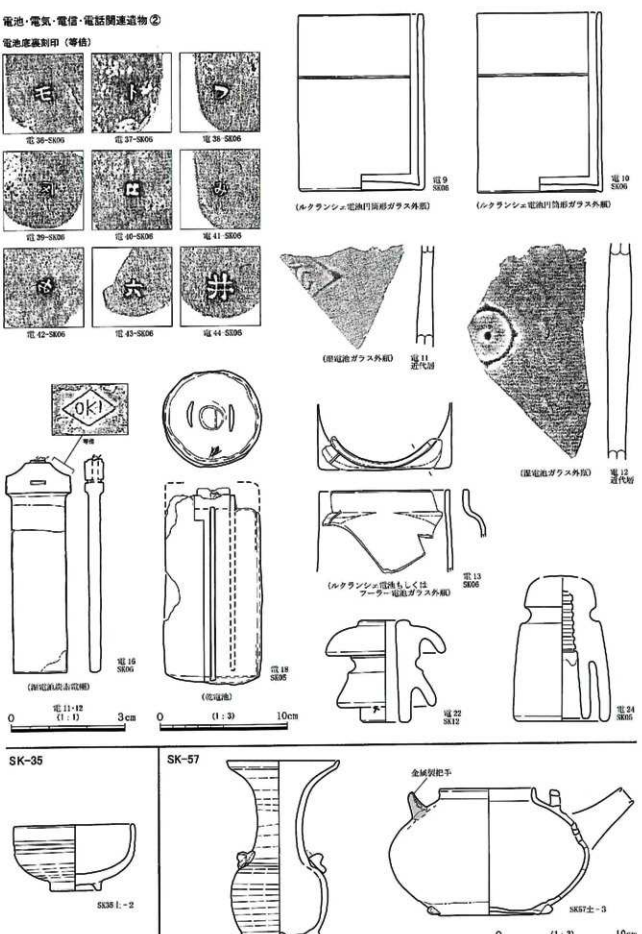
遺物図版（20）木製品⑤　木55～66（漆椀、櫛）



第 18 図 遺物実測図（1）電池・電気・電信・電話関連遺物①

電池・電気・電信・電話関連遺物②

電池底裏刻印（等倍）



第19図 遺物実測図（2）電池・電気・電信・電話関連遺物②／SK-35・57